日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡

－東京電力送電用鉄塔建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

１９９８

群馬県安中市埋蔵文化財発掘調査団

日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡

－東京電力送電用鉄塔建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

１９９８

群馬県安中市埋蔵文化財発掘調査団

日向後原遺跡

野毛良遺跡

山峰遺跡

山峰遺跡北調査区

序

安中市は、群馬県西部に位置しています。古代には東山道、近世には中山道、現在は国道18号が通る交通の要衝であり、宿駅が置かれ、文物の流れや人の行き来の盛んなところでした。また、市の南寄りを走る信越本線の開業は明治18年で、現在も多くの人の足となっています。さらに、平成９年10月には安中市北部を通るＪＲ長野行新幹線が開通し、安中榛名駅が営業を始めました。

市の中央よりやや南寄りを碓氷川が東流し、碓氷川の両岸には河岸段丘が造られています。ＪＲ信越線の南方の松井田町八城から安中市野殿の切通まで高さ60～80ｍの崖が続いていますが、ここから、天神川までが碓氷川上位段丘に位置づけられています。また、天神川から東側は、市の東南から延びる岩野谷丘陵が続いています。

今回、東京電力株式会社の送電線用鉄塔建設工事のために発掘調査を実施した、下間仁田の日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡・山峰遺跡北調査区は、この碓氷川上位段丘南端に東西に細長く続く丘陵状地形に位置しています。現在は桑畑や畑などになっていますが、古代の人々が生活した跡が残されていました。特に、中央の野毛良遺跡からは、狭い調査区内に８軒の住居址が折り重なって発見されました。また、一番東の山峰遺跡北調査区からは地震の亀裂が発見され、過去にこの地域で大規模な地震があったことを伝えています。さらに、西端の日向後原遺跡では、古墳時代前期に造られた古墳を確認しました。

終わりに、今回の発掘調査に際して協力していただいた皆様、そして、太陽の照りつける中、また、空っ風の吹く中、発掘調査に従事していただいた方々にお礼申し上げますとともに、この報告書が市の歴史資料として広く活用されることを願います。

平成１０年９月

安中市埋蔵文化財発掘調査団

団長　山　中　誠　次

例　言

1　本書は東京電力株式会社が実施した送電用鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査を実施した遺跡は日向後原遺跡、野毛良遺跡、山峰遺跡であり、遺跡略称はそれぞれＧ－25Ａ、Ｇ－25Ｂ、Ｇ－25Ｃである。

3　試掘調査は、平成７年度国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて行った。また、本調査及び遺物整理は東京電力株式会社群馬支店からの委託金により実施した。

4　試掘調査は平成7年7月20日～28日までの間に実施し、本調査は平成8年1月22日～2月16日までの間に実施した。また、遺物整理は、平成9年9月1日～平成10年７月3日までの間に断続的に実施した。

5　試掘調査は安中市教育委員会直営で行い、社会教育課文化財係主任大工原豊が担当した。本調査は安中市埋蔵文化財発掘調査団で行い、発掘調査員大工原豊及び深町真が担当した。

6　遺物整理作業の分担は以下のとおりである（敬称略・五十音順）。

本書の編集	深町
本文の執筆	主任大工原、主事井上慎也、中澤信忠、深町（執筆箇所は文章末に記入した。）
遺構図の作成	大塚清美、下マス江、須藤ダイ、田中利策、日田利江、深町、安田京子、
遺構図の実測・トレース	伊田百合子、金井京子、高瀬敦子、高林直美、筑井美佐子、平出紀子
縄文土器の拓本・実測・トレース	中澤、筑井
石器の分類・実測・トレース	井上
弥生土器の実測・トレース	筑井、深町
土師器・須恵器の拓本・実測・トレース	高瀬、筑井、平出、深町
鉄器の実測・トレース	平出

7　遺構の写真撮影は大工原、深町が行った。

8　発掘調査における記録、出土遺物はすべて安中市教育委員会で保管している。

9　発掘調査組織は下記のとおりである（敬称略）。

教育長（団長）	山中誠次
教育部長（副団長）	真下　仁（平成９年３月転出）

	阿久津浩司
社会教育課長（事務局長）	多胡泰宏（平成９年３月退職）
	横田道夫
文化財係長（事務局次長）	杉山　弘（平成９年３月転出）
	佐藤輝男
主任（発掘調査員）	大工原　豊
（文化財保護主事）	
同	千田茂雄
主事（発掘調査員・庶務係員）	深町　真
主事（発掘調査員）	井上慎也
社会教育指導員	中嶋昇太郎（平成９年３月転出）
	小板橋　靖

10　平成７年度の発掘調査従事者は下記のとおりである（敬称略、五十音順）。

飯塚洋子、大塚清美、下　マス江、清水　正、須藤ダイ、多胡　静、多胡好江、田島かつ子、田島せい子、田島　元治、田中利策、西村水子、日田利江、丸岡民子、安田京子、山口良江、山崎順子、山崎　恵

凡　例

1　遺構実測図の縮尺は１／80である。また、遺跡全体図は1/100（一部は1/120）である。また、これらの図の中の北マークは磁北である。

2　深さ40ｃｍ以上のピット、深さ20～39ｃｍまでのピットには網掛けで表示した。

深さ40ｃｍ以上のピット

深さ20～30ｃｍまでのピット

3　遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土　器：１／４

大形石器：１／８　中形石器：１／４　小形石器：２／３

鉄器：１／２

4　土層説明中の記号とその意味は以下のとおりである。

色調：暗＜明、明＞暗

しまり・粘性：◎　あり　　○　ややあり　　△　あまりない　　×　ない

混入物：◎　大量　　○　多量　　△　少量　　※　若干

ＲＰ：ローム粒子（溶け込んだ状態）、ＲＢ：ロームブロック（固まりの状態）

5　石器実測図中の記号は石材の略号であり、略号と石材の対応関係は以下のとおりである。

略号	Ｏｂ	Ｃｈ	Ｓｈ	ＢＡｎ	Ａｎ	ＳＳ	Ｓｃ	ＧｒＲ
石材	黒曜石	ﾁｬｰﾄ	頁岩・泥岩	黒色安山岩・緻密質安山岩	安山岩	砂岩	結晶片岩類	緑色岩類

6　スクレイパー類の二次調整に付された記号の意味は下記のとおりである。

▼　　：主剥離の打点と方向

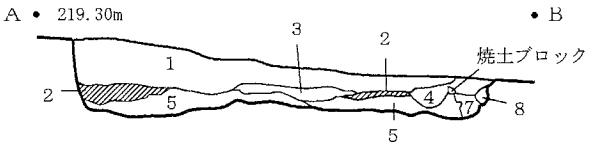
Ｐ　　：押圧剥離的な調整加工

Ｐ＋Ｄ：直接打撃と押圧剥離の併用または粗雑な押圧剥離

Ｄ　　：直接打撃による調整加工

Ｍ　　：使用などによると推定される連続した微細剥離（Micro-Flaking）

7　セクション図では貼床を網掛けで示した。



目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査の経緯　・・・1
1　調査に至る経緯　・・・1
2　調査の経過　・・・1
Ⅱ　調査の方法　・・・2
1　発掘調査の方法　・・・2
（1）調査の方針　・・・2
（2）調査区・グリッドの設定　・・・2
（3）遺構の調査方法・記録方法　・・・2
（4）調査機材　・・・3
2　整理の方法　・・・3
（1）整理の方針と目的　・・・3
（2）遺構の記載方法　・・・4
（3）遺物の記載方法　・・・4
（4）縄文土器の分類　・・・5
（5）石器の分類　・・・6
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境　・・・7
1　地理的環境　・・・7
2　歴史的環境　・・・7
3　層序　・・・12
Ⅳ　日向後原遺跡　・・・13
（1）遺跡の概要　・・・13
（2）縄文時代の遺構・遺物　・・・14
（3）古墳時代の遺構・遺物　・・・16
（4）平安時代の遺構・遺物　・・・19
（5）時期不明の遺構　・・・21
Ⅴ　野毛良遺跡　・・・22
（1）遺跡の概要　・・・22
（2）縄文時代の遺物　・・・23
（3）古墳時代の遺構・遺物　・・・25
Ⅵ　山峰遺跡　・・・36
（1）遺跡の概要　・・・36
（2）縄文時代の遺構・遺物　・・・37
（3）弥生時代の遺構・遺物　・・・55
（4）時期不明の遺構　・・・58
Ⅶ　成果と問題点　・・・65
（1）山峰遺跡における縄文時代
前期中葉の様相について　・・・65
（2）日向後原遺跡の古墳について・・・67

挿図目次

第１図　日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡と周辺遺跡　・・・９
第２図　遺跡位置図　・・・11
第３図　基本層序図　・・・12
第４図　日向後原遺跡全体図　・・・13
第５図　日向後原遺跡出土の縄文土器・石器　・・・15
第６図　Ｍ－２号溝、Ｄ－２号土坑出土の土師器　・・・16
第７図　Ｍ－１号溝、Ｍ－２号溝、Ｄ－２号土坑、Ｄ－３号土坑実測図　・・・17
第８図　Ｍ－２号溝、Ｄ－３号土坑セクション図、Ｋ－１号墳断面図　・・・18
第９図　Ｈ－１号住居址出土の土師器・須恵器・釘　・・・19
第10図　Ｈ－１号住居址実測図　・・・20
第11図　野毛良遺跡全体図　・・・22
第12図　野毛良遺跡出土の縄文土器・石器　・・・23
第13図　Ｈ－２号住居址・Ｈ－８号住居址実測図　・・・28
第14図　Ｈ－２号住居址遺物分布図　・・・29
第15図　Ｈ－３～Ｈ－５号住居址実測図　・・・30
第16図　Ｈ－３～Ｈ－５号住居址遺物分布図　・・・31
第17図　Ｈ－６号住居址実測図　・・・32
第18図　Ｈ－７Ａ・Ｂ号住居址実測図　・・・33
第19図　Ｈ－２・Ｈ－４号住居址出土の土器　・・・34
第20図　Ｈ－６・Ｈ－７号住居址出土の土器　・・・35
第21図　山峰遺跡全体図　・・・36
第22図　Ｊ－１号住居址実測図　・・・38
第23図　Ｊ－１号住居址遺物分布図　・・・39
第24図　山峰遺跡北調査区全体図　・・・40
第25図　土坑実測図　・・・41
第26図　Ｊ－１号住居址出土の土器　・・・44
第27図　北調査区出土の土器　・・・45
第28図　山峰遺跡出土石器の諸属性　・・・50
第29図　Ｊ－１号住居址出土の石器（１）　・・・51
第30図　Ｊ－１号住居址出土の石器（２）　・・・52
第31図　Ｊ－１号住居址出土の石器（３）　・・・53
第32図　北調査区及びＹ－１号住址出土の石器　・・・54
第33図　Ｙ－１号住居址実測図　・・・56
第34図　Ｙ－１号住居址遺物分布図　・・・57
第35図　Ｙ－１号住居址出土の弥生土器　・・・57
第36図　Ｍ－３号溝実測図　・・・58

表目次

第１表　作業工程別調査方法一覧表　・・・３
第２表　遺構の記載方法　・・・４
第３表　遺物の記載方法　・・・５
第４表　石器の分類（『大下原遺跡・吉田原遺跡』から）　・・・６
第５表　周辺遺跡一覧表　・・・10
第６表　基本層序土層説明　・・・12
第７表　日向後原遺跡平安時代住居址観察表　・・・19
第８表　日向後原遺跡出土土坑観察表　・・・21
第９表　野毛良遺跡古墳時代住居址観察表　・・・26
第10表　Ｈ－２号住居址出土編物石観察表　・・・29
第11表　縄文時代住居址観察表　・・・37
第12表　山峰遺跡北調査区土坑観察表　・・・42
第13表　弥生時代住居址観察表　・・・55
第14表　山峰遺跡出土土坑観察表　・・・58
第15表　日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡出土の縄文土器観察表　・・・59
第16表　山峰遺跡出土の縄文土器観察表　・・・60
第17表　山峰遺跡Ｙ－１号住居址出土の弥生土器観察表　・・・61
第18表　日向後原遺跡・野毛良遺跡出土の土器観察表　・・・61
第19表　野毛良遺跡出土の土器観察表　・・・62
第20表　日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡出土の石器観察表　・・・63
第21表　山峰遺跡出土の石器観察表　・・・64

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

平成５年７月22日、東京電力株式会社群馬支店（前橋市本町１－８－16）から送電線用鉄塔工事の照会があった。平成４年度に刊行した市内遺跡詳細分布調査報告書『安中市の遺跡』と照合の結果、該当箇所には遺跡地が含まれていることが判明したため、事業を実施する際には文化財保護の措置を講ずる必要性がある旨を、同群馬支店に伝えた。しかし、事業の性格からみてすべての遺跡地を回避することはできないので、発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることで、協議を進めることとなり、平成７年３月20日に同群馬支店から安中市教育委員会教育長宛に埋蔵文化財試掘依頼書が提出された。その後、平成７年７月になって地権者の補償等の問題が解決したため、同月21日～24日に６箇所予定されている鉄塔建設予定地のなかで、周知の埋蔵文化財包蔵地である５箇所で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、５箇所の内３箇所で地下に遺構があることが確認された。このため、本調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

2　調査の経過

試掘調査は平成７年７月21日～24日までの４日間実施した。

本調査は、平成８年１月22日～２月16日までの延べ26日間実施した。本調査は原則として、日向後原遺跡、野毛良遺跡、山峰遺跡、山峰遺跡北調査区の順番に実施した。

本調査の日程は次のとおりである。

日向後原遺跡	平成８年１月22日～１月31日
野毛良遺跡	平成８年１月24日～２月14日
山峰遺跡	平成８年１月26日～２月13日
山峰遺跡北調査区	平成８年２月９日～２月16日

２月16日にはすべての発掘調査を終了した。

（深町　真）

Ⅱ　調査の方法

１　発掘調査の方法

（１）発掘調査の方針

今回の発掘調査の調査区域は送電用鉄塔の基礎部分であり、遺跡の全体像を把握するには調査区が狭すぎる。このため、検出された遺構のみで遺跡の全体像を把握することはできない。したがって、住居址などの遺構単位で、その遺構が持つデータを記録していくことに重点を置いた。

（２）調査区・グリッドの設定

ａ．試掘調査

５箇所の鉄塔建設予定地のうち、No.20、No.21、No.22では基本的には鉄塔建設工事予定地内に幅１ｍのトレンチを２本、５ｍほどの間隔で設定した。ただし、鉄塔No.23、No.25では既存の鉄塔が調査区にあるため、１本のトレンチを設定した。

ｂ．本調査

試掘調査で遺構が検出された鉄塔No.20、No.21、No.23及びNo.23の仮鉄塔建設予定区域を調査区域として実施した。送電用鉄塔工事のために設置されていた杭を利用して、１辺10ｍの正方形の鉄塔建設予定区域を４ｍ毎のグリッドに区分した。さらに４ｍ×４ｍのグリッドの中を２ｍ×２ｍの小グリッドに区分して、左上から右下の順にａ、ｂ、ｃ、ｄに区分した。

（３）遺構の調査方法及び記録方法

今回発掘調査した遺構の調査方法は第１表のとおりである。平板測量以外の分層16分割法や土層ビニール転写法などは、昭和63年度～平成４年度まで実施された中野谷地区遺跡群の発掘調査の経験から導入されたものである。これらの方法については、『中野谷地区遺跡群』（1994年）、『中野谷松原遺跡一縄文時代遺構編一』（1996年）の中で詳述されているので、これらの文献を参照されたい。

作業の種類	住居址	土坑	ピット	溝	包含層
グリット杭	鉄塔工事用の杭を利用。				
表土掘削・除去	ミニバックホー（0.18㎥）				
遺構確認	ジョレン				
遺構精査・掘削	移植ゴテ ねじり鎌(両刃) 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌(両刃) 竹箆 中華用お玉	移植ゴテ ねじり鎌(両刃) 竹箆 中華用お玉 山芋掘用突き	移植ゴテ ねじり鎌(両刃) 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌(両刃) 竹箆
遺物取り上げ法	分層16分割法	一括	一括	２ｍ毎に分割。	グリッド毎。
遺構平面図	平板測量				
遺物分布図	デジタル方式				
土層断面図	ビニール転写法	ビニール転写法	ビニール転写法	ビニール転写法	ビニール転写法
遺構断面図	図面起こし	ビニール転写法	図面起こし	ビニール転写法	
遺構写真	リバーサル写真（35ｍｍ） モノクロ写真（35ｍｍ）				

第１表　作業工程別調査方法一覧表

（４）調査機材

今回の発掘調査で使用した主な機材は下記のとおりである。

〔**表土掘削**〕　ミニバックホー（0.18㎥）

〔**遺構確認・精査**〕　ジョレン、ねじり鎌（両刃）、移植ゴテ、手鍬、竹箆、プラスチック製荷札等

〔**ピット掘削**〕　突き（山芋掘り用）、中華用お玉等

〔**遺構測量**〕　レベル、スタッフ、平板、巻尺、農業用ロールビニール、コノエダブル等

（深町　真）

２　整理の方法

（１）整理の方針と目的

今回の発掘調査で得たデータは、遺跡の全体像を復元するためには断片的で、不十分なものである。したがって、分析の対象は住居址や古墳、土坑、溝といった遺構単位とならざるを得ない。こうした場合、各時期の遺構毎に他の遺跡と比較対比が可能な客観的データを抽出する必要がある。そこで、『中野谷地区遺跡群』の整理方法に準拠して、データの抽出を行った。また、今回の調査で得たデータでは分析及び解釈は不十分であると考えられるため、データの提示に主眼をおいた。なお、整理ではパーソナルコンピュータやスキャナー・デジタイザー等の情報処理機器をできるだけ利用し、データや図面をデジタル化し、後での利用がしやすいよ

うにした。

（2）遺構の記載方法

今回、発掘調査した遺跡では、遺構として住居址、土坑、溝、古墳あるいは方形周溝墓等が存在している。これらの遺構の記載方法は第２表のとおりである。

遺構の種類	掲載図面等	時期決定の基準	備　考
住居址	平面図 遺物分布図（デジタル方式） 土層断面図 土層観察表 遺構断面図 竈断面図 住居址観察表	竈出土土器 床直遺物 最下層遺物	住居址に重複がある場合には、土層の堆積状態から新旧の把握に努めた。 主柱穴は調査時に配列を検討して確定に努めたが、はっきりしない場合には遺物整理の段階で柱穴の深さや位置を検討して確かめた。
土坑	平面図 遺構断面図 土層断面図 土層観察表 土坑観察表		平面形態で、円形・楕円形・長方形・不定形に区分し、また、断面形態で、皿状・碗状・袋状に分けた。
溝	平面図 土層断面図 土層観察表		
古墳あるいは方形周溝墓	平面図 墳丘断面図 周堀土層断面図 周堀土層観察表 遺物分布図		

第２表　遺構の記載方法

（3）遺物の記載方法

今回の発掘調査した遺跡では、遺物としては石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。これらの遺物の記載方法は第３表のとおりである。

遺物の種類	分類方法	図示した遺物	備　考
石器	『大下原遺跡・吉田原遺跡』の分類基準に基づいて、住居址毎の系列組成・器種組成・重量組成・石材組成を示すにとどめた。	狭義の石器に属するものを中心に図示した。	石器製作段階の情報と使用段階の情報を合わせて示した。 石器には石材の略称を付した。 出土位置・出土層位を付した。
縄文土器	「（4）縄文土器」の分類に記載されている分類基準に基づく。	各層毎に口縁部・底部の残存するもの、時期的特徴を有するものを選択した。	出土位置・出土層位を付した。 掲載資料については、遺物観察表をつけた。
樽式土器	飯島・若狭編年（飯島克巳・若狭徹、1988年）に従う。		
古墳時代の土師器・須恵器	中沢編年（中沢悟、1996・1997年）及び坂口編年（坂口一、1986年）に従う。		
奈良平安時代の土師器・須恵器	坂口・三浦編年（坂口一・三浦京子、1986年）に従う。		

第３表　遺物の記載方法

（深町　真）

（4）縄文土器の分類

今回発掘調査した日向後原遺跡・野毛良遺跡、山峰遺跡、山峰遺跡北調査区出土縄文土器を以下のように細別分類した。

第１群土器：前期中葉の繊維を含む一群を一括した（有尾式土器）。

第２群１類土器：前期後葉の諸磯ｂ式土器を一括した。

２類土器：前期後葉の諸磯ｃ式土器を一括した。

第３群土器：中期前葉に相当する一群を一括した（五領ケ台式土器）。

第４群１類土器：中期中葉の阿玉台式土器を一括した。

２類土器：中期中葉の勝坂式土器を一括した。

第５群１類土器：中期後葉の加曽利Ｅ３式土器を一括した。

２類土器：中期後葉の加曽利Ｅ４式土器を一括した。

第６群土器：後期前葉に相当する一群を一括した（称名寺式土器）。

（中澤信忠）

（5）石器の分類

石器の分類については第４表のような『大下原遺跡・吉田原遺跡』（1993年）の分類に従った。

石器種別	器種	技術的特徴	石材種別	石材名	石材の特徴
A類	石鏃 石錘 スクレイパーA類 リタッチドフレイクA類 楔形石器 石匙A類	押圧剥離を多用	Ⅰ類	黒曜石 チャート 硬質頁岩 黒色安山岩 めのう	硬質で粘度が少ない。 剥片剥離に最も適し、鋭利。
B類	打製石斧 スクレイパーB類 リタッチドフレイクB類 石匙B類	直接打撃を多用	Ⅱ類	頁岩 輝緑凝灰岩	多少軟質でやや粘度がある。 剥離に適するが、鋭利は劣る。
C１類 C２類	磨石 凹石 石皿 敲石 台石	使用痕跡により石器と認識される。	Ⅲａ類	安山岩	軟質で粘度がある。 剥離に不適で剥離面は粗面。 耐火性に富む。
	砥石		Ⅲｂ類	(牛伏)砂岩	軟質で粘度が少ない。 剥離に不適でボロボロと崩れる。
D類	石棒 多孔石 棒状礫 丸石	直接打撃・敲打・研磨を複合的に用いる。	Ⅳ類	結晶片岩	節理が発達している。
E類	磨製石斧		Ⅴ類	緑色岩類	重量があり比較的軟質で粘度がある。 剥離にあまり適さず、剥離面は粗面。
F類	石製品 垂飾		Ⅵ類	その他	多種多様な希少石材。

第４表　石器の分類（『大下原遺跡・吉田原遺跡』から）

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

1　地理的環境

安中市（以下市と略す）は、群馬県西部に位置し、関東と長野県を結ぶ交通の要路にあたる。市には古代には東山道が通り、野後駅が置かれた。近世には中山道が通り、安中宿・板鼻宿の２つの宿場が設置され、多くの文物や諸国の人々が往来した。

地形的に見ると、上信国境の碓氷峠付近に源を発する碓氷川が市のほぼ中央を横断していて、その両岸に河岸段丘を発達させている。碓氷川右岸の中野谷から天神川左岸までが上位段丘に位置する。碓氷川左岸の安中・原市は中位段丘、碓氷川右岸の磯部は下位段丘に位置する。また、市の東南の岩野谷から上間仁田まで延びる岩野谷丘陵は、天神川によって、碓氷川上位段丘と区切られている。岩野谷丘陵の最高峰である崇台山は安山岩が削り残された残丘であり、崇台山の他にも天王山などの残丘がある。碓氷川上位段丘は猫沢川及びその支流や天神川の支流により浸食されていて、浸食谷が形成されている。碓氷川上位段丘の中野谷・鷺宮と下間仁田・大竹の間は猫沢川の浸食谷で分断されている。猫沢川は池田で、天神川は中宿で、碓氷川下位段丘を流れる柳瀬川に合流し、柳瀬川は国道１８号の鷹巣橋西詰付近で碓氷川と合流している。

今回調査した日向後原遺跡、野毛良遺跡、山峰遺跡の所在する場所は、碓氷川上位段丘南端に東西に細長く続く丘陵状地形に位置する。この南側には天神川が南西方向から北東方向に流れ、約30ｍの段丘崖を形成している。さらに、この丘陵状地形の北側には天神川の支流である丸子沢が同じく南西方向から北東方向に流れ、碓氷川上位段丘を浸食して浸食谷を形成し、山峰遺跡の少し下流で天神川に合流している。天神川はその両側に谷底平野を形成している。

（深町　真）

2　歴史的環境

日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡の周辺の遺跡を概観する。

上間仁田の道前久保遺跡は、縄文時代前期前半～後期前半の拠点集落遺跡である。今のところ猫沢川東方の碓氷川上位段丘では縄文時代の拠点集落は道前久保遺跡しか確認されていない。猫沢川西方の碓氷川上位段丘には縄文時代前期の大規模拠点集落遺跡である中野谷松原遺跡や大下原遺跡、縄文時代中期の大規模拠点集落遺跡である砂押遺跡が調査されている。また、中野谷松原遺跡の西方には縄文時代後期の配石墓や縄文時代晩期の環状列石が検出された天神原遺跡が存在する。

弥生時代の集落遺跡としては、猫沢川上流右岸にある注連引原遺跡・同Ⅱ遺跡が調査されて

いる。注連引原遺跡・同Ⅱ遺跡は縄文時代晩期から弥生時代中期の集落遺跡である。注連引原Ⅱ遺跡の西に位置する大下原遺跡にも弥生時代後期の集落が存在する。猫沢川西方の碓氷川上位段丘に位置する荒神平・吹上遺跡では弥生時代後期の大規模集落遺跡が調査されている。また、下間仁田の三本松古墳東方の安中三本木遺跡は弥生時代中期の再葬墓だと考えられる。

猫沢川東方の碓氷川上位段丘に位置する大竹の諏訪ノ木遺跡は、古墳時代の樽式土器と赤井戸・吉ヶ谷系と古式土師器（石田川式）の共伴が認められ、集落は６・７世紀まで継続している（註１）。下間仁田の蔵畑遺跡では古墳時代中期の豪族の居宅の堀が確認されているが、古墳時代以降の諏訪ノ木遺跡と蔵畑遺跡はセットで大規模な集落遺跡を構成している（註２）。上間仁田にある岩野谷丘陵の残丘上にはこの蔵畑遺跡の豪族居宅跡と同時期の経塚古墳が築造されている（註３）。墳形ははっきりしないが、竪穴式石室からは滑石製模造品が出土した。また、山峰遺跡から丸子沢を隔てた北方には古墳時代後期の三本松古墳が造られている。

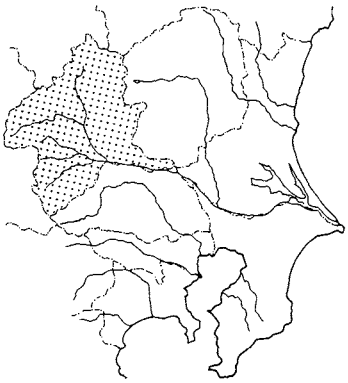
猫沢川東方の奈良平安時代集落としては、上間仁田の道前久保遺跡や下間仁田の蔵畑Ⅱ遺跡がある。特に蔵畑Ⅱ遺跡では９世紀後半の集落から「久万」「得」と書かれた墨書土器や、石帯、瓦が出土したことから、公的色彩のある集落であると考えられる（註４）。猫沢川西方では鷺宮の上ノ久保遺跡や荒神平・吹上遺跡で奈良平安時代の集落遺跡が確認されている。また、中野谷の下塚田遺跡・中原遺跡・細田遺跡等から「牧」の放牧施設と推定される大規模な溝による区画が確認されている。

また、鷺宮字下平にある、市指定重要文化財「聖観音碑」（オビンズル様）は鎌倉時代後期の安山岩製の板碑であるが、ここに湧水点があり、猫沢川東方では、これを取り囲むように遺跡が存在していることがわかる（註５）。

ここで注意しなければならないのは、歴史時代の大地震による亀裂が猫沢川東方の遺跡（道前久保遺跡、蔵畑遺跡、蔵畑Ⅱ遺跡、諏訪ノ木遺跡、山峰遺跡北調査区）で確認されていることである（註６）。しかし、その時期についてはまだよくわかっていない。

（深町　真）

註1～註6 これらについては大工原 豊氏のご教示による。

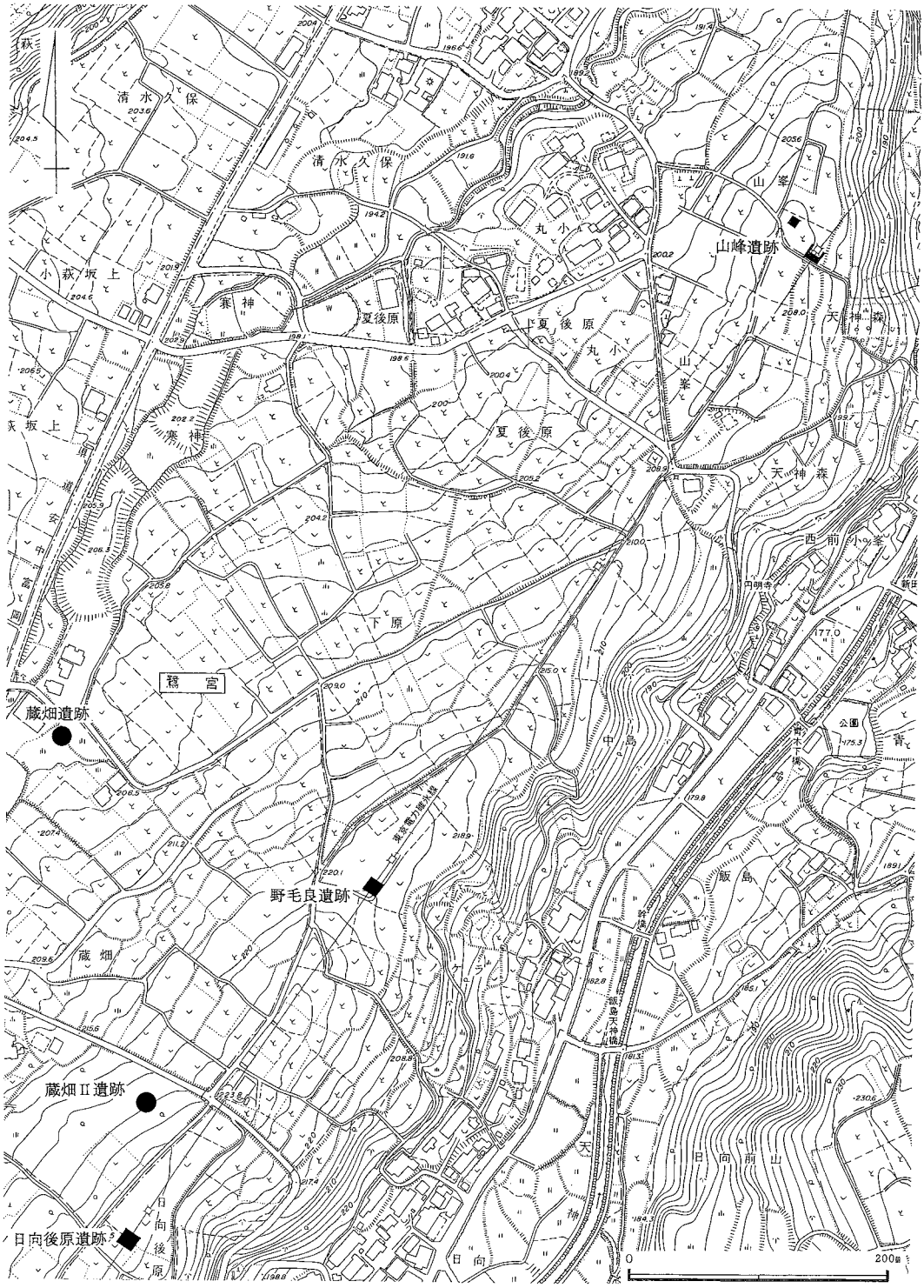


第１図　日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡と周辺遺跡

番号	遺跡名	旧	縄文						弥生		古墳				奈良	平安	中世	近世
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後	終				
1	上ノ久保				＊	○	＊			○			○	○	◎	◎	△	
2	桜林														○	○		
3	五ヶ														○	○		
4	荒神平・吹上				＊	○	△			◎	○	○	◎	◎	◎	◎		
5	道前久保				◎	○	○								○	○		
⑥	日向後原										◎					○		
⑦	野毛良										＊		○	○	○	○		
8	蔵畑Ⅱ															◎		
9	蔵畑											○	○					
10	諏訪ノ木									△	◎		○	○	○			
⑪	山峰				○	＊				○	○							
12	経塚古墳											◎						
13	堀ヶ谷戸												○	○	◎	◎		
14	西殿				＊									○	○	○		
15	平塚				＊									◎	＊			○
16	三本木Ⅲ															○		○
17	三本木Ⅱ				◎	△										○		
18	落合Ⅱ				＊	＊								△		＊		
19	落合	＊			＊	＊			＊	＊			△	△	＊	＊		
20	落合原				○													
21	北東・堤下				◎	△							◎	○	○			
22	下塚田				○	△								○	○	○		
23	北下原				○										?	○		
24	中原			△	◎	＊			＊			○			?	○	○	
25	金井谷戸			○	△													
26	東畑				◎	○												
27	下宿東	＊			◎	○	○				?	◎			?	○		
28	注連引原				○				○									
29	注連引原Ⅱ	＊			△	＊	△		○							○		
30	大下原				◎	△				○						○		
31	吉田原				○													
32	下原								＊									
33	細田				◎	○						○	○	○	?	◎		
34	和久田				△	＊						○			?	○		
35	東向原				＊	＊									?	?		
36	天神原				○	○	◎	◎				○			◎			
37	中野谷松原	＊	＊		◎	◎	○						◎		?	?		
38	田中田・久保田											◎				○		
39	諏訪辺															○		
40	西裏・西新井				△	△						○	◎	◎	◎	◎		
41	松井田工業団地					＊			○		○	○	◎	◎	◎	◎		
42	塩ノ久保											◎						
43	築瀬二子塚古墳		＊		＊	○	＊						◎					△
44	清水				○	＊									○	○	◎	
45	杉名薬師									○			○	○	○			
46	後閑3号墳												◎					
47	砂押					◎										○		
48	三本松								＊									
49	尾崎館址																◎	

◎　住居５軒以上・古墳・記念物　　○　住居５軒以下・大溝・水田・畑など
△　遺構有り（土坑・溝など）　　＊　遺物のみ

第５表　周辺遺跡一覧表


山峰遺跡
野毛良遺跡
蔵畑遺跡
蔵畑Ⅱ遺跡
日向後原遺跡
鵜宮
清水久保
小萩坂上
寒神
夏後原
上夏後原
丸小
山峯
天神森
下原
中島
飯島
日向前山
日向
西前
円明寺
公園
0
200m

第２図　遺跡位置図

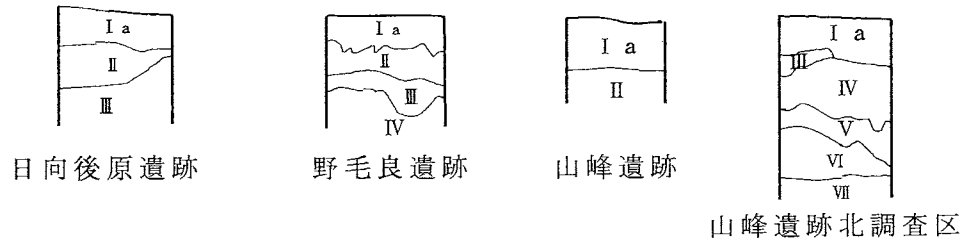
3　層序

本遺跡での基本層序は第３図のとおりである。この地域における示準テフラは、天明３年（1783年）に降下したＩｂ層（浅間Ａ軽石、（Ａｓ－Ａ））、天仁元年（1108年）に降下したⅡｂ層（浅間Ｂ軽石、（Ａｓ－Ｂ））、約13,000年前に降下したⅥ層（浅間板鼻黄色軽石、（Ａｓ－ＹＰ））であるが、今回調査した遺跡ではＩｂ層やⅡｂ層が純層で堆積している場所は少なかった。日向後原遺跡ではＩａ層直下が遺構確認面となった。また、野毛良遺跡ではⅢ層直下が遺構確認面となった。山峰遺跡ではＩａ層直下が遺構確認面となった。山峰遺跡北調査区ではⅢ層直下が遺構確認面となった。

（深町　真）

	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					Ａｓ－Ａ	Ａｓ－Ｂ	Ａｓ－ＹＰ	
Ｉａ層	黒褐色土層		△	△	○			
Ｉｂ層	灰白色軽石層	Ｉａ＜Ｉｂ	×	×	◎			Ａｓ－Ａ純層
Ⅱａ層	黒色土層	Ｉｂ＞Ⅱａ	△	△		○		
Ⅱｂ層	灰褐色軽石層	Ⅱａ＜Ⅱｂ	×	×		◎		Ａｓ－Ｂ純層
Ⅲ層	黒褐色土層	Ⅱｂ＞Ⅲ	△	○				
Ⅳ層	暗褐色土層	Ⅲ＜Ⅳ	○	○				
Ⅴ層	黄褐色粘質土層	Ⅳ＜Ⅴ	◎	◎			※	
Ⅵ層	黄色軽石層	Ⅴ＜Ⅵ	×	×			◎	Ａｓ－ＹＰ純層
Ⅶ層	明褐色粘質土層	Ⅵ＜Ⅶ	◎	◎				

第６表　基本層序土層説明

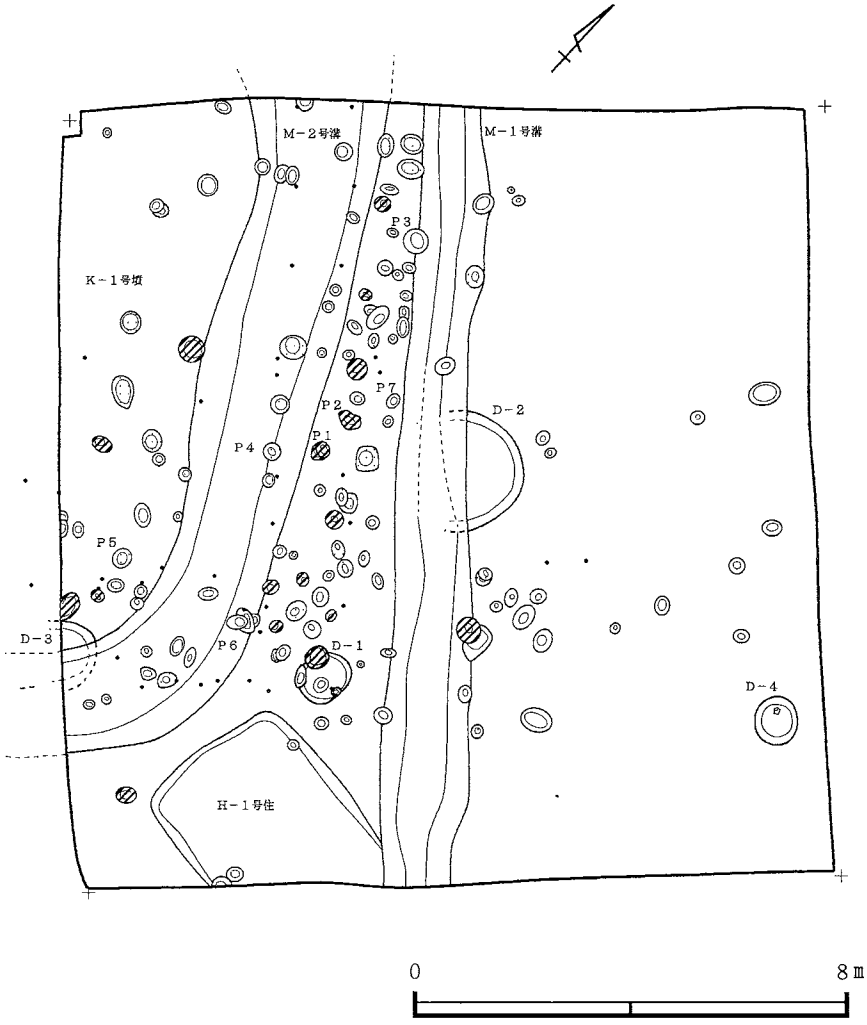


第３図　基本層序図

Ⅳ　日向後原遺跡

（1）遺跡の概要

日向後原遺跡からは、縄文時代の土坑３基、古墳時代前期の古墳１基、平安時代の住居址１軒、時期不明の溝１条と土坑１基、ピット群を検出した。（第４図）



第４図　日向後原遺跡全体図

（２）縄文時代の遺構・遺物

ａ．遺構（第７図、第25図）

縄文時代の土坑を２基検出した。Ｄ－２号土坑、及びＤ－４号土坑である。Ｄ－２号土坑からは第５群２類土器（加曽利Ｅ４式土器）が出土した。Ｄ－４号土坑から第５群１類土器（加曽利Ｅ３式土器）と石皿が出土した。Ｄ－４号土坑は平面円形で深さ0.2ｍの浅い掘り込みである。Ｄ－２号土坑はＭ－１号溝によって南側半分を壊されているが、元々は平面円形の深さ0.35ｍの土坑であると思われる。

（深町　真）

ｂ．遺物

土器

総体的にみると、日向後原遺跡から出土した縄文土器は少量であるが、中期後半（第５群）を主体としている。

Ｍ－２号溝出土の土器（第５図１、２）

１は第３群土器で、地文に原体ＲＬの単節斜縄文を施文後、横位の結節縄文が施文される、胎土に多量の石英を含む五領ケ台式併行の資料である。２は、小波状の棒状工具による沈線を持ち、胎土に多量の雲母を含む第４群１類土器の阿玉台式土器である。

Ｄ－２号土坑出土の土器（第５図３）

３は断面三角の隆帯に原体ＲＬの単節斜縄文を施文した第５群２類土器の加曽利Ｅ４式土器である。

Ｄ－４号土坑出土の土器（第５図４）

４は、原体Ｌの無節斜縄文を施文し、磨り消しを行う第５群１類土器の加曽利Ｅ３式土器である。

（中澤信忠）

石器

［石器組成］

全部で14点検出されている。本遺跡で検出された石器は、Ｄ－４号土坑において石皿の破片が出土した以外、遺構に伴わないものである。また、出土した土器も少量であるため、出土した石器の帰属時期は不明である。ここでは検出された石器を一括して報告することにする。

石器の内訳はスクレイパーＡ類１点、剥片Ａ類３点、打製石斧２点、スクレイパーＢ類１点、剥片Ｂ類３点、凹石１点、石皿３点である。このうち主要器種の４点を図示した。

［石器各説］（第５図）

Ａ類石器

［スクレイパーＡ類］　図示していないが押圧剥離が施された刃部破片１点が検出されている。黒色安山岩製である。

Ｂ類石器

［打製石斧］（第５図５）２点検出されている。２点とも欠損している。４は刃部が欠損している。中央部に摩耗痕が観察されるためⅡ形態（平面形：短冊形～撥形・断面形：レンズ状・両刃）と考えられる。

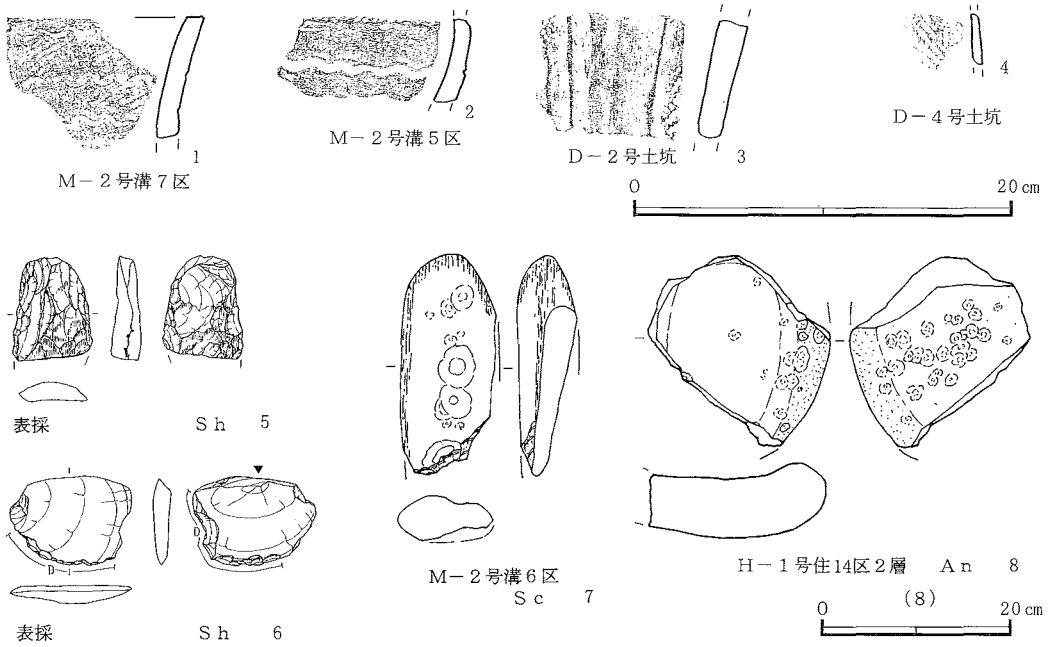
［スクレイパーＢ類］（第５図６）　１点検出されている。５はⅡ形態（直接打撃による調整）に分類される。頁岩製である。

Ｃ１類石器

［凹石］（第５図７）　１点検出されている。６はⅢｂ形態（棒状・凹→磨）に分類される。結晶片岩製である。

［石皿］（第５図８）　３点検出されている。３点とも欠損している。７はⅡａ形態（楕円形・作業面は凹面）に分類される。他２点は作業面が凹面と作業面が平坦なものの破片である。全て安山岩製である。

（井上慎也）



第５図　日向後原遺跡出土の縄文土器・石器

（３）古墳時代の遺構・遺物

ａ．遺構

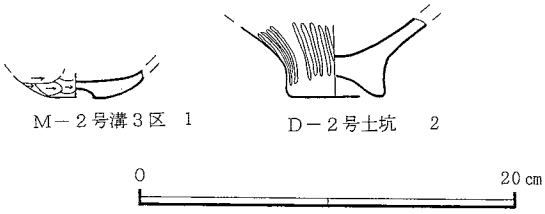
Ｋ－１号墳・Ｍ－２号溝（第７図・第８図）

Ｋ－１号墳は調査区の北西隅から検出された。全体を調査できなかったが、古墳（Ｋ－１号墳）の一部と推定される。Ｍ－２号溝はこのＫ－１号墳の周堀の一部であり、上幅は４ｍを計り、その断面を見ると、レ形を折り返したような形を呈していて、西側はＫ－１号周溝墓の墳丘から比較的なだらかに傾斜し、東側は急傾斜している。また、平面形はＬ形を折り返したような形をしていて、直線部は約９ｍ、屈曲部は約２ｍを計る。Ｋ－１号墳は、Ｍ－２号溝３区から出土した坩から古墳時代前期（４世紀後半）の築造と推定される。

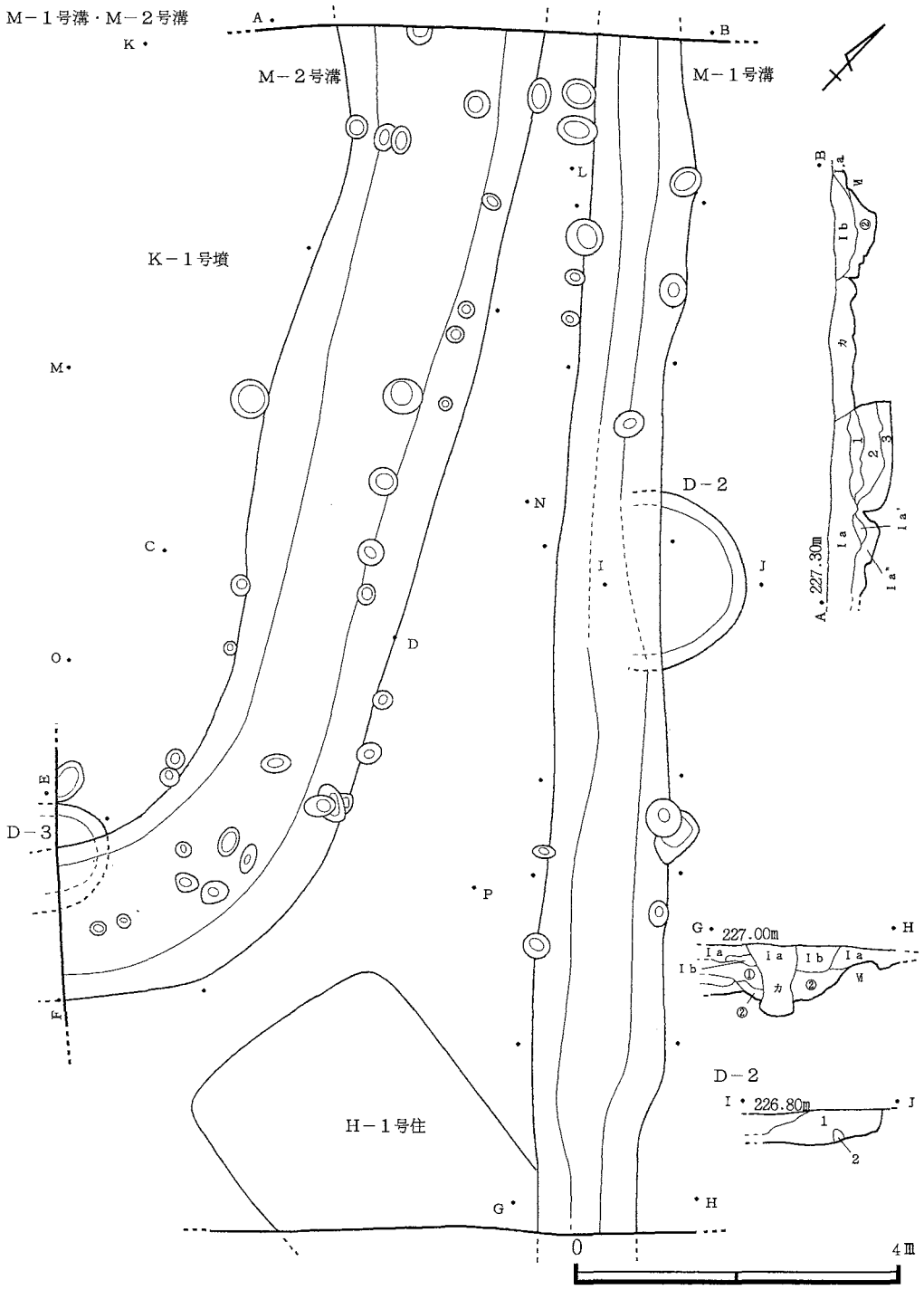
ｂ．遺物（第６図）

第６図１はＭ－２号溝３区から出土した坩の底部で、丸底の底部に凹みを持ち、古式土師器の特徴を有する。同２はＤ－２号土坑から出土した甕で、底部が上げ底気味になっている。外面を篦磨きしている。

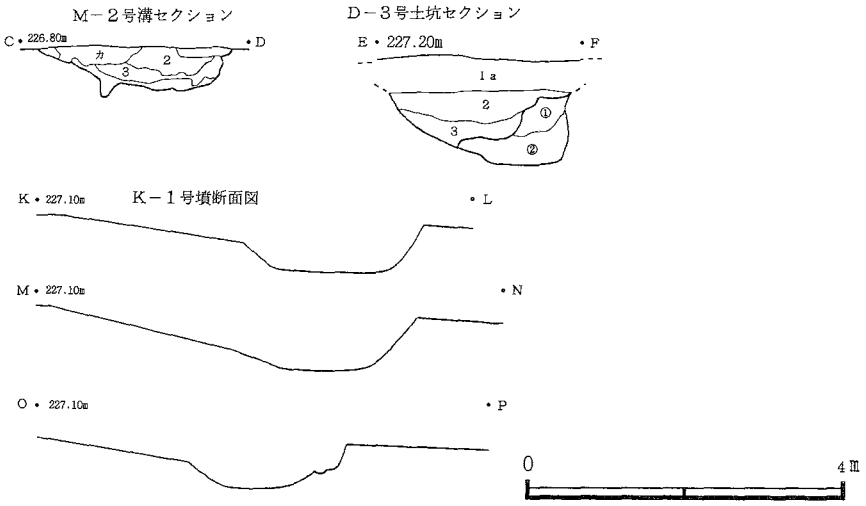
（深町　真）



第６図　Ｍ－２号溝、Ｄ－２号土坑出土の土師器



第7図　M－1号溝、M－2号溝、D－2号土坑、D－3号土坑実測図



G－25A、M－1

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
M－1	①	褐色土層10YR		Δ	○	Δ	※	※
	②	暗褐色土層10YR	①>②	Δ	○	※	※	※

G－25A、M－2

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
M－2	1	暗褐色土層10YR		Δ	○	×	×	※
（C－D）	2	黒色土層	1>2	Δ	○	×	×	※
	3	黒褐色土層	2<3	※	○	※	※	Δ

G－25A、M－1・D－2

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
M－1	②	暗褐色土層		Δ	○		※	※
D－2	1	黒褐色土層		Δ	○	※	※	Δ
	2	明黄褐色土層	1<2	◎	○		※	※

G－25A、D－3

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－3	1	褐色土層10YR		○	◎	◎	◎	Δ
	2	暗褐色土層	1<2	○	○	Δ	Δ	○

第８図　Ｍ－２号溝、Ｄ－３号土坑セクション図、Ｋ－１号墳断面図

（4）平安時代の遺構・遺物

a．遺構

H－1号住居址（第10図）

平面形は東西に長い長方形であると推定され、周溝を持たない。住居内にあるピットはいずれも20cmより浅く、また配列もしていない。床には貼床が見られた。

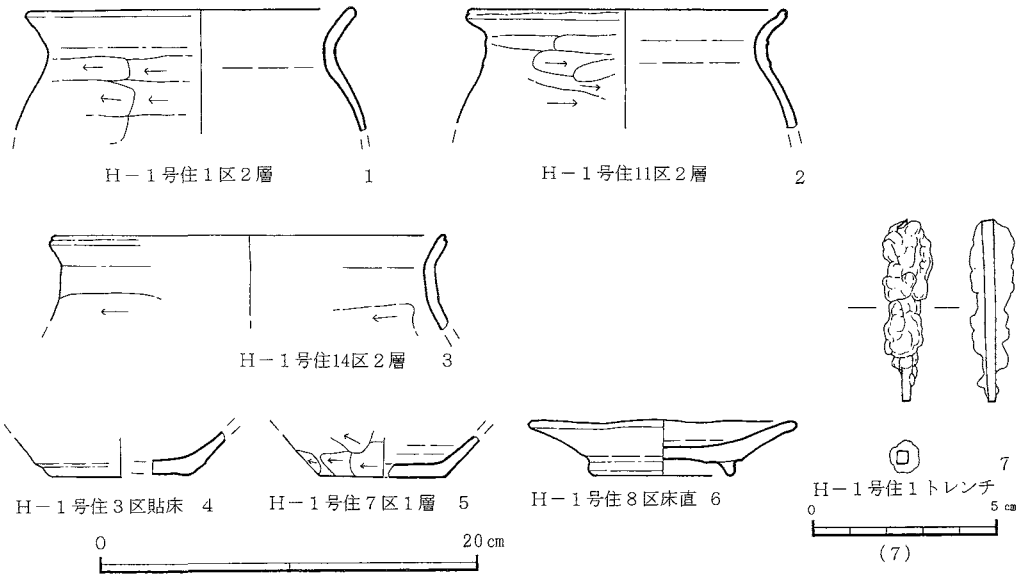
遺物出土状態　遺物の出土状況にはある程度偏りが認められる。重量的には4区、9区、15区に集中している。

住居名	平面形	規模（m）			床面	壁溝	主軸方向	貯蔵穴	土坑	柱穴	竈			時期
		長軸	短軸	深さ					(床下)		方向	主軸方法	構造	
H-1号住	長方形	—	3.9	0.4	貼床	—	N-97.0°-E	—	—	—	—	—	—	9世紀第4四半期

第7表　日向後原遺跡平安時代住居址観察表

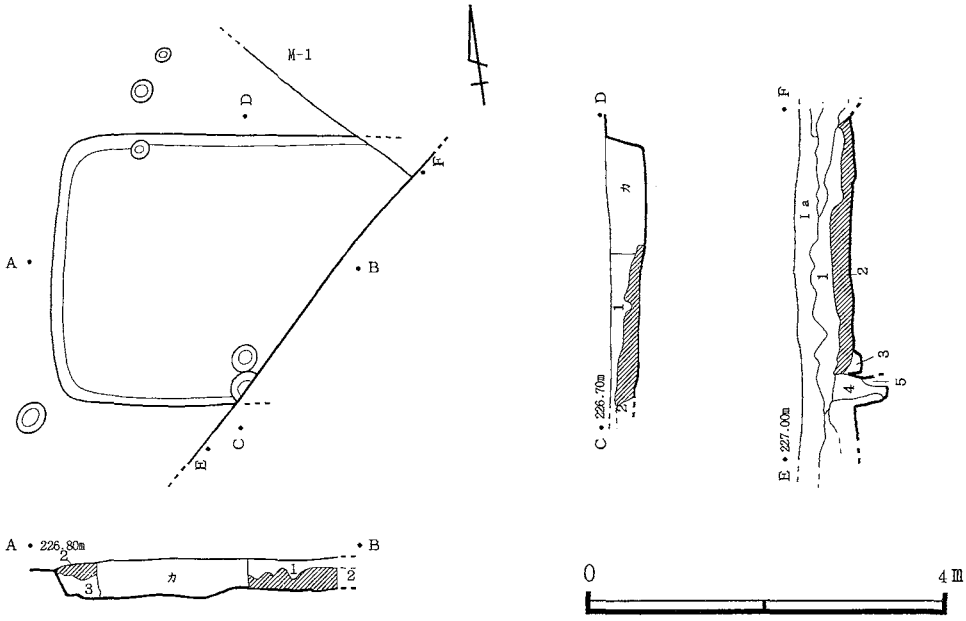
b．遺物（第9図）

土師器の甕や須恵器の高台付皿や坏が出土している。須恵器の高台付皿（6）は扁平な体部に開いた高台を有する。高台は張り付けられたもので、底部には回転箆削りを施している。また、土師器の甕（1、2）は短く外反する口縁を持ち、胴部上位に横方向の箆削りを施している。こうした特徴から坂口・三浦編年のⅨ段階（9世紀第3四半期）に比定できる。この他にH－1号住1トレンチから釘1点が出土している（7）。　（深町　真）



第9図　H－1号住居址出土の土師器・須恵器・釘

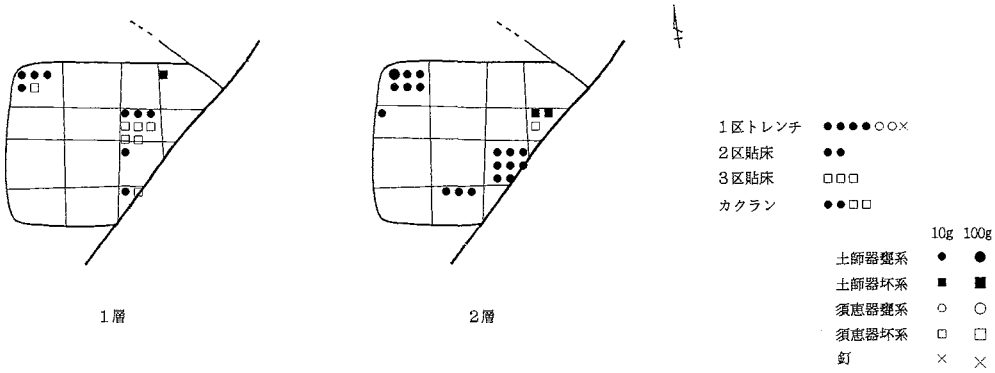
H－1号住



G－25A、H－1号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
H－1号住	1	暗褐色土層10YR		Δ	○	○	※	※
（E－F）	2	黒褐色土層10YR	1＞2	Δ	○	※	Δ	Δ
	3	褐色土層10YR	2＜3	Δ	○	Δ	Δ	○
	4	黒褐色土層10YR	2＜4	Δ	○	※	※	※
	5	暗褐色土層10YR	4＜5	Δ	○	Δ	Δ	※

土器分布



第10図　H－1号住居址実測図

（５）時期不明の遺構

Ｍ－１号溝（第７図）

上幅３ｍ、深さ0.4ｍの溝で、北西方向から南東方向に走る。地震による亀裂であると推定される。Ｄ－２号土坑を壊して形成されている。

Ｄ－１号土坑（第25図）

遺物が全く出土せず、時期や用途は不明である。

Ｄ－３号土坑（第７図、第８図）

遺物が全く出土せず、時期や用途は不明である。Ｋ－１号墳及びＭ－２号溝を壊して造られている。

ﾋﾟｯﾄ群（第４図）

遺跡全体から平面形や大きさ、深さが異なるﾋﾟｯﾄ群を検出したが、遺物が出土せず、時期や用途が不明である。

（深町　真）

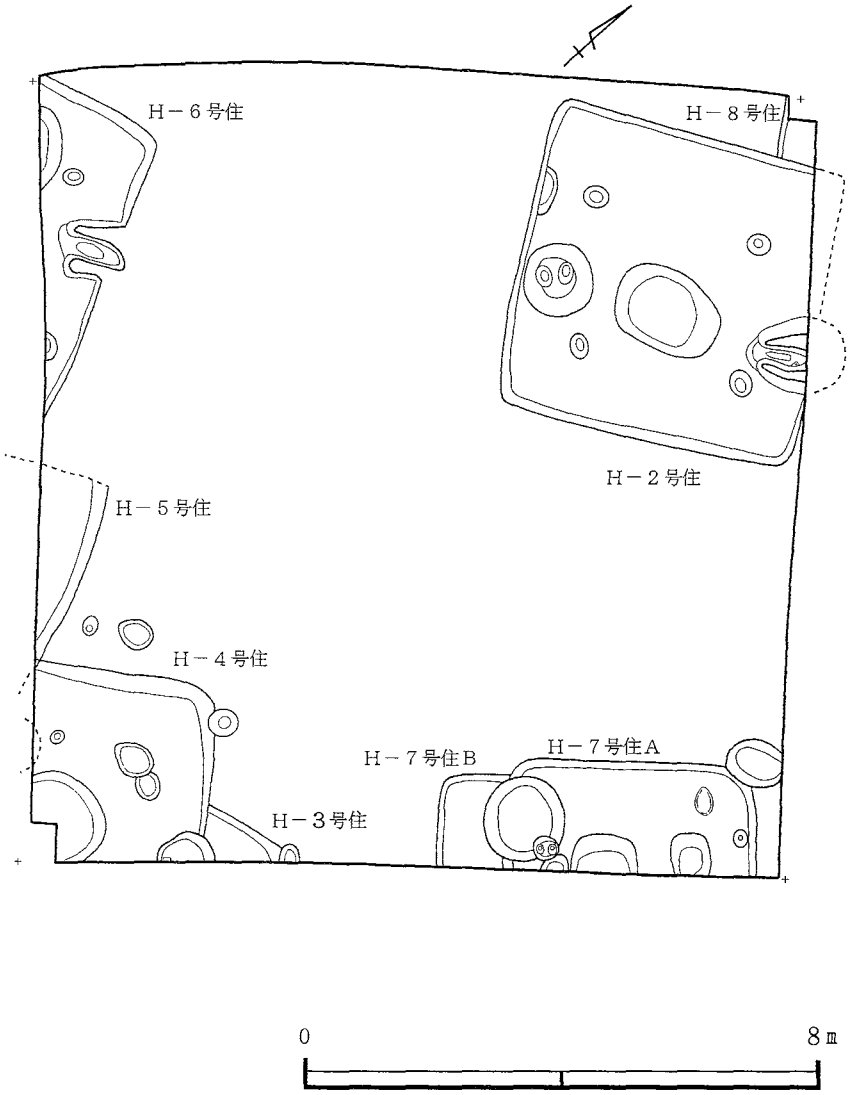
土坑	規模（上端）		規模（下端）		深さ(m)	形　態		時期	土器	石器		礫
番号	長径	短径	長径	短径		平面	断面			石器(狭義)	剥片・石核	
Ｄ－１	1.00	0.92	0.80	0.80	0.10	円形	皿状					
Ｄ－２	2.18	－	1.80	－	0.35	円形？	皿状	加曽利Ｅ４式				
Ｄ－３	1.12	－	0.90	－	0.20	円形？	椀状					
Ｄ－４	0.98	0.98	0.68	0.62	0.20	円形	皿状	加曽利Ｅ３式		石皿		

第８表　日向後原遺跡出土土坑観察表

V　野毛良遺跡

（1）遺跡の概要

野毛良遺跡からは縄文時代の遺物と古墳時代の住居址８軒を検出した。（第11図）



第11図　野毛良遺跡全体図

（２）縄文時代の遺物

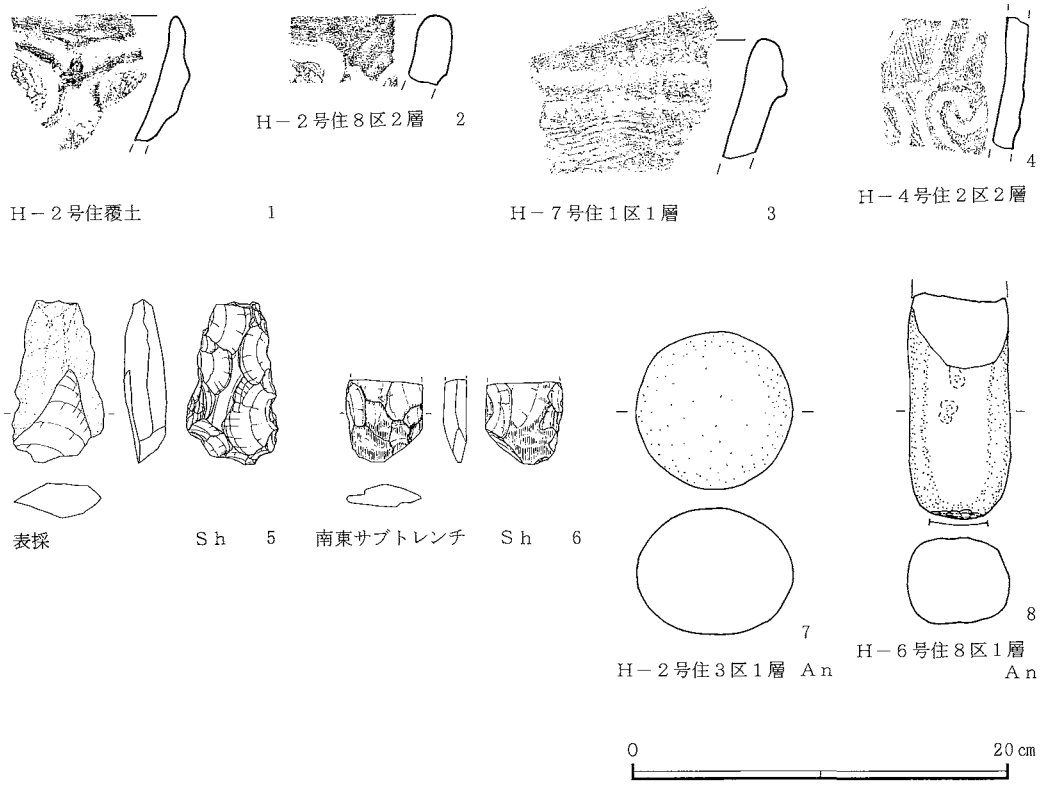
土器

総体的に縄文土器は古墳時代の住居の覆土から出土しているが、日向後原遺跡と同様に中期後半（第５群土器）を主体としている。

調査区出土の縄文土器（第12図１～４）

１、２は隆帯および沈線で区画がなされ、原体ＲＬの単節斜縄文が施文される口縁部で、いずれも第５群１類土器の加曽利Ｅ３式土器である。３は口唇部が無文帯で小波状の器形を呈し、地文に原体Ｒの無節斜縄文を施文する第５群２類土器の加曽利Ｅ４式土器の口縁部である。４は地文に原体ＬＲの単節斜縄文を施文したのち、磨消縄文で渦巻文が施される第６群土器の称名寺１式土器である。

（中澤信忠）



第12図　野毛良遺跡出土の縄文土器・石器

石器

［石器組成］

全部で16点（搬入礫３点を含む）が検出されている。本遺跡で検出された石器は遺構には伴うものではない。日向後原遺跡と同様、他時期の石器が混在している可能性があり、個々の石器の帰属時期は不明である。石器の内訳は剥片Ａ類２点、打製石斧４点、剥片Ｂ類５点、磨石１点、凹石１点である。そのうち主要器種の４点を図示した。

［石器各説］（第12図）

Ｂ類石器

［打製石斧］（第12図５・６）　４点検出されている。Ｉ形態（平面形：撥形・断面形：蒲鉾形・片刃）１点（５）、Ⅱ形態の刃部破片２点（６）、Ⅱ形態の刃部～胴部破片１点である。全て頁岩製である。

Ｃ１類石器

［磨石］（第12図７）　１点検出されている。７はＩ形態（円形）に分類される。安山岩製である。

［凹石］（第12図８）　１点検出されている。８はⅢｂ形態に分類されるが欠損している。端部に敲打痕が観察される。安山岩製である。

［搬入礫］　無加工の礫３点が検出されている。全て結晶片岩である。

（井上慎也）

（３）古墳時代の遺構・遺物

ａ．遺構

野毛良遺跡からは４世紀から７世紀までの住居址が７軒検出された。その重複関係は以下のとおりである。

Ｈ－８号住→Ｈ－２号住

Ｈ－３号住→Ｈ－４号住、Ｈ－４号住→Ｈ－５号住

Ｈ－７Ａ号　住→Ｈ－７Ｂ号住

Ｈ－２号住居址（第13図）

平面形は正方形である。床面から４本の主柱穴を検出した。竈は東竈で、住居の東壁の中央より南寄りにつけられている。竈の構築にはロームや黒土を用い、石材を用いていない。貼床下部に２基の床下土坑を確認した。

遺物出土状態　完形品は出土せず、遺棄された状況とは異なる。復元可能な個体の分布をみると、南壁寄り（14区、16区）で出土している。重量的には住居全体で均等に遺物が出土しており、この住居が廃棄されたときに土器も廃棄されたと考えられる。編み物石が２点単独で出土している（１区、８区）。（第14図）

Ｈ－３号住居址（第15図）

Ｈ－４号住居址によって壊されているが、一部しか調査できず詳細は不明である。遺物も出土しなかった。

Ｈ－４号住居址（第15図）

西側はＨ－５号住居址によって壊されているものと推定される。竈は東竈である。竈の構築材にはロームと黒土を用いているが、一部、石材を構築材に使用している。床下土坑１基を確認した。また、Ｐ－１は主柱穴であると推定される。床には貼床が見られた。

遺物出土状態　完形品は出土せず、遺棄された状況とは異なる。復元可能な個体の分布をみると、竈付近で出土している。（第16図）

Ｈ－５号住居址（第15図）

東竈で、調査区の西壁から竈の端を確認した。遺物は出土しなかった。

Ｈ－６号住居址（第17図）

竈は東竈で、東壁の中央から北寄りにつけられている。竈の構築材はロームと黒土であり、石材をもちいていない。住居の北西で床下土坑を１基検出したが、一部しか調査できなかったので平面形は不明である。

遺物出土状態　完形品は出土せず、遺棄された状況とは異なる。復元可能な個体の分布をみる

と、竈より南側で出土している。重量的には住居の東側から出土している。（第17図）

Ｈ－７号住居址（第18図）

２軒の住居が重複している。外側にあるＡの方が古く、内側にあるＢの方が新しい。Ｄ－２は床下土坑であるが、Ｂに属する。Ｄ－３号土坑はこの住居に伴わないものと考えられる。

遺物出土状態　完形品は出土せず、遺棄された状況とは異なる。復元可能な個体の分布をみると、北西端と東端で出土している。重量的には全体に均等に出土している。（第18図）

Ｈ－８号住居址（第13図）

Ｈ－２号住居址によって壊されているが、一部しか調査できず詳細は不明である。

住居名	平面形	規模（m）			床面	壁溝	主軸方向	貯蔵穴	土坑（床下）	柱穴	竈			時期
		長軸	短軸	深さ							方向	主軸方法	構造	
H-2号住	正方形	4.8	4.6	0.2	—	—	N-321.0°-E	—	○	4	東	N-65.0°-E	粘土・黒土	7世紀第1四半期
H-3号住	—	—	—	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H-4号住	—	2.8	2.5	0.2	貼床	—	N-318.0°-E	—	○	3	東	—	粘土・黒土・石	7世紀第1四半期
H-5号住	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	東	—	粘土・黒土	—
H-6号住	—	—	—	0.1	—	—	N-332.0°-E	—	○	2	東	N-58.0°-E	粘土・黒土	6世紀第1四半期
H-7A号住	—	—	3.6	0.1	—	—	N-312.0°-E	—	○	1	—	—	—	4世紀後半？
H-7B号住	—	—	—	0.3	—	—	N-313.0°-E	—	○	—	—	—	—	7世紀第3四半期
H-8号住	—	—	—	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4世紀後半？

第９表　野毛良遺跡古墳時代住居址観察表

ｂ．遺物（第19図～第20図）

Ｈ－２号住居址　土師器の鉢、坏、高坏、須恵器の坏が出土している。土師器の坏（第19図１、２）は底部に箆削りを施し、体部に稜線を持つ形態で、口縁部は外反する。７世紀第１四半期に比定できる。

Ｈ－４号住居址　土師器の坏、甕、高坏、須恵器の甕、坏が出土している。土師器の坏（第19図13）は内面に暗文状箆磨きを施す。土師器の高坏（第19図14）は坏部を欠くが、脚部は長脚で、裾の開きは弱い。７世紀第１四半期に比定できる。

Ｈ－６号住居址　土師器の甕、坏が出土している。甕は胴部に横位の箆削りを施し、口縁部にはナデを施している（第20図４）。また、坏は体部に稜線をもち、口縁部が外反する形態である（第20図１、２）。６世紀第１四半期に比定できる。

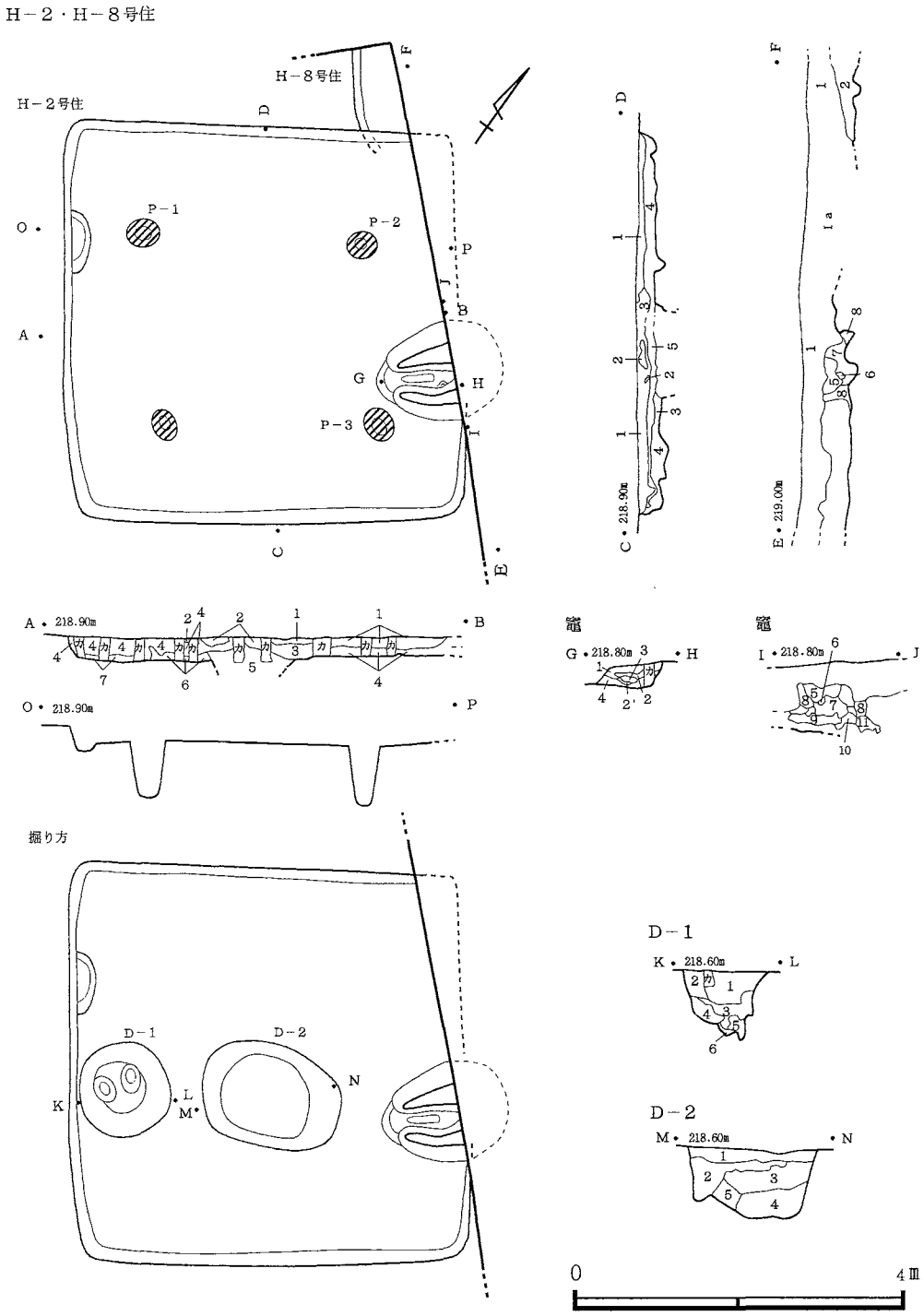
Ｈ－７Ａ号住居址　破片であるが、６区１層から台付甕が出土している（第20図13、14）。古式土師器と推定される。

Ｈ－７Ｂ号住居址　土師器の甕、小型甕、坏、高坏、須恵器の甕、高坏、釘１点が出土してい

る。土師器の小型甕はコの字に開く口縁を持ち、胴部外面を斜位のケズリを行っている（第20図９）。また、坏は体部に稜線を持ち、口縁部が外反するもの（第20図５、６、８）や口縁部が直立するもの（第20図７）である。７世紀第３四半期に比定できる。

調査区出土遺物　試掘調査時の２トレンチから台付甕が出土している（第19図12）。住居址の位置関係から考えると、Ｈ－８号住居址に属すると考えられる。古式土師器の様相を呈する。また、Ｈ－４号住の北西からも古式土師器の台付甕が出土しているが、住居址は確認できなかった（第19図16、17）。

（深町　真）



第13図　H－2号住居址・H－8号住居址実測図

G－25B、H－2号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
H－2号住（A－B）	1	黒褐色土層 10YR		△	○	※	※	※
	2	褐色土層 10YR	1＜2	△	○	※	△	○
	3	褐色土層 10YR	1＞3	△	○	△	○	○
	4	黒褐色土層 10YR	1＜4	△	△	※	※	※
	5	褐色土層 10YR	2＜5	△	△	○	○	○
	6	褐色土層 10YR	4＜6	○	○	◎	△	※
	7	暗褐色土層 10YR	4＜7	○	○	※	※	※

G－25B、H－2号住竈

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土	備考
竈（G－H）	1	褐色土層 7.5YR		○	○	※	※	△	△	
	2	暗褐色土層 7.5YR	1＜2	○	○	※	※	※	※	
	2'	暗褐色土層 7.5YR	2＝2	○	○	※	※	※		
	3	黒褐色土層 7.5YR	2＜3	○	○	※	※	※		
	4	褐色土層 7.5YR	3＞4	○	○	※	※	※		
	5	明褐色土層 7.5YR	4＜5	○	○	※	※	△		
	6	明褐色土層 7.5YR	5＜6	○	○	※	※	※		煙道
	7	明黄褐色土層 10YR	6＜7	○	○	※	※	△		
	8	褐色土層 10YR	7＜8	○	○	※	※	※		
	9	黄褐色土層 10YR	5＜9	○	○	○	※	※	※	
	10	褐色土層 10YR	9＜10	○	○	※	※	※	※	

G－25B、H－2号住D－1

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭化物
D－1（K－L）	1	黒色土層 10YR		△	○	※	※	※	※
	2	暗褐色土層 10YR	1＜2	△	○	※	※	※	
	3	暗褐色土層 10YR	2＜3	△	○	○	※	○	
	4	褐色土層 10YR	3＜4	△	○	○	◎	◎	
	5	褐色土層 10YR	4＜5	△	○	○	○	○	
	6	褐色土層 10YR	5＜6	△	○	※	※	※	

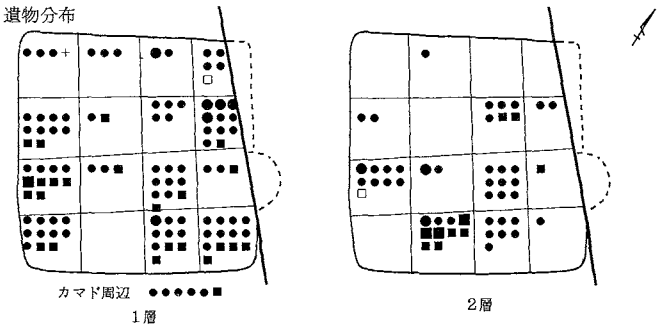
G－25B、H－2号住D－2

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－2（M－N）	1	褐色土層 10YR		△	△	※	○	○
	2	褐色土層 10YR	1＜2	△	△	※	○	○
	3	褐色土層 10YR	2＜3	△	△	○	※	○
	4	褐色土層 10YR	3＞4	△	△	※	※	○
	5	褐色土層 10YR	4＜5	△	△	○	※	○

G－25B、H－8号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土
H－8号住	1	暗褐色土層 10YR		○	○	※	△	※	○
	2	褐色土層 10YR	1＜2	○	○	○	○	※

遺物分布



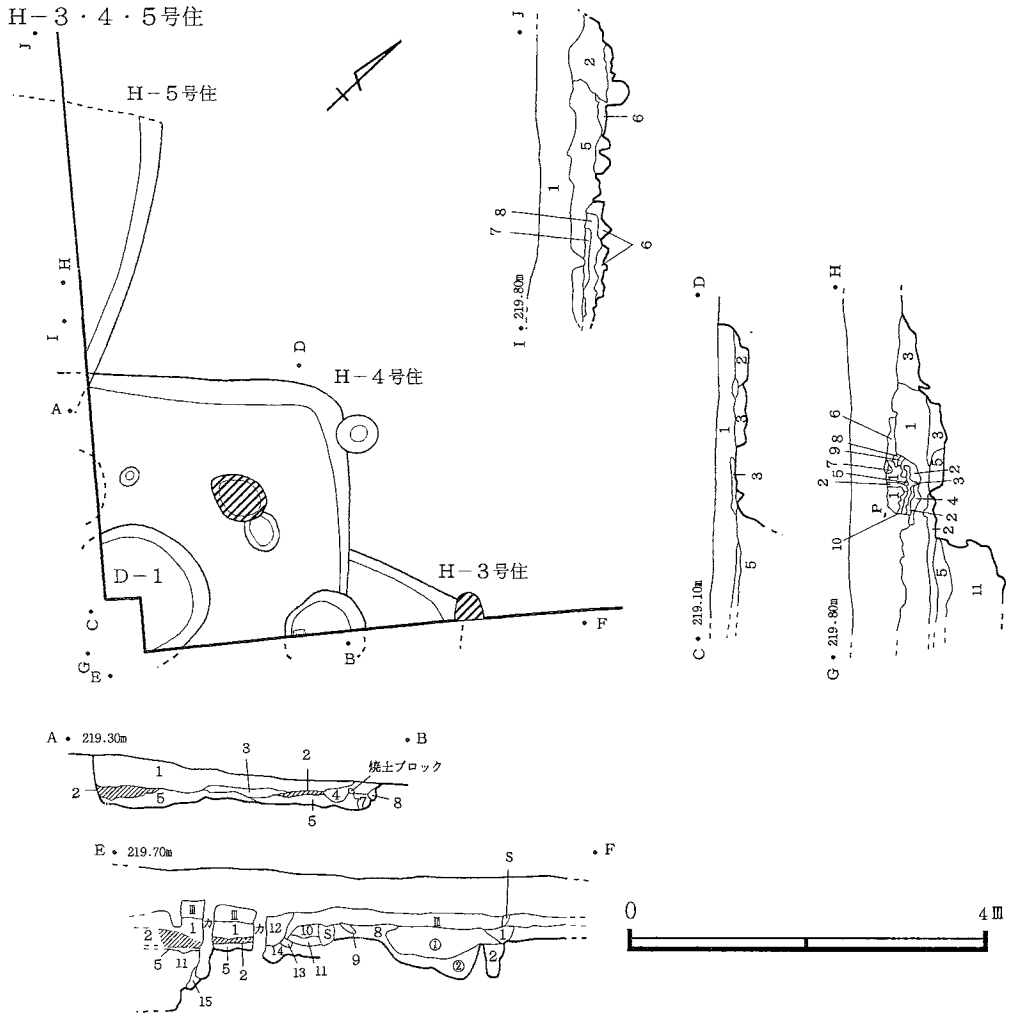
カマド北 ●
8区貼床 ●
15区不明 ●●●●■ ■■■
11区不明 ●●●●■
P－1 ●
P－3 ●●
D－1 ●●●●●■■
2区トレンチ ●●●■■■■ ■■■■□
3区サブトレンチ ●●●●●●
7区サブトレンチ ●●●●●●■
6区カクラン ●●
周辺 ●

	10g	100g
土師器甕系	●	●
土師器坏系	■	■
須恵器甕系	○	○
須恵器坏系	□	□
編み物石	＋	＋

区	層	石材	法量 長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
1区	1層	An	130.64	62.22	45.51	550
8区	1層	An	127.73	56.12	40.91	530

第10表　H－2号住居址出土編み物石観察表

第14図　H－2号住居址遺物分布図



G－25B、H－4号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土	備考
H－4号住	1	褐色土層10YR		Δ	○	※	※	△		
（A－B）	2	黒褐色土層10YR	1＜2	Δ	○	※	※	※		貼床
	3	褐色土層10YR	2＜3	Δ	○	※	※	○		
	4	褐色土層10YR	3＞4	Δ	○	※	※	○	※	
	5	黄褐色土層10YR	4＜5	Δ	○	○	※	△		
	6	褐色土層10YR	5＞6	Δ	○	○	※	◎		床下
	7	褐色土層10YR	6＜7	Δ	○	※	○	※	※	
	8	明褐色土層7.5 YR	7＜8	Δ	○	※	※	※	△	竈袖

G－25B、H－4号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土	炭化物
H－4号住	1	黒褐色土層10YR		○	Δ	※	※	※		※
C－D	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	Δ	※		△		※
	3	暗褐色土層10YR	2＞3	○	Δ		※	○		
	5	黒褐色土層10YR	3＞5	○	Δ	※	△	○		※

第15図　H－3～H－5号住居址実測図

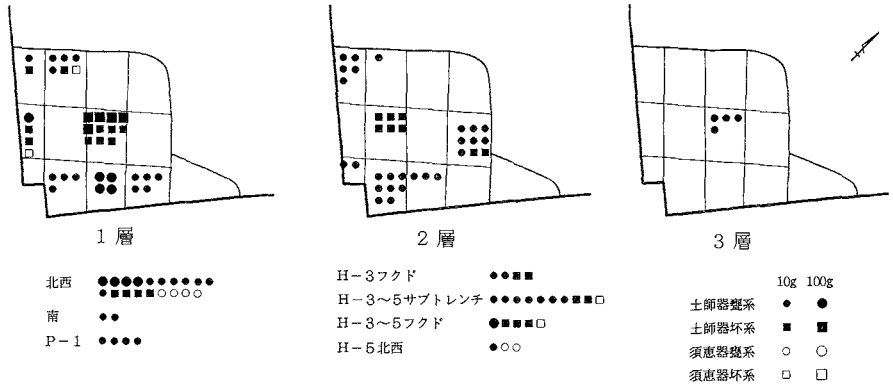
G－25B、H－4号住南壁

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土	備考
H－4号住	1	褐色土層10YR		Δ	○	※	※	△		
（E－F）	2	黒褐色土層10YR	1＜2	Δ	○	※	※	※		貼床
	Ⅲ	黒褐色土層10YR	2＞3	Δ	○	※	※	○	※	
	4	褐色土層10YR	3＞4	Δ	○	※	※	○		
	5	黄褐色土層10YR	4＜5	Δ	○	○	※	△		D－1
	6	褐色土層10YR	5＞6	Δ	○	○	※	◎		
	7	褐色土層10YR	6＜7	Δ	○	※	○	※	※	
	8	明褐色土層7.5YR	7＜8	Δ	○	※	※	※	※	
	9	暗褐色土層10YR	8＜9	Δ	○	※	※	※	※	
	10	暗褐色土層10YR	9＜10	Δ	○	※	※	※	※	
	11	暗褐色土層10YR	10＝11	Δ	○	※	※	※	※	D－1
	12	暗褐色土層10YR	11＜12	Δ	○	※	※	※		
	13	褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※	
	14	黒褐色土層10YR	13＜14	Δ	○	※	※	※	※	
	①	黒褐色土層10YR	14＝①	Δ	○	※	※	※		
	②	褐色土層10YR	①＜②	Δ	○	※	※	○		
覆土P-10	1	褐色土層10YR	②＜1	Δ	○	※	※	※		
覆土P-10	2	暗褐色土層10YR	1＜2	Δ	○	※	※	※		
	15	明褐色土層10YR	11＜15	×	×			◎		

G－25B、H－5号住

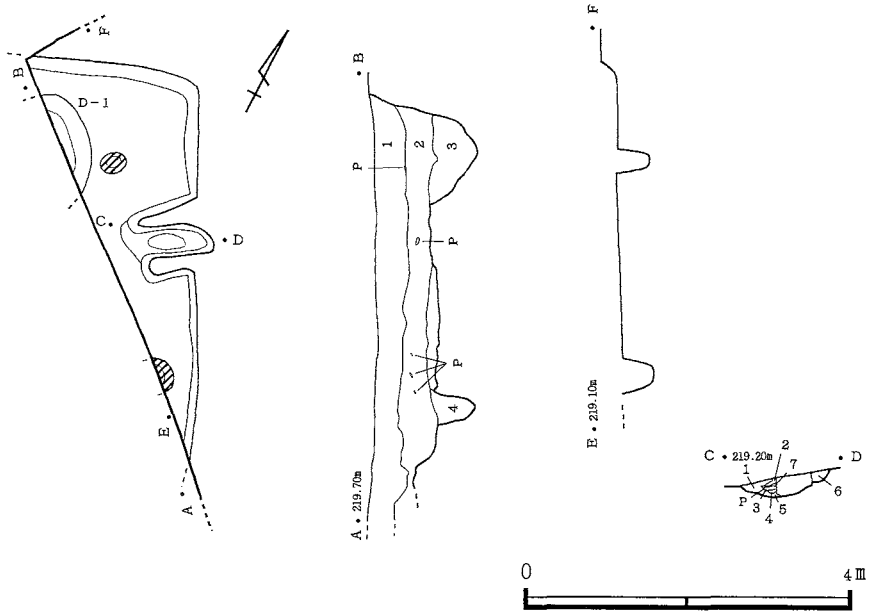
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土	炭化物
H－5号住	1	明褐色土層7.5YR		○	○	※	※	※	○	○
（G－H）	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※	○	
	3	褐色土層7.5YR	2＜3	○	○	※	※	※	○	
	4	褐色土層10YR	3＜4	○	○	※	※	※	○	※
	5	褐色土層10YR	4＜5	○	○	※	※	※	※	
	6	褐色土層10YR	1＜6	Δ	○	※	※	※	※	
	7	褐色土層10YR	6＜7	Δ	○	※	※	※	※	
	8	褐色土層10YR	6＜8	Δ	○	※	※	※	※	
	9	黄褐色土層10YR	8＜9	Δ	Δ	※	※	※	※	
	10	褐色土層10YR	1＜10	Δ	○	※	※	※	○	○
	11	褐色土層10YR	5＞11	○	○	※	※	※		

土器分布

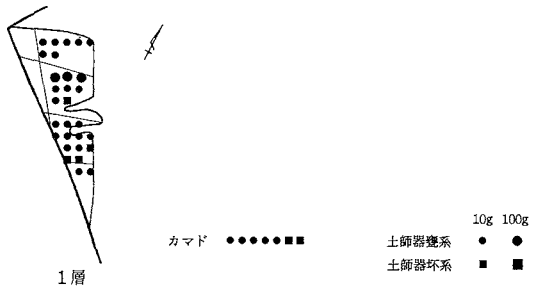


第16図　H－3～H－5号住居址遺物分布図

H－6号住

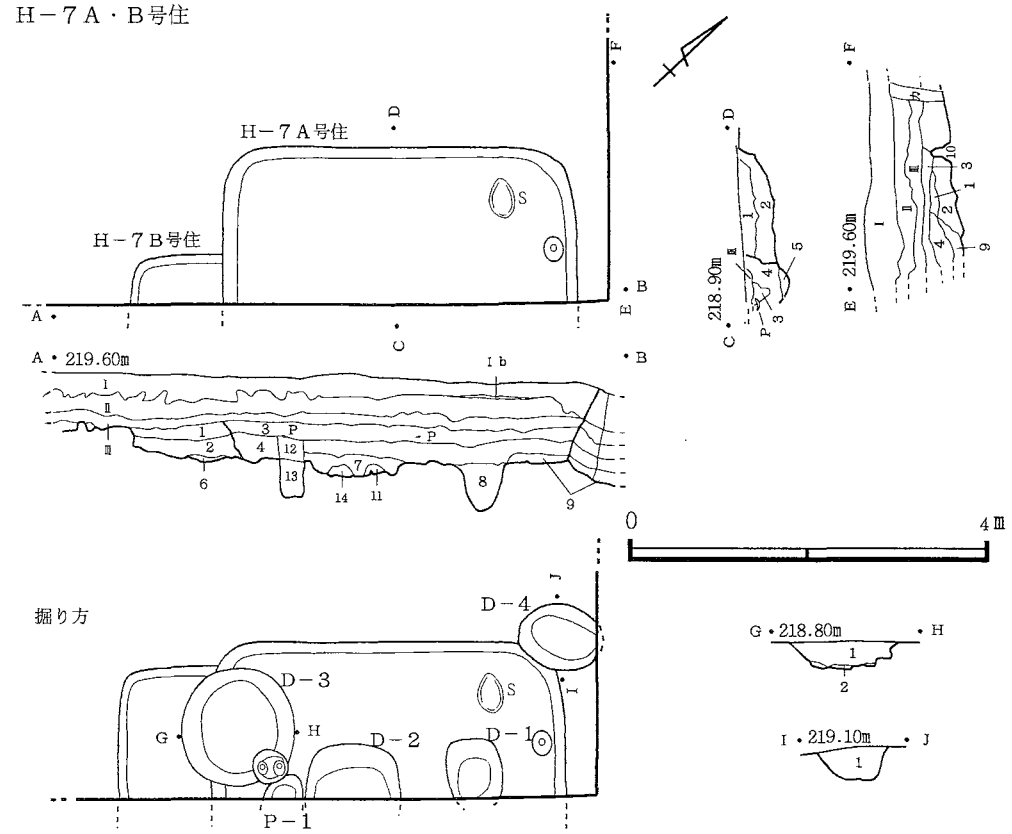


土器分布



第17図　H－6号住居址実測図

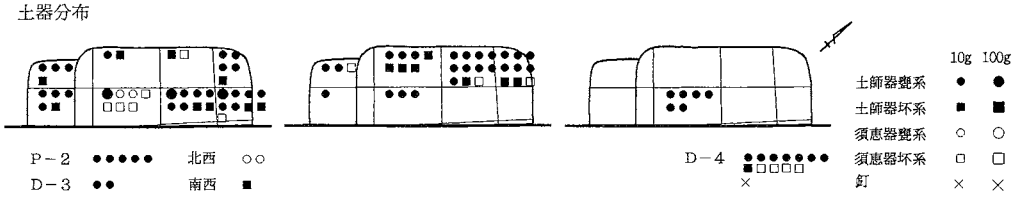
H－7A・B号住



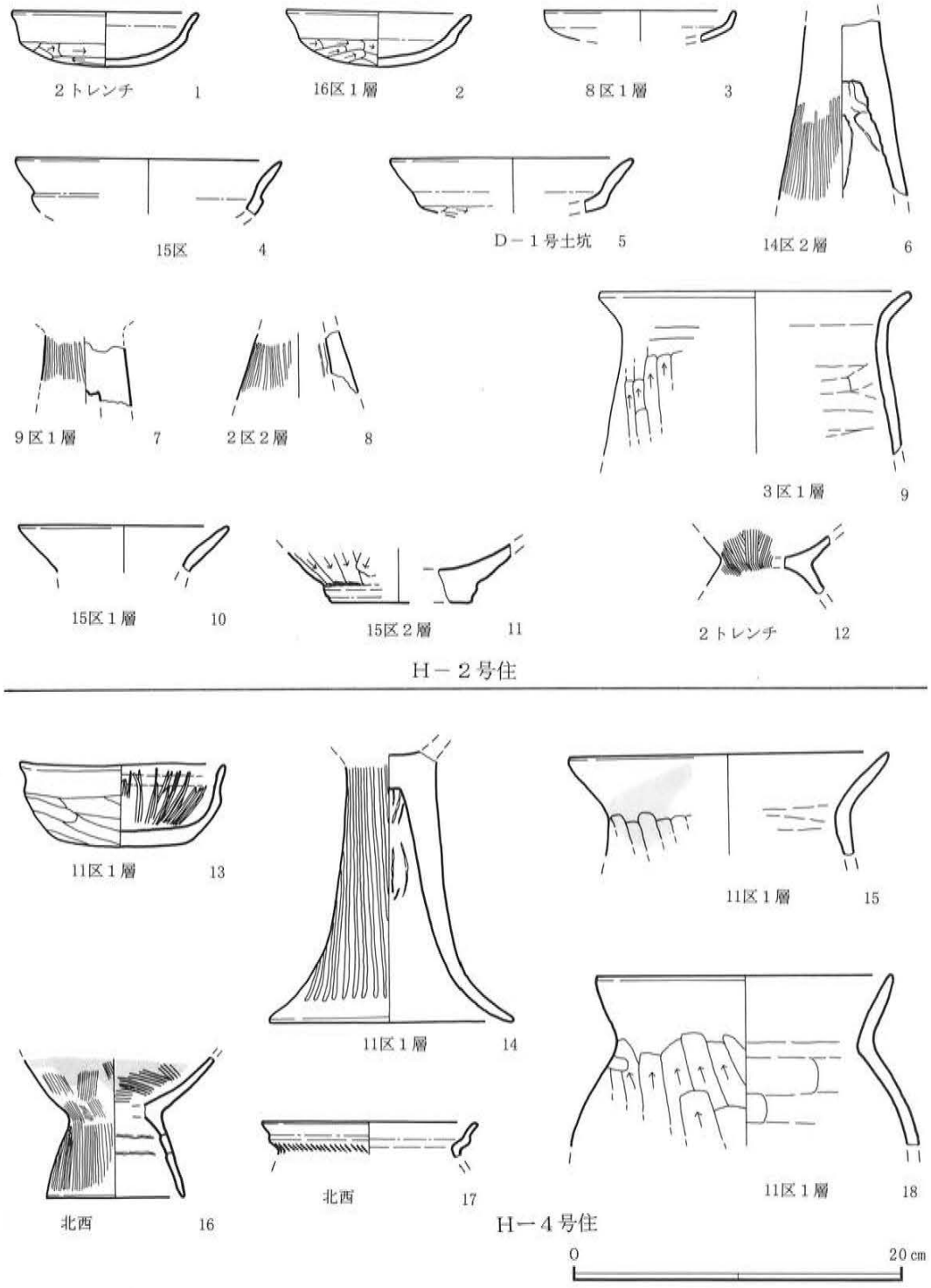
G－25B、H－7号住南壁

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	土器	備考
H－7号住	Ⅰ	褐色土層10YR		△	△					
（A－B）	Ⅱ	暗褐色土層10YR	Ⅰ＜Ⅱ	△	△					
	Ⅲ	黒褐色土層10YR	Ⅱ＜Ⅲ	△	△	※	※	※		
	1	暗褐色土層10YR	Ⅲ＞1	◎	△	○	△	※		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	△	△	△	※		
	3	黒褐色土層10YR	Ⅲ＜3	△	△	※		※	※	
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	△	△	○	△	○		
	6	黒褐色土層10YR	2＜6	×	△	△	△	※		
	7	暗褐色土層10YR	4＜7	△	△	○	△	※		D－2
	8	暗褐色土層10YR	4＜8	△	△	※	※	※		D－1
	9	暗褐色土層10YR	4＝9	△	△	※	○	※		
	10	褐色土層10YR	Ⅲ＜10	△	△	※	※	※		
	11	褐色土層10YR	8＜11	◎	○	※	※	※		D－2
	12	黒褐色土層10YR		◎	△	△	△	※		P－1
	13	黒褐色土層10YR	12＞13	○	△	※	△	※		P－1
	14	褐色土層10YR	8＜11	△	○	△	△	※		D－2

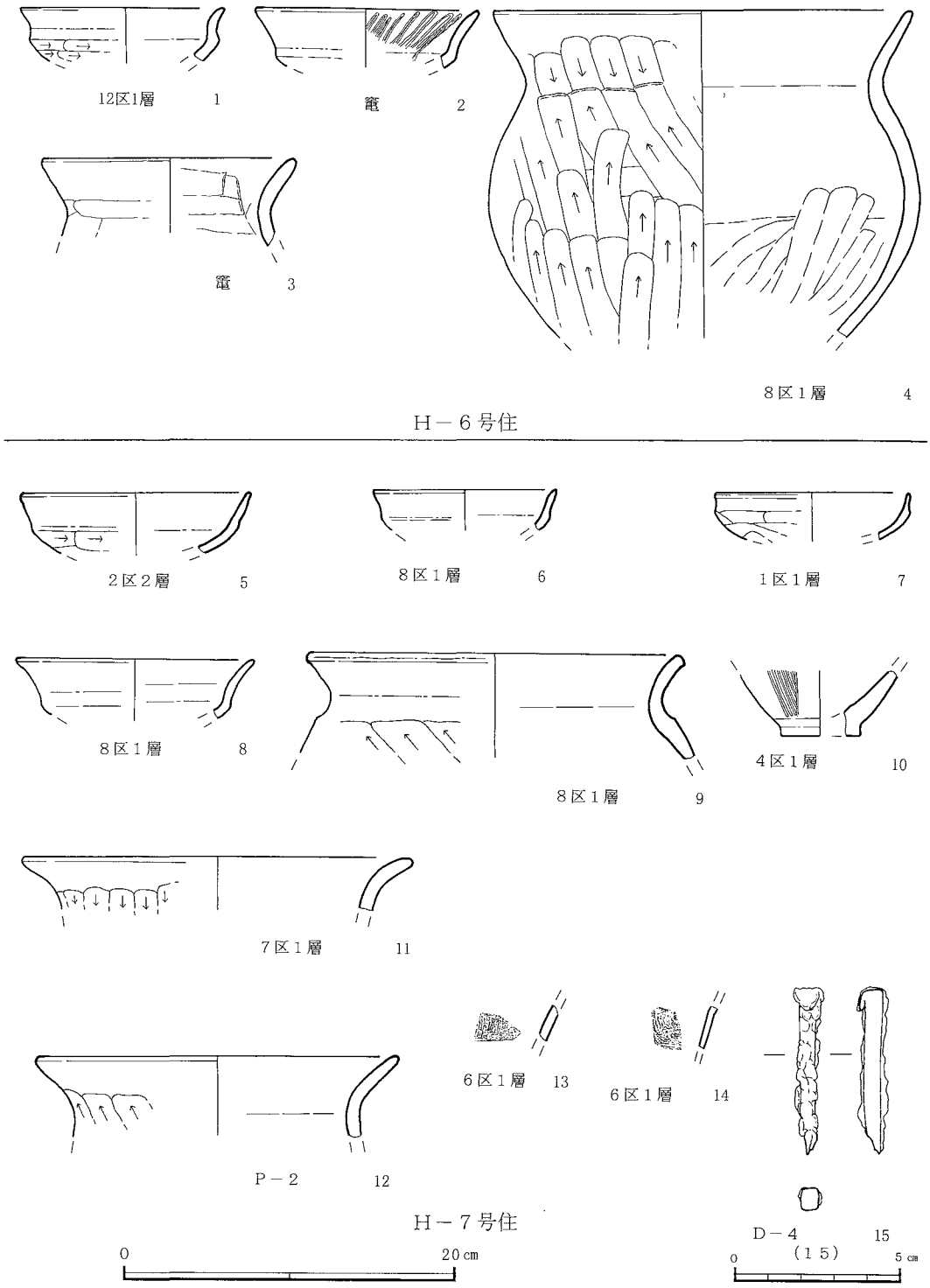
土器分布



第18図　H－7A・B号住居址実測図



第19図　H－2・H－4号住居址出土の土器

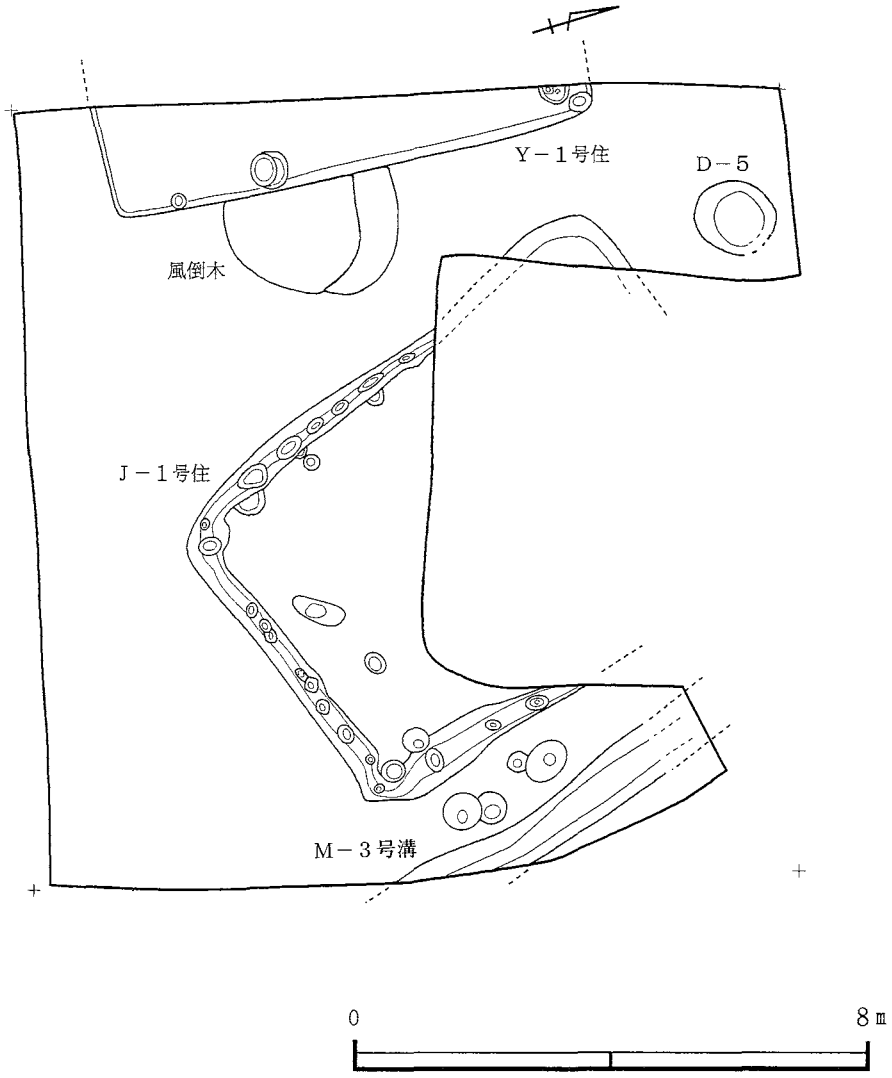


第20図　H－6・H－7号住居址出土の土器

Ⅵ　山峰遺跡

（１）遺跡の概要

山峰遺跡及び山峰遺跡北調査区からは縄文時代前期中葉の住居址１軒、縄文時代前期中葉～中期中葉の土坑群及びピット群、弥生時代樽式３期の住居址１軒、地震の亀裂と思われる溝１条と時期不明の土坑１基を検出した。（第21図、第24図）



第21図　山峰遺跡全体図

（２）縄文時代の遺構・遺物

ａ．遺構

Ｊ－１号住居址（第22図）

平面形は長方形で、長辺８ｍ、短辺６ｍである。半分は既存の鉄塔のため壊されているが、壁溝が全周していたと思われる。壁溝からは補助穴が検出された。Ｐ－１・Ｐ－２は主柱穴になると推定される。炉址は検出できなかった。（深町　真）

遺物出土状態（第23図）

住居名	平面形態	壁溝	主柱穴	炉址形態	時期	規模（m）			主軸方向
						長軸	短軸	深さ	
Ｊ－１号住	長方形	全周	2	－	有尾式	8.16	5.88	0.3	N-349.0°-E

第11表　縄文時代住居址観察表

この住居址は半分しか調査できなかったが、各区からほぼ偏在なく遺物が出土している。また、１層、２層でほぼ均等に出土している。

［土器］この住居址からは、第１群土器が主体的に出土した。なお、中央部では第２群土器がみられる。

［礫］全体に分布する。特に小礫が集中する場所も認められ、覆土中に集石が存在していた可能性がある。被熱しているものが約80％である。拳大以上の大きさの礫は少ない。

［石器］覆土が比較的薄いこともあるが、下層から出土する石器が多い。比較的多くの石器が全体に分布する。なお、６区下層より大形石皿が正位で出土している。

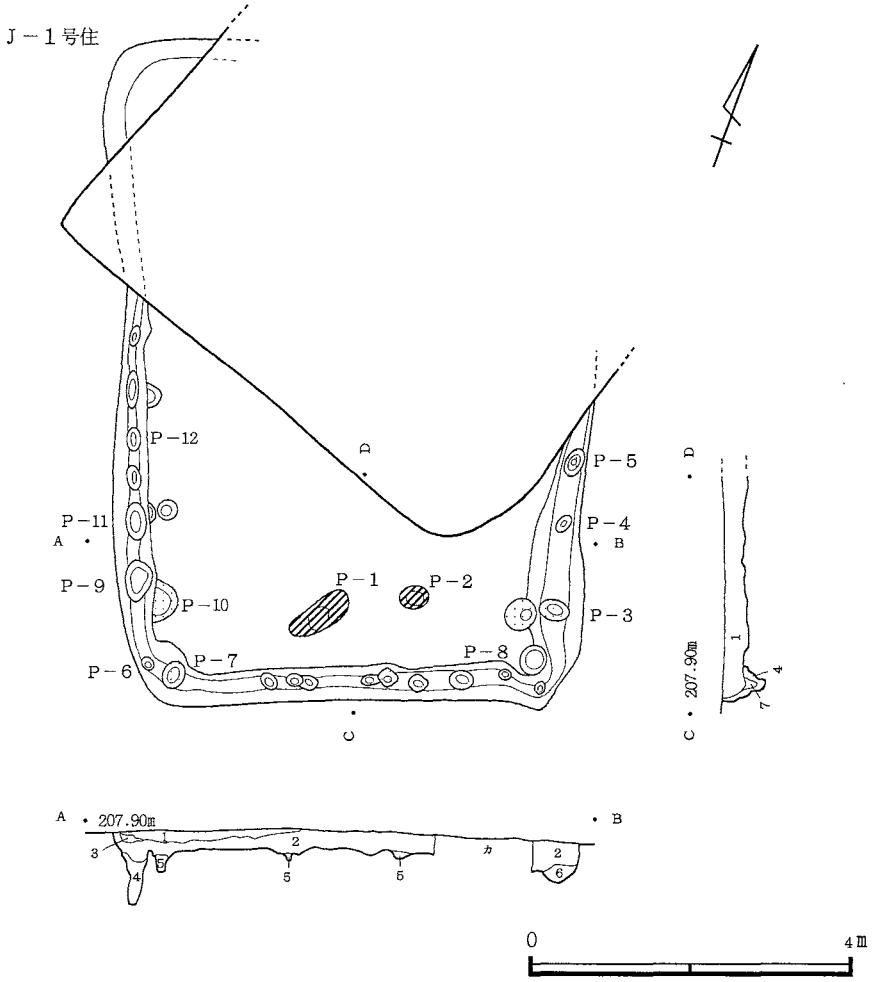
（深町　真・井上慎也）

北調査区検出の土坑群（第24図）

山峰遺跡北調査区からＤ－６号土坑～Ｄ－15号土坑までの10基の土坑と共に多数のピット群が検出された。このうち、Ｄ－11号土坑、Ｄ－12号土坑、及びＰ－２、Ｐ－３から前期中葉（第１群土器）が出土し、Ｐ－５からは中期中葉（第４群２類土器）が出土している。また、Ｄ－７号土坑から打製石斧、Ｄ－８号土坑からは剥片Ａ類が出土した。さらに、Ｄ－10号土坑、Ｄ－13土坑、Ｄ－14土坑、及びＰ－３、Ｐ－４、Ｐ－７から礫が出土した。

また、調査区の北寄りで、ほぼ東西に走る地震による亀裂が検出された。最初は縄文時代の住居址（Ｊ－２号住）として調査を進めたが、土層の堆積状態や形態から地震による亀裂であるということが判明した。Ｄ－12号土坑はこの地震によって壊されている。この地震は、Ｄ－12号土坑から前期中葉の土器が出土しているので、これよりは新しいと思われる。

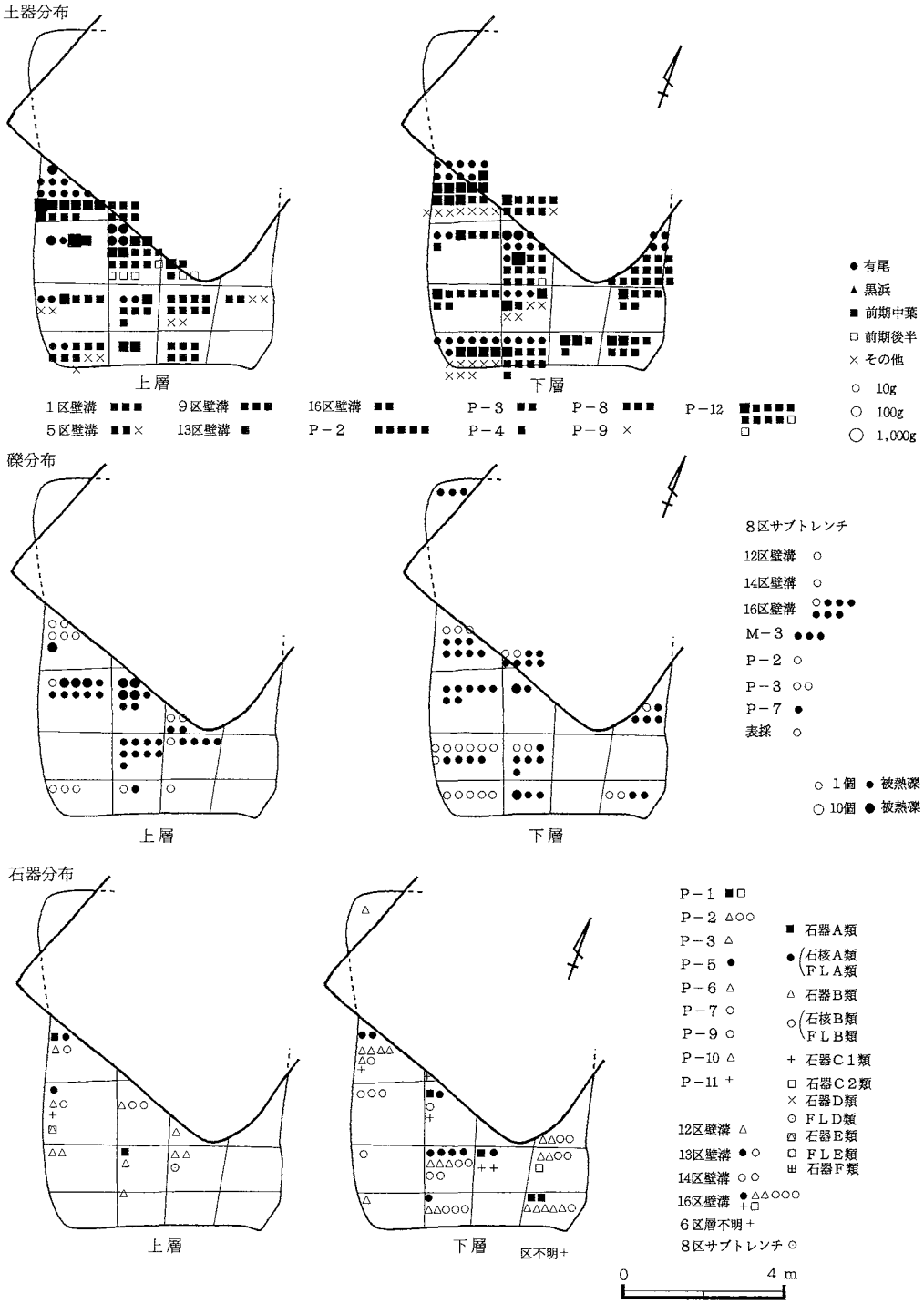
（深町　真）



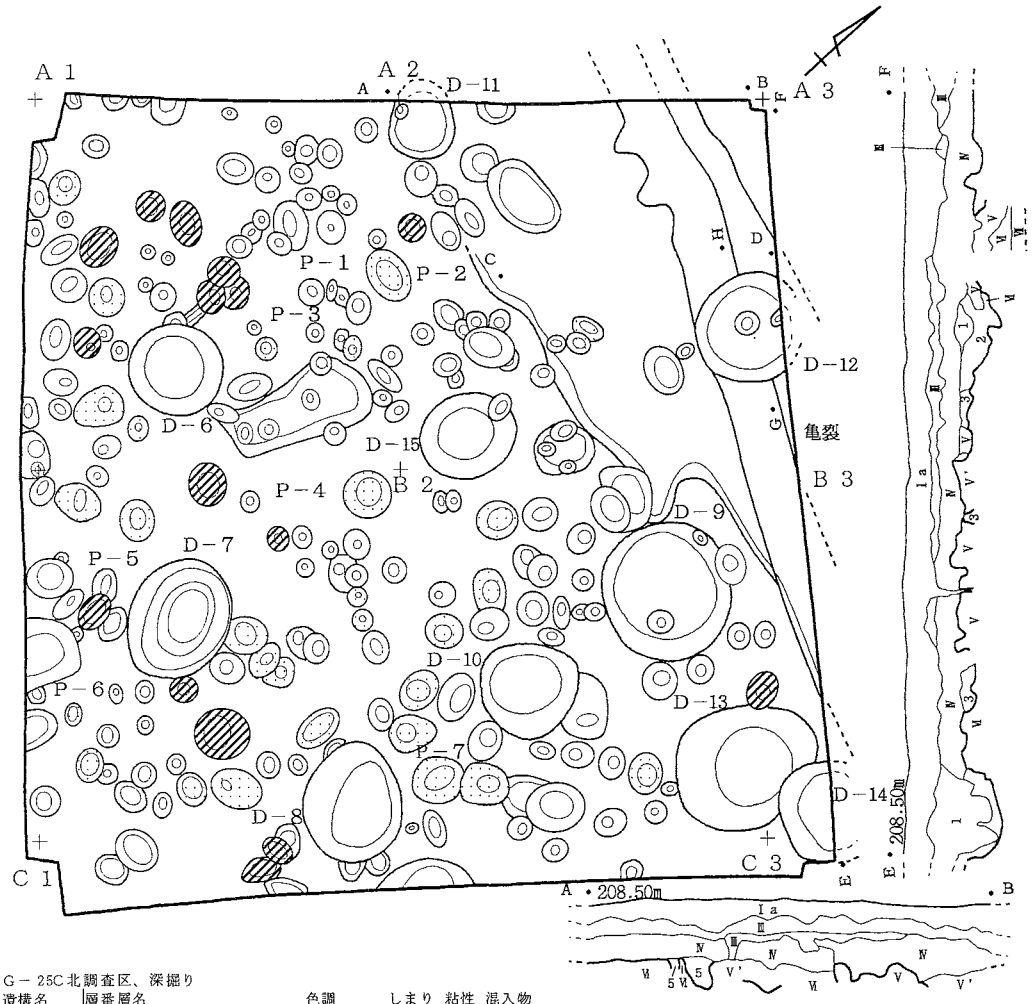
G－25C、J－1号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
J－1号住	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	※
	2	暗褐色土層10YR	1＞2	○	○	△	※	※
	3	黄橙色土層10YR	2＜3	○	○	○	△	※
	4	褐色土層10YR	4＞2	○	○	△	※	※
	5	暗褐色土層10YR	2＜5	◎	○	△	※	※
	6	暗褐色土層10YR	2＜6	○	○	△	△	※
	7	暗褐色土層10YR	4＞7＞2	○	○	※	※	※

第22図　J－1号住居址実測図

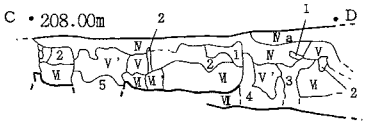


第23図　J－1号住居址遺物分布図



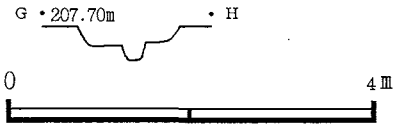
G－25C北調査区、深掘り

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
深掘り（C－D）	1	黒褐色土層 10YR		○	◎	△	※	△
	2	褐色土層 10YR	1＜2	○	○	△	※	○
	3	褐色土層 10YR	V＞3	○	◎	○	△	※
	4	褐色土層 10YR	3＜4	◎	◎	◎	○	※
	V'	褐色土層 10YR	V＜V'	◎	◎	○	○	×
	VI'	赤褐色土層 5YR	VI＜VI'					
	5	黒褐色土層 10YR	IV＞5	○	○	※	※	△

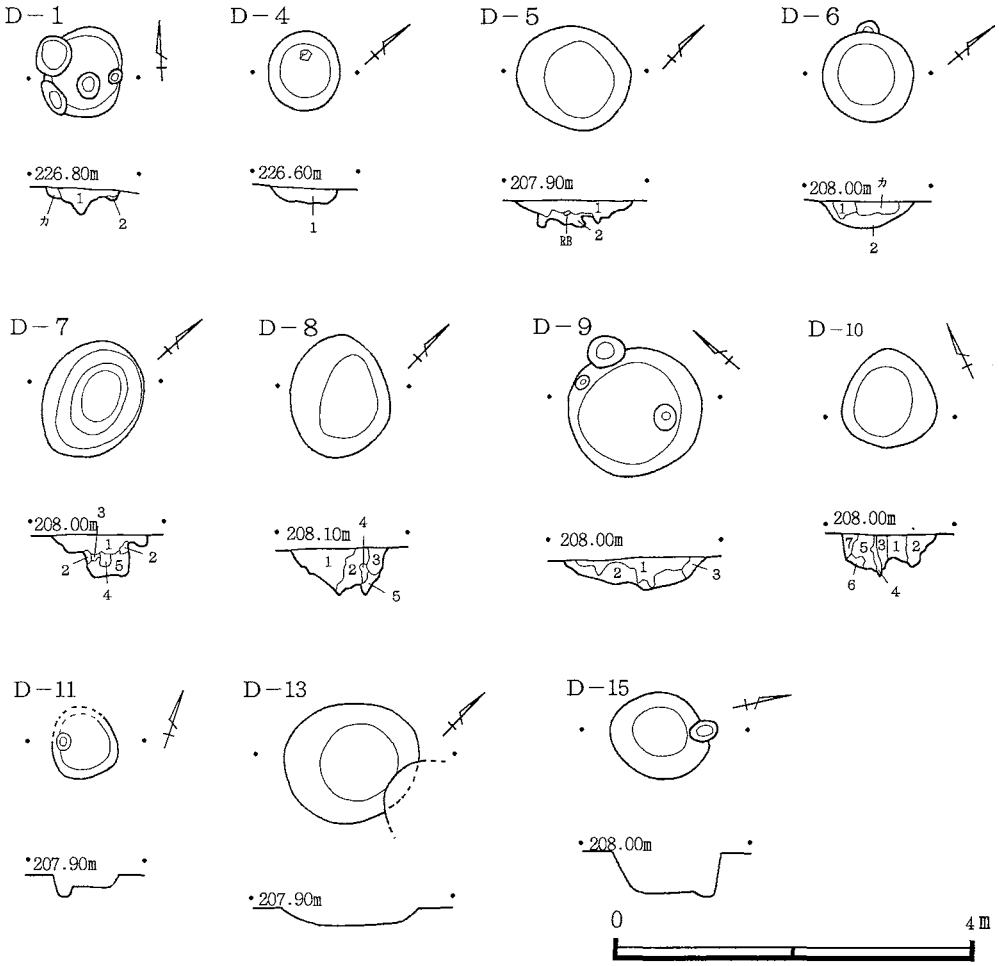


G－25C北調査区、南北ベルト

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
南北ベルト	1	黒褐色土層 10YR		△	△	※	※	※
	2	暗褐色土層 10YR	1＜2	○	△	△	※	△
	3	にぶい黄褐色土層 10YR	2＜3	○	△	○	※	○
	4	黒褐色土層 10YR		△	△	※	※	※
	5	褐色土層 10YR	4＜5	○	△	△	※	※
	6	黒褐色土層 10YR	6＜5	△	△	※	※	※
	7	暗褐色土層 10YR	6＜7	△	△	※	※	※
	8	黒褐色土層 10YR	7＞8	○	△	※	※	※
	9	明黄褐色土層 10YR	8＜9	◎	△	△	※	△
	10	褐色土層 10YR	9＞10	×	×	○	※	○



第24図　山峰遺跡北調査区全体図



G－25A、D－1

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－1	1 黒色土層10YR		Δ	○	×	×	※
	2 暗褐色土層10YR	1＜2	Δ	○	Δ	Δ	Δ

G－25A、D－4

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－4	1 黒褐色土層		◎	○	※	※	※

G－25C、D－5

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－5	1 暗褐色土層10YR		◎	◎	※	△	×
	2 暗褐色土層10YR	1＜2	◎	◎	△		

G－25C北区、D－6

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－6	1 褐色土層10YR		Δ	Δ	※	※	※
	2 褐色土層10YR	1＜2	Δ	Δ	※	※	※

G－25C北調査区、D－7

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－7	1 暗褐色土層10YR		Δ	Δ	※	※	※
	2 褐色土層10YR	1＜2	Δ	Δ	※	※	※
	3 褐色土層10YR	2＞3	Δ	Δ	※	※	※
	4 褐色土層10YR	3＞4	Δ	Δ	※	※	※
	5 褐色土層10YR	4＞5	Δ	Δ	※	※	※

G－25C北調査区、D－8

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－8	1 暗褐色土層10YR		○	Δ	Δ	※	※
	2 にぶい黄色土層	1＜2	Δ	○	○	Δ	※
	3 褐色土層	4＞2＞3	Δ	○	Δ	Δ	※
	4 明黄褐色土層	3＜5＜4	Δ	○	○	○	※
	5 黄褐色土層		○	○	○	○	※

G－25C北調査区、D－9

遺構名	層番層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－9	1 暗褐色土層10YR		Δ	Δ	※	※	※
	2 褐色土層10YR	1＜2	Δ	○	※	※	※
	3 褐色土層10YR	2＞3	Δ	○	※	※	※

第25図　土坑実測図

G－25C北調査区、D－10

遺構名	層番層名		色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－10	1	暗色土層10YR				△		※
	2	褐色土層10YR	1＜2	△	△	○	※	※
	3	褐色土層10YR	3＞4	△	△	※	※	○
	4	暗褐色土層10YR	4＜5	△	△	※	※	※
	5	褐色土層10YR	5＞7	△	○	※	※	○
	6	暗褐色土層10YR	5＞6	△	△	※	※	△
	7	褐色土層10YR	6＞7	△	○	※	※	△

G－25C北調査区、D－12

遺構名	層番層名		色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－12	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	※	△
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	※	※
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	※	○

G－25C北調査区、D－14

遺構名	層番層名		色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
D－14	1	暗褐色土層10YR		○	○	△	×	※
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	◎	○	△	※

北調査区出土の礫

北調査区から54点の礫が検出されている。礫の分布は亀裂の部分に集中し、偏りがみられる。これらの礫はほとんどが被熱し、拳大のものは少なく、破砕したものが多い。

（井上慎也）

土坑番号	規模（上端） 長径	短径	規模（下端） 長径	短径	深さ（m	形態 平面	断面	時期	土器	石器 石器（狭義）	剥片・石核	礫
D－6	0.82	0.82	0.58	0.52	0.31	円形	皿状					
D－7	1.30	0.90	1.04	0.66	0.19	楕円形	椀状			打製石斧		
D－8	1.34	1.06	0.96	0.60	0.41	楕円形	椀状				剥片Ａ類	
D－9	1.44	1.40	1.16	1.14	0.30	円形	皿状					
D－10	1.06	0.92	－	－	0.44	楕円形	椀状					礫
D－11	－	0.68	－	0.56	0.25	楕円形？	皿状	有尾式				
D－12	1.02	－	0.90	－	0.18	円形？	皿状	有尾式				
D－13	1.56	1.30	0.86	0.80	0.21	楕円形	皿状					礫
D－14	1.16	－	0.82	－	0.29	楕円形？	椀状					礫
D－15	1.04	0.94	0.60	0.56	0.42	円形	椀状					

第12表　山峰遺跡北調査区土坑観察表

b．遺物

土器

Ｊ－１号住出土の縄文土器（第26図１～14）

図示したのはすべて第１群土器の有尾式土器である。

１、５、９、10は爪形文や沈線で菱形文様が構成される。２は０段多条縄文が菱形状に施文される。１、３、４、７は原体Ｒの無節縄文が施文される。６は列点状刺突により菱形文様が描かれ、８は半截竹管でＣ字状の刺突が口縁に沿って施される。11は半截竹管を軽く押しあてて渦巻文を描く。13は土製円盤、14は小型深鉢あるいはミニチュア土器である。

土坑、ピット出土の縄文土器（第27図１～６）

１から５は第１群土器の有尾式土器である。１、３は０段多条縄文、２はＲＬの単節斜縄文を施文する。４はＲの単節斜縄文、５はＬＲの単節斜縄文を施文する。６は第４群２類土器の勝坂式土器で緩やかに湾曲する隆帯に沿って細い沈線が施される。どの遺構でも遺物の出土量は少ない。

北調査区出土の縄文土器（第27図７～25）

７から21は第１群土器の有尾式土器である。７はＬＲＬの直前段合撚、８はＲＬＲの直前段合撚の羽状縄文、９、10は０段多条縄文が施文される。11は口縁端部に爪形文が巡り、12は斜位沈線文が施文される。13から16は爪形文によって文様が構成され、16は爪形文間に刻みを有する。

17から19は沈線文で文様が構成され、地文にＬＲＲの前々段反撚縄文が施文される。20は斜位の沈線のなかに列点状刺突がみられ、21は沈線文と刺突文で文様が構成される。22は口唇部に突起がつき、縄文施文後に横位の沈線が施される。

23は地文にＲＬの単節斜縄文を施し、沈線文で横線文と横位の矢羽根状文が施文される第２群１類土器の諸磯ｂ式土器である。24は縦位の矢羽根状沈線を地文に持ち、ボタン状貼付文が認められる第２群２類土器の諸磯ｃ式土器である。25は大型の環状突起を持つ第４群２類土器の勝坂３式土器である。

［所見］

Ｊ－１号住居址から出土した縄文土器は、口縁部文様帯に半截竹管による爪形文で菱形を構成し、単節もしくは無節の斜縄文で羽状縄文を構成する。これらの土器は大下原遺跡（1993）のＩｂ段階（有尾式土器中段階）に相当する。また、口縁部に櫛歯状工具による列点状刺突が施された資料がみられ、若干古い様相も伺われる。

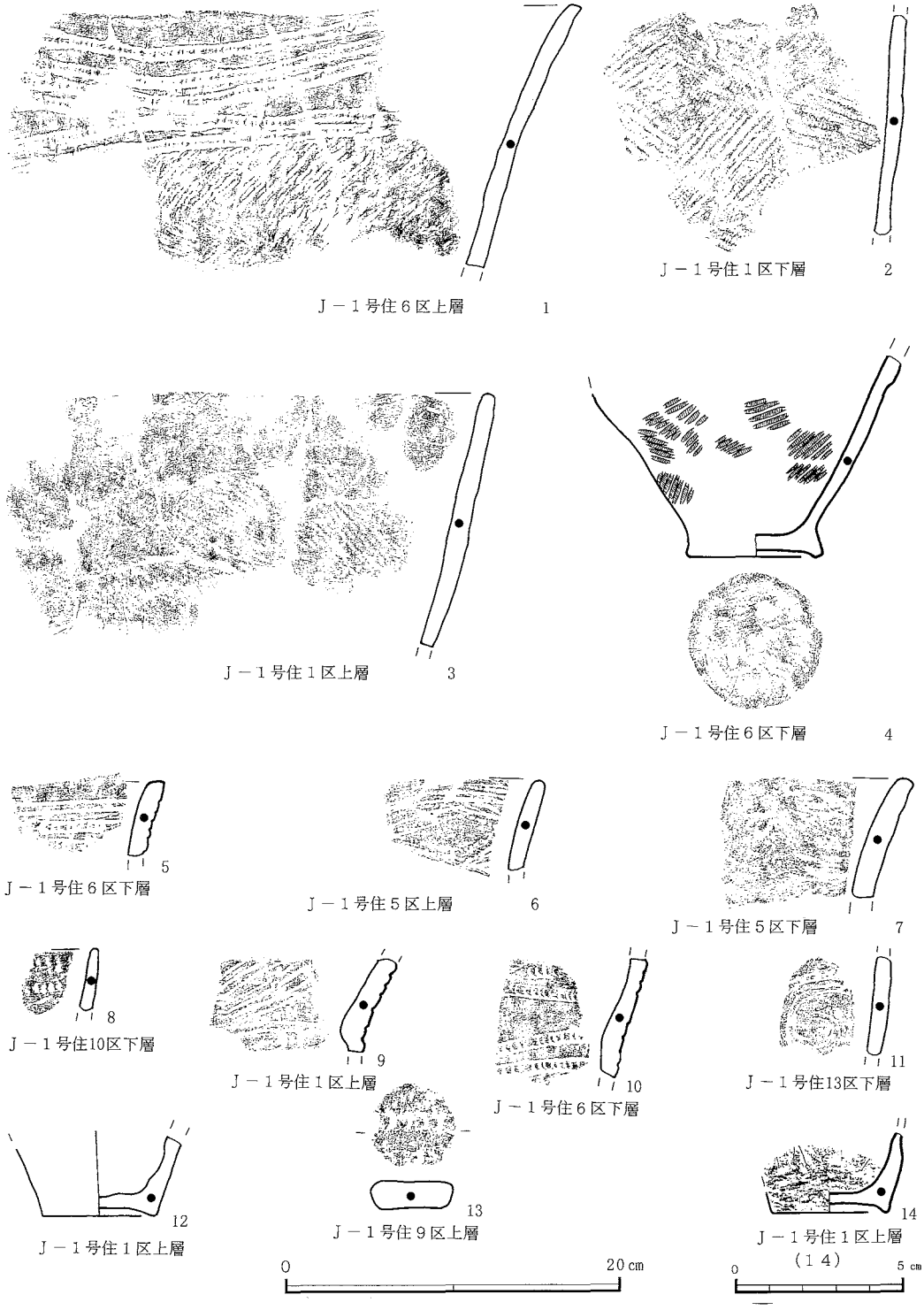
また、山峰遺跡北調査区から出土した縄文土器は前期中葉～中期中葉までが見られるが、総体的にみると、有尾式土器（第１群土器）が一番多く、次に諸磯式土器（第２群土器）が多く、他に勝坂式土器（第４群２類土器）がある。また、北調査区内での分布を見ると、前期中葉の土器はＡ１グリッドとＡ２グリッド及びＢ２グリッドにかたよって分布する。一方、前期後半の土器はＢ１グリッドとＢ２グリッドに偏って分布する。さらに中期中葉の土器はＡ２グリッドに偏りが見られる。

（中澤信忠）

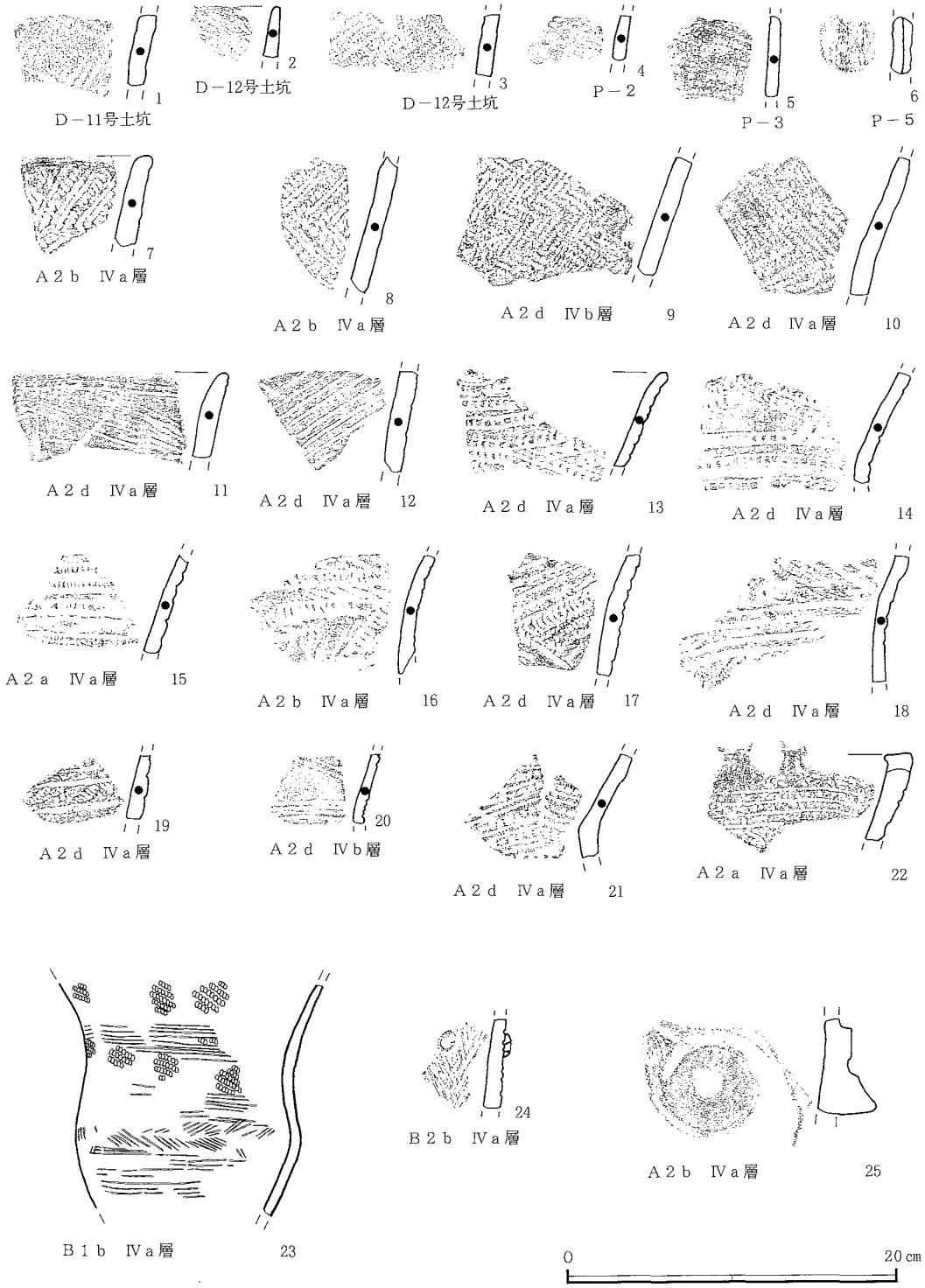
石器

Ｊ－１号住居址出土の石器

［石器組成］（第28図）



第26図　Ｊ－１号住居址出土の土器



第27図　北調査区出土の土器

Ｊ－１号住居址では覆土中から石器108点が検出されている。石器組成は第28図のとおりである。この住居址に対する廃棄行為は住居址覆土出土土器との共伴関係により、短期的に収束したものと考えられ、有尾段階の一括性が高い石器群に帰属すると考えられる。ただし、住居址の半分が既存の鉄塔基礎のため未調査であるため、住居址全体の石器組成は把握できなかった。

器種系列　本住居址におけるＡ類・Ｂ類の石器（狭義）と剥片類の数量比からパターンを検討すると、本地域の有尾段階に特徴的なＡ類石器の製作、消費が低調である傾向とＢ類石器のスクレイパーＢ類を中心に製作、消費がやや活発であるといった傾向が認められる。これはパターンａ１あるいはａ$_1$に分類されるが、全体組成が不十分であるため、傾向の指摘に留めておきたい。

器種組成　Ａ類石器は石鏃（未成品）、石錐、石匙Ａ各１点、スクレイパーＡ類４点と非常に少ない。Ｂ類石器では、打製石斧、石匙Ｂ、リタッチドフレイクＢ類は少量検出されるが、スクレイパーＢ類が圧倒的に多いのが特徴的である。Ｃ１類では凹石が多く、磨石、石皿は少ないといった有尾段階の一般的な組成傾向が認められる。Ｃ２類では敲石２点、砥石１点が少量組成している。Ｅ類では磨製石斧の破片が検出されている。

本住居址の器種組成は、全体が調査されていないため、全容は不明だが、Ｂ類石器（特にスクレイパーＢ類）が最も多く、次いでＣ１類、Ａ類石器の順となり、Ｃ２類、Ｅ類も最低量組成する傾向が認められる。

石材組成　石材種別の個数組成では、Ⅱ類が最も多く次いでⅠ類、Ⅲａ類の順と続き、それ以外の種別はどれも数量的には少ない。石材種別ごとにみると、Ⅰ類では黒曜石、黒色安山岩、チャートの順となるが重量的には少ない。Ⅱ類では頁岩に限られている。また、Ⅲａ類の安山岩は個数では少ないものの重量的には大きな割合を占めている。その他少量の石材では、砂岩（Ⅲｂ類）、結晶片岩（Ⅳ類）、緑色岩類（Ⅴ類）が存在する。本地域の有尾段階の石材組成では、一般的に黒曜石を含め、Ⅰ類全体が少量である傾向が認められる。また、Ｂ類石器の主な素材には頁岩、Ｃ１類石器の主な素材には安山岩が大きな割合を占めている。これらに照らし合わせると、Ｊ－１号住居址も当該期の一般的な傾向を示していると言える。

［石器各説］（第29図～第31図）

Ａ類石器

［石鏃未成品］（第29図１）　１点検出されている。１は押圧剥離工程の中で放棄されたものである。黒曜石製である。

［石錐］（第29図２）　１点検出されている。２はⅡａ形態（摘み有り・小形）に分類される。先端は欠損している。チャート製である。

［石匙Ａ類］（第29図３）　１点検出されている。３は摘み部のみに調整を施したⅡａ形態

（横形・押圧剥離による精緻な調整）に分類される。黒曜石製である。

［スクレイパーＡ類］（第29図４～６）　４点検出されている。Ⅰａ形態（押圧剥離による精緻な調整）１点（４）、Ⅰｂ形態（押圧剥離と直接打撃による調整）２点（５）、Ⅲ形態（縁辺微細剥離）１点（６）である。全て黒色安山岩製である。

Ｂ類石器

［打製石斧］（第29図７・８）　２点検出されている。２点ともⅡ形態に分類される。７は刃部裏面に小剥離痕が観察され、擦痕が少ない。刃部と両側縁部にはリダクションにより変形している。８は刃部の両面に擦痕が観察される。これも基部付近にリダクションにより小形化している。いずれも頁岩製である。

［石匙Ｂ類］（第29図９～11）　４点検出されている。Ⅰａ形態（縦型・押圧剥離と直接打撃を併用した調整）１点（９）、Ⅱａ形態（横型・押圧剥離と直接打撃を併用した調整）２点（10・11）、摘み部分１点である。９は全体が被熱している。10は摘み部を中心に調整を施している。11は摘み部と刃部に押圧剥離を施している。全て頁岩製である。

［スクレイパーＢ類］（第30図１～18）　28点検出されている。Ⅰｂ形態（粗雑な押圧剥離と細かい直接打撃による調整）の片刃４点（１～３）、Ⅱ形態の両刃７点（４～６）、同片刃12点（７～14）、Ⅲ形態（縁辺微細剥離）６点（15～18）に分類される。大きさは長さ2.5～12.7cm、幅2.4～14.1cmの範囲に収まる。ただし、長さ幅共に8cmを越える大形のもの（10･14）は非常に少ない。また、平均値では長さ5.3cm、幅6.5cmとなり、スクレイパーＢ類の素材には長幅比が１：１に近い幅広剥片や不定形剥片が選択され、横長剥片（１）と縦長剥片（18）は少ない傾向が認められる。剥片Ｂ類の大きさの平均値は長さ幅共に4.1cm程度であり、スクレイパーＢ類には剥片Ｂ類の中でやや大きめな剥片が選択されていることが確認できる。また、素材剥片の中には剥片剥離に際し、打面に対してやや斜め方向から加撃するものもある。形態的にはⅡ形態が多く、これらには素材剥片の形状、調整の部位等に弱いながらも範型が認められる。こうした本住居址のスクレイパーＢ類は前期前半期（有尾段階）に特徴的なＢ類石器の石器製作システムにおける「直接打撃系列の並列形工程配置」（大工原1996）を反映しているものとして捉えられる。安山岩製１点を除き、全て頁岩製で占められる。

［リタッチド・フレイクＢ類］　図示しなかったが５点検出されている。形態はスクレイパーＢ類のⅢ形態に準ずる。小形縦長剥片素材１点を除き、４点は幅広剥片を素材としている。全て頁岩製である。

Ｃ１類石器

［磨石］（第31図１・２）　２点検出されている。１はⅠ形態に分類される。端部に敲打痕が観察される。２は特殊磨石である。これは断面が三角形状を呈し、一側縁に摩耗面をもつもの

で早期段階のものと考えられる。ただし、本遺跡では早期の遺構・遺物は全く検出されていないため、石器群に伴うものかは不明である。いずれも安山岩製である。

［凹石］（第31図３～７）　６点検出されている。Ⅰｂ形態１点（３）、Ⅱｂ形態５点（４～７）である。欠損しているもの２点、被熱のみ２点である。また、作業面の凹面が深いもの３点、浅いもの３点である。本住居址の凹石は、全て凹→磨面の順序で使用されていたと推定される。結晶片岩製１点を除き、全て安山岩製である。

［石皿］（第31図８・９）　２点検出されている。８はⅡａ形態の大形に分類される。結晶片岩製である。９はⅡａ形態の破片である。安山岩製である。

Ｃ２類石器

［敲石］（第31図10・11）　２点検出されている。Ⅲ形態（棒状）１点（10）、Ⅳ形態（不定形）１点（11）である。２点とも端部に敲打痕が集中することから、石器製作用の敲打器と推定される。頁岩製と砂岩製である。

［砥石］（第31図12）　１点検出されている。12はⅠ形態（荒砥）に分類される。作業面には有溝が存在する。（牛伏）砂岩製である。

Ｅ類石器

［磨製石斧］（第31図13）　基部付近の破片１点が検出されている。13は残存形状から推測してⅡａ形態に分類される。緑色岩類製である。

土坑出土の石器

［石器組成］

Ｄ－７号土坑、Ｄ－８号土坑において石器各１点が検出されているのみである。内訳は打製石斧と剥片Ａ類（黒曜石）である。

［石器各説］

Ｂ類石器

［打製石斧］（第32図１）　１点検出されている。１はⅡ形態に分類される。刃部には擦痕が観察される。黒色安山岩製である。

調査区出土の石器

［石器組成］（第28図）

山峰遺跡における調査区出土の石器組成は第28図に示したとおりである（土坑出土２点を除く）。石器はＹ－１号住居址覆土から12点、北調査区25点の合計37点が出土している。Ｙ－１号住居址覆土の石器は一部縄文時代に帰属する石器が混在するため、流れ込みである可能性が高い。また、北調査区の石器は、共伴する土器型式から前期中葉（有尾式）～中期中葉（勝坂）の石器が混在しているものと推定される。時期が特定できないため、石器組成の傾向は示せな

いが、狭義の石器（Ｂ類石器、Ｃ１類石器）が比較的多く検出されている。また、棒状礫も２点検出されている。

［石器各説］（第32図）

Ｂ類石器

［石匙Ｂ類］（第32図２）　１点検出されている。２はＩａ形態に分類される。頁岩製である。

［スクレイパーＢ類］（第32図３～５・11）　６点検出されている。Ｉｂ形態の片刃１点（11）、Ⅱ形態の両刃１点（３）、同片刃２点（４）、Ⅲ形態２点（５）である。全て頁岩製である。

Ｃ１類石器

［磨石］（第32図６）　１点検出されている。６はＶ形態（不定形）に分類され、端部に敲打痕が観察される。安山岩製である。

［凹石］（第32図７～９）　５点検出されている。Ⅱａ形態（楕円形・磨→凹）１点（７）、Ⅱｂ形態４点（８・９）、破片１点 である。全て安山岩である。

Ｃ２類石器

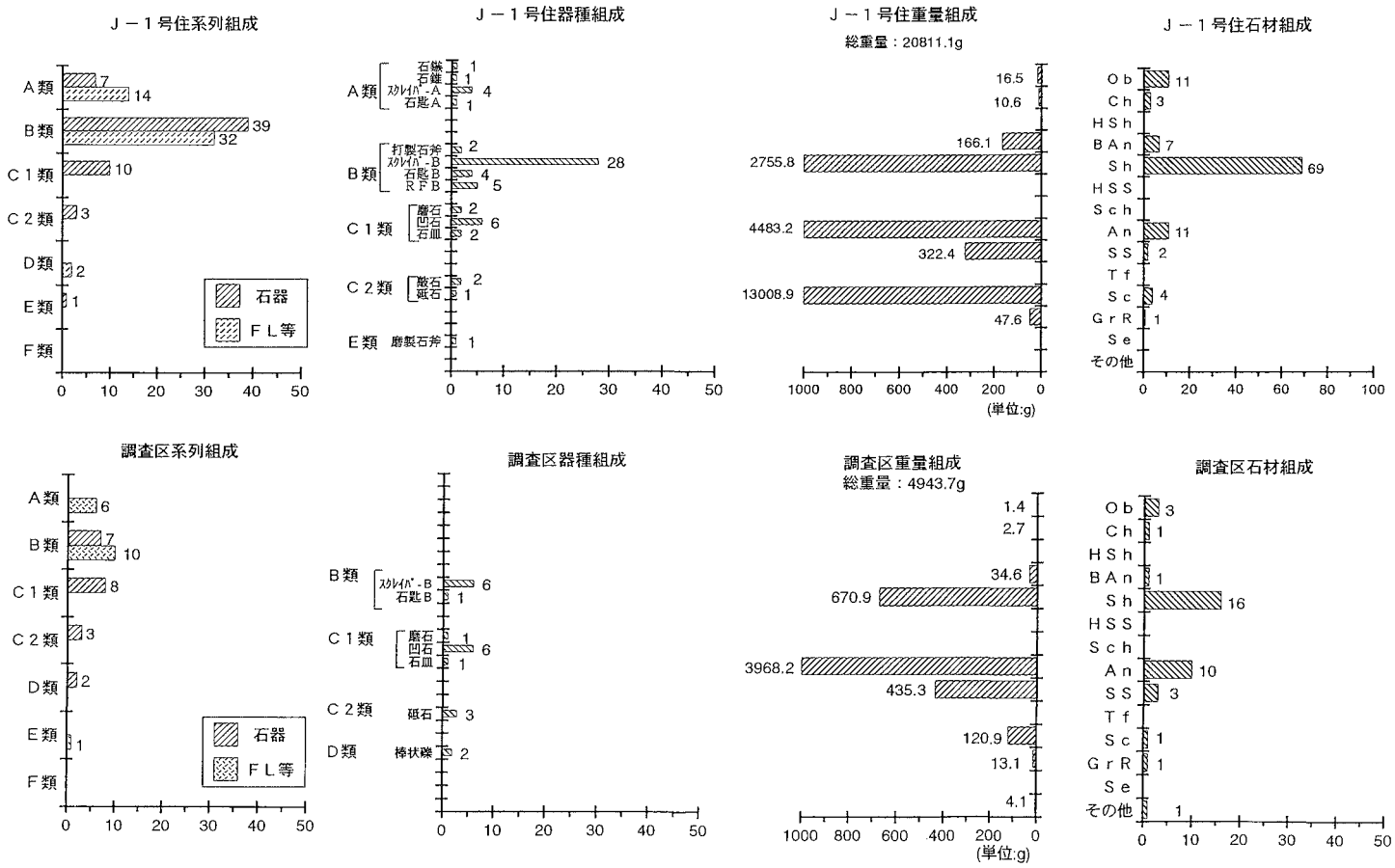
［砥石］（第32図12）　３点検出されている。全てＩ形態（荒砥）に分類される。12は長軸に対して斜めに、Ｖ字状の深い溝が観察される。全て（牛伏）砂岩製である。

Ｄ類石器

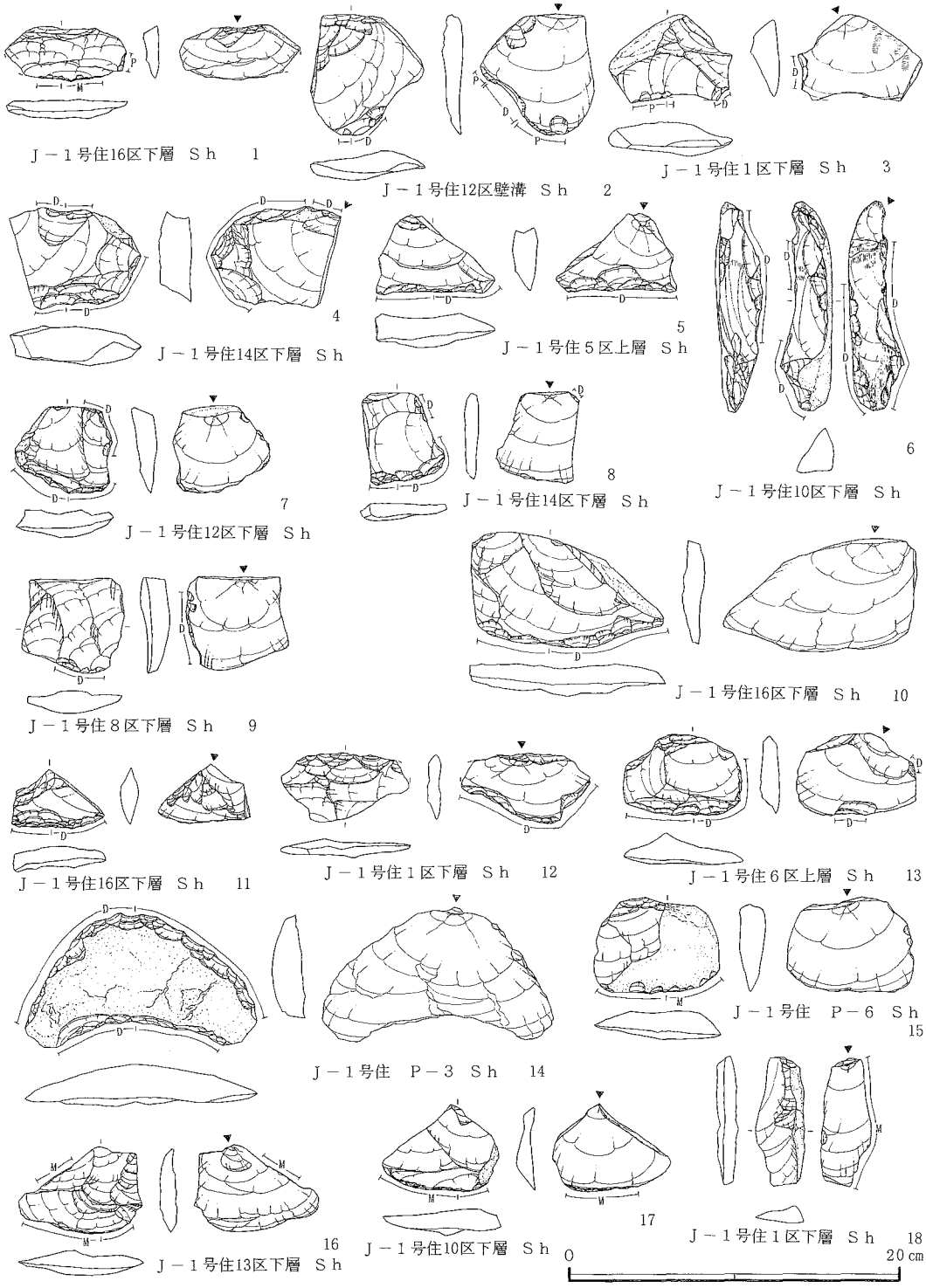
［棒状礫］（第32図10）　２点検出されている。10は部分的に加工痕と研磨痕が観察される。自然形状を生かし、加工による整形が顕著でないので棒状礫に分類した。両端が欠損していることから敲石の可能性もある。結晶片岩製である。その他１点は小形棒状で遺跡内に搬入された自然礫である。加工痕は観察されない。安山岩製である。

［所見］

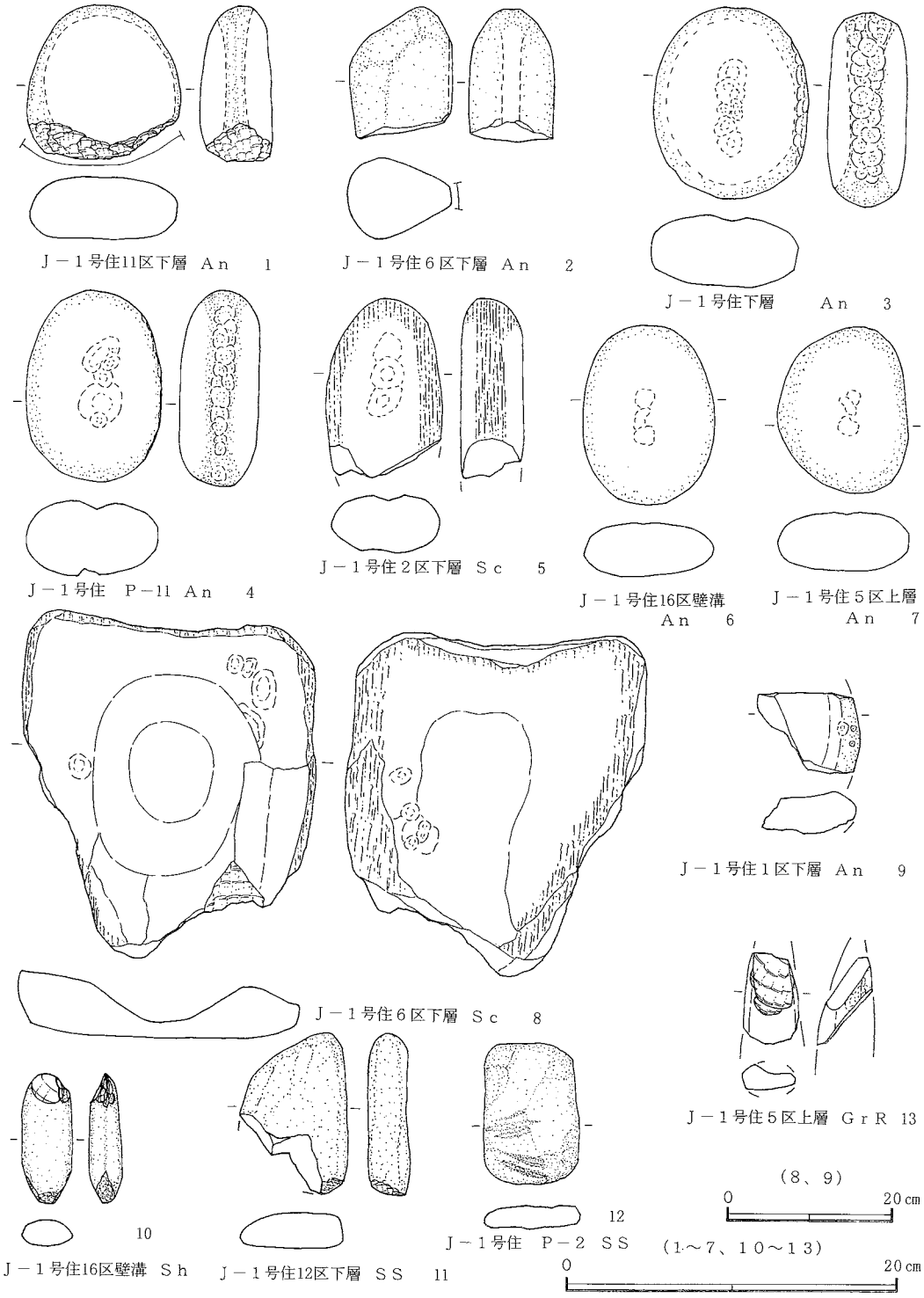
Ｊ－１号住居址は、約半分が既存の鉄塔があるため未調査であり、石器組成の全体傾向を把握することはできなかった。しかし、限られた石器分析から、石器製作構造では打製石器において器種が並列に工程は位置される「有尾・黒浜式直接打撃系列」（大工原1996）が認められた。また、石材組成では、Ａ類石器が極端に少なく、Ｂ類石器（特にスクレイパーＢ類）を製作・消費するパターンが認められた。石材では黒曜石は少数で、在地石材である頁岩を多用する傾向が認められる。このように、Ｊ－１号住居址が示す石器組成（系列組成、器種組成、石材組成）は、中野谷地区遺跡群（中原遺跡、大下原遺跡、中野谷松原遺跡、三本木Ⅱ遺跡等）、清水Ⅰ遺跡をはじめとする本遺跡周辺で確認されている有尾段階における石器群の特徴と類似していることが判明した。　（井上慎也）


J－1号住系列組成
A類 7 14
B類 39 32
C1類 10
C2類 3
D類 2
E類 1
F類
石器
FL等
0 10 20 30 40 50
J－1号住器種組成
A類 石鏃 1 石錐 1 スクレイパー-A 4 石匙A 1
B類 打製石斧 2 スクレイパー-B 28 石匙B 4 RFB 5
C1類 磨石 2 凹石 6 石皿 2
C2類 敲石 2 砥石 1
E類 磨製石斧 1
0 10 20 30 40 50
J－1号住重量組成
総重量：20811.1g
16.5
10.6
166.1
2755.8
4483.2
322.4
13008.9
47.6
1000 800 600 400 200 0
(単位:g)
J－1号住石材組成
Ob 11
Ch 3
HSh
BAn 7
Sh 69
HSS
Sch
An 11
SS 2
Tf
Sc 4
GrR 1
Se
その他
0 20 40 60 80 100
調査区系列組成
A類 6
B類 7 10
C1類 8
C2類 3
D類 2
E類 1
F類
石器
FL等
0 10 20 30 40 50
調査区器種組成
B類 スクレイパー-B 6 石匙B 1
C1類 磨石 1 凹石 6 石皿 1
C2類 砥石 3
D類 棒状礫 2
0 10 20 30 40 50
調査区重量組成
総重量：4943.7g
1.4
2.7
34.6
670.9
3968.2
435.3
120.9
13.1
4.1
1000 800 600 400 200 0
(単位:g)
調査区石材組成
Ob 3
Ch 1
HSh
BAn 1
Sh 16
HSS
Sch
An 10
SS 3
Tf
Sc 1
GrR 1
Se
その他 1
0 10 20 30 40 50

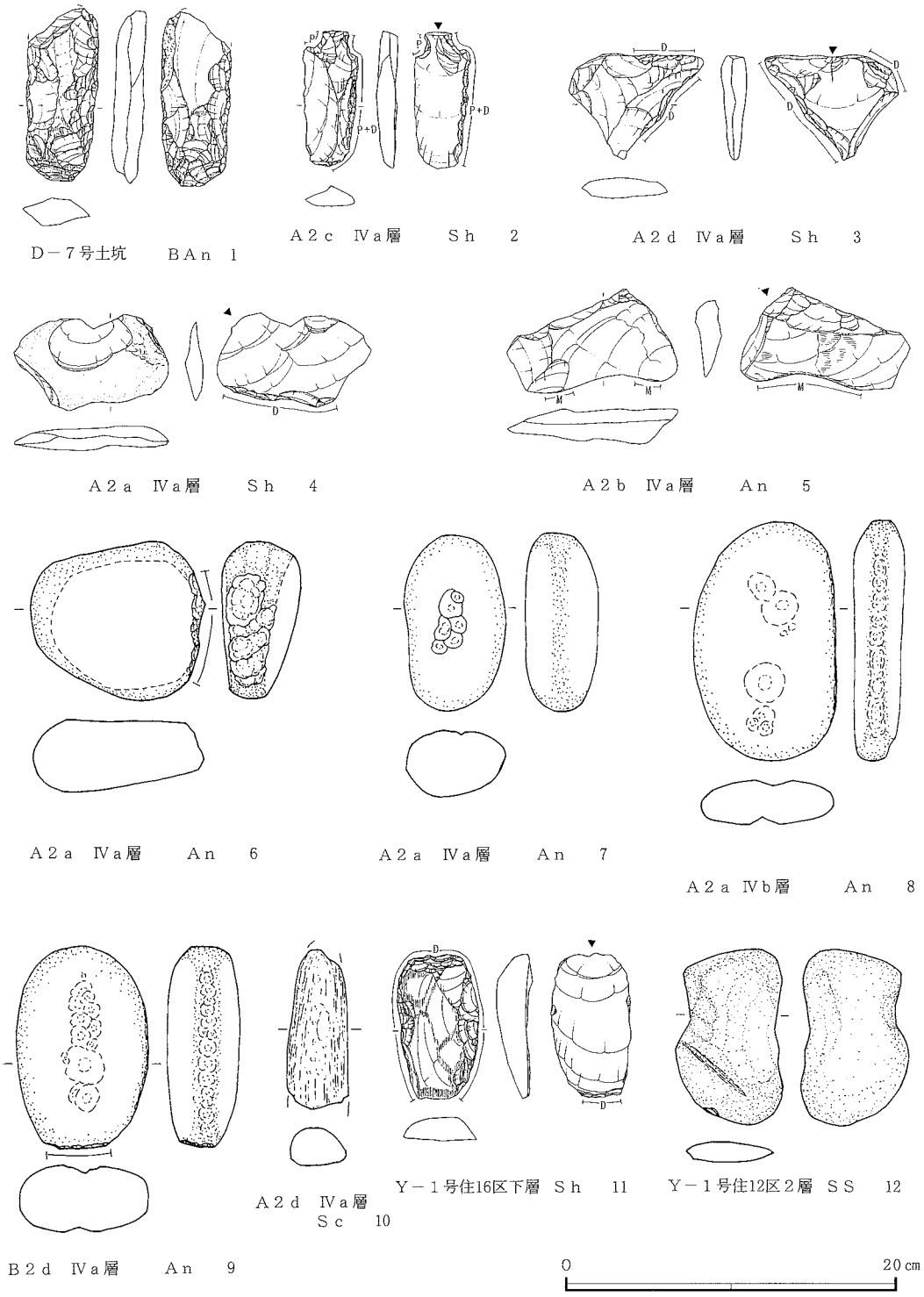
第29図　J－1号住居址出土の石器（1）



第30図　J－1号住居址出土の石器（2）



第31図　J－1号住居址出土の石器（3）



第32図　北調査区及びY－1号住址出土の石器

（２）弥生時代の遺構・遺物

ａ．遺構

Ｙ－１号住居址（第33図）

全体は調査できなかったが、平面が長方形の住居になると推定される。また、Ｐ－１は主柱穴の一つになると思われる。床には貼床が見られた。また、床面から炭化材が出土し、いわゆる焼失住居である。

住居名	平面形態	規模（m）			時期	主軸方向	主柱穴	床面	炉	
		長軸	短軸	深さ					位置	構造
Ｙ－１号住	長方形？	7.59	－	0.5	樽式３期	N-35.0°-E	1	貼床	－	－

第13表　弥生時代住居址観察表

遺物出土状態（第34図）

［**土器**］復元可能な個体の分布を見ると、８区と12区で出土している。壺は床に置かれるように出土した。鉢や高坏は３層から出土している。

［**石器**］４区と８区の境において、床直で牛伏砂岩製の砥石が出土している。

ｂ．遺物

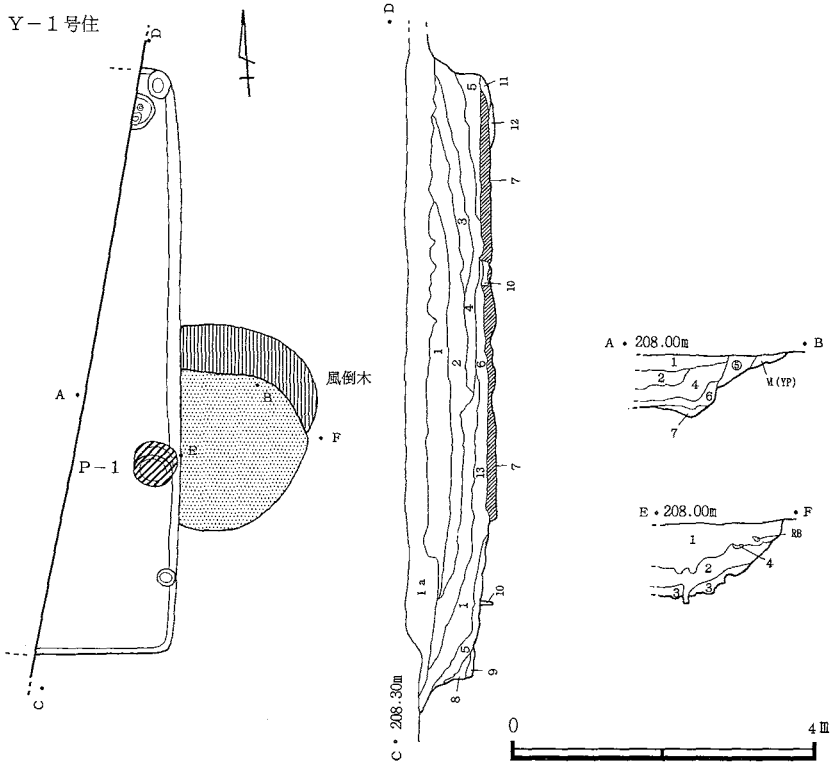
土器（第34図１～４）

２段の複合口縁を持つ壺や、甕、鉢、高坏等が出土している。壺（第35図１）は胴部から底部を欠くが、口縁部は頸部から大きく外反し、２段の複合口縁を持つ。口縁部には文様を施さない。頸部に横位の刷毛調整を行った後、縦位の箆磨きを施す。上胴部に櫛描廉状文、櫛描綾杉文を施している。高坏（第35図４）は坏部を欠くが、脚部は裾の開きが強く、縦位の箆磨きを施すものである。鉢（第35図３）は内湾する口縁を持ち、口縁部で横位のヘラミガキを行い、底部から胴部にかけては斜位のヘラミガキを施す。また、図示してないが赤色塗彩された高坏と思われる破片も出土した。こうした土器の特徴から飯島・若狭編年の樽式３期に比定できる。

［**所見**］

２段の複合口縁を持つ壺は、『有馬遺跡Ⅱ』の239号住居址（２）で出土しているが、山峰遺跡で出土した壺と比べると、口縁部が無文である点や内面に刷毛目を残す点が異なる。また、『天引向原遺跡Ⅲ』の65号住で口縁に３段の無文の複合口縁を持つ壺が出土しているが、口縁部の開き具合が山峰遺跡例に比べるとやや弱い。

（深町　真）



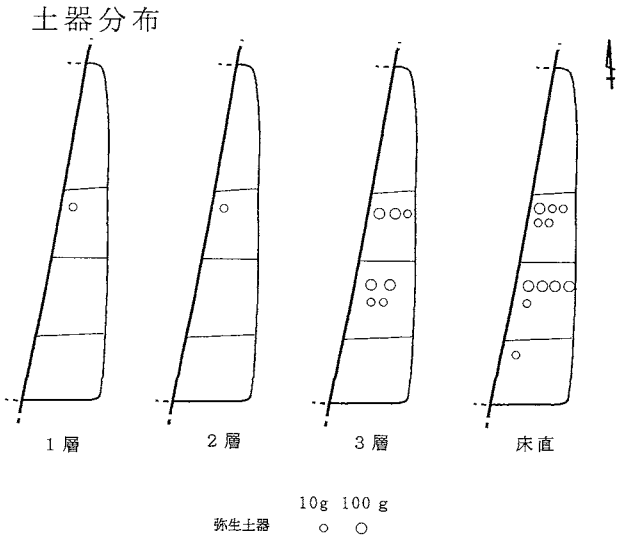
G－25C、Y－1号住

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	焼土	As-C	備考
Y－1号住	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	×	×	
(C－D)	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	※	×	×	
	4	暗褐色土層10YR	3＞4	○	○	※	×	※	※	×	
	13	黒褐色土層10YR	2＞13	○	○	※	×	※	×	×	3に類以
	5	暗褐色土層10YR	4＞5	○	○	※	×	○	×	△	
	6	暗褐色土層10YR	4＜6	○	○	△	※	※	※	○	4に類以
	7	暗黄褐色土層10YR	6＜7	◎	◎	◎	◎	※	×	×	貼床
	8	黄褐色土層10YR	5＜8	◎	○	◎	◎	※	×	×	
	9	暗褐色土層10YR	8＞9	○	○	※	※	△	×	※	
	10	黒褐色土層10YR	5＞10	○	○	※	※	×	×	※	
	11	暗褐色土層10YR	7＞11	◎	○	△	△	※	×	×	
	12	黒褐色土層10YR	11＞12	○	○	※	※	×	×	×	

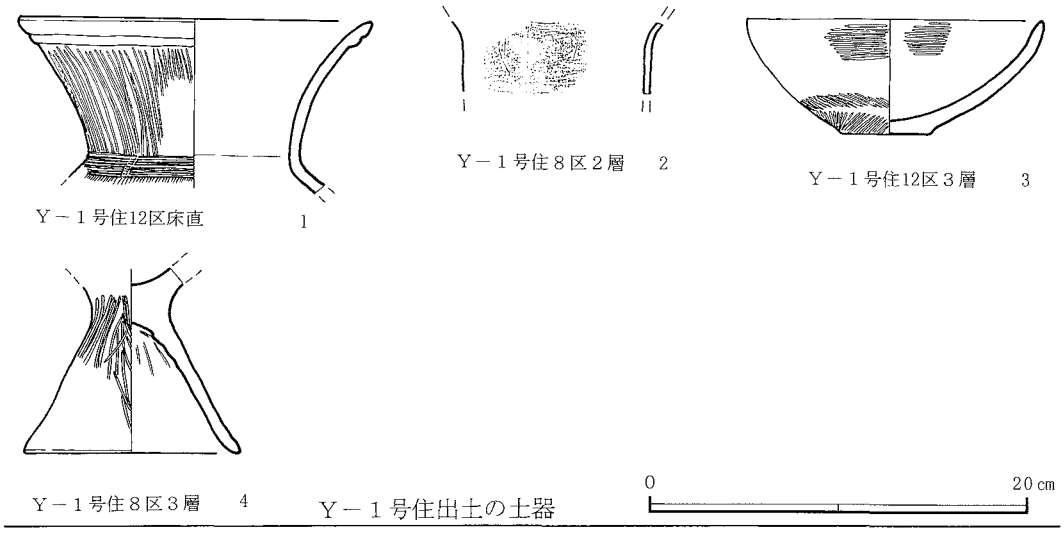
G－25C、風倒木

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP
風倒木	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	※
(E－F)	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	◎	△	△	△

第33図　Y－1号住居址実測図



第34図　Y－1号住居址遺物分布図



第35図　Y－1号住居址出土の弥生土器

（３）時期不明の遺構

Ｍ－３号溝（第36図）

上幅１ｍ、深さ0.1ｍで、ほぼ南北方向に走っている。遺物は全く出土しなかった。底は平らでなく凹凸が見られた。地震による亀裂であると推定される。

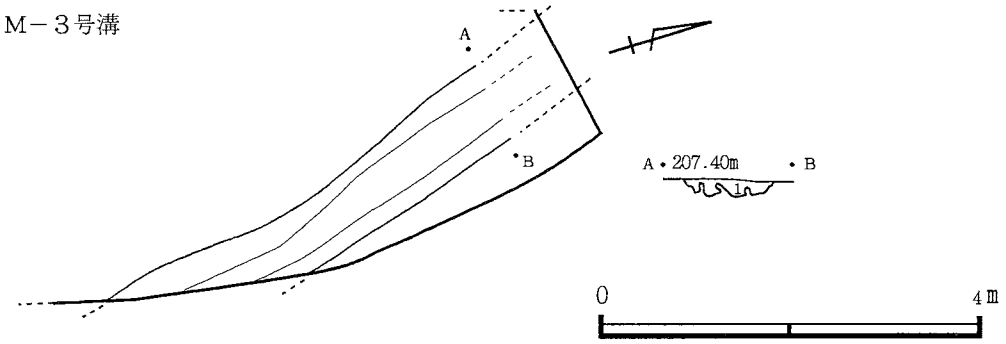
Ｄ－５号土坑（第25図）

Ｊ－１号住居址の北側に位置する。遺物が全く出土せず、時期や用途が不明である。

土坑	規模（上端）		規模（下端）		深さ(m	形　態		時期	土器	石器		礫
番号	長径	短径	長径	短径		平面	断面			石器(狭義)	剥片・石核	
Ｄ－５	1.32	1.18	0.84	0.64	0.30	楕円形	皿状					

第14表　山峰遺跡出土土坑観察表

（深町　真）



Ｇ－25Ｃ、Ｍ－３

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-A
Ｍ－３	1	黒褐色土層10YR		○	○	△	△	※	※

第36図　Ｍ－３号溝実測図

挿図No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	時期	胎土	色調	焼成	器形・文様の特徴	残存状態	残存重量	備考
第５図	1	G-25A	M－２	7		深鉢	五領ケ台式併行	片岩、石英（多）を含む	にぶい褐 7.5YR	良好	地文に原体ＲＬの単節斜縄文を施文する。結節縄文が横位に巡る。口唇部は角頭状を呈する。	口縁部破片		
第５図	2	G-25A	M－２	5		深鉢	阿玉台式	片岩、金雲母（多）、石英を含む	暗赤褐 5YR	良好	棒状工具による２本の波状沈線文が施文され、同一工具による刺突文が施される	破片		
第５図	3	G-25A	D－２			深鉢	加曽利Ｅ４式	片岩、黒雲母、小礫を含む	にぶい橙 7.5YR	良好	断面が三角の隆帯による懸垂文。地文に原体ＲＬの単節斜縄文を施文する。	破片		
第５図	4	G-25A	D－４			深鉢	加曽利Ｅ３式	白色粒、黒雲母含む	にぶい橙 7.5YR	良好	地文に原体Ｌの無節斜縄文を施文し、磨り消しを行う。	破片		
第12図	1	G-25B	H－２ 覆土			深鉢	加曽利Ｅ３式	片岩、黒雲母を含む	にぶい黄橙 10YR	良好	棒状工具による沈線が沿う隆帯に区画された箇所に原体ＲＬの単節斜縄が充填される。隆帯の連結部には円形刺突が施される。	口縁部破片		
第12図	2	G-25B	H－２	8	2	深鉢	加曽利Ｅ３式	片岩、黒雲母を含む	灰黄褐 10YR	良好	棒状工具による沈線に区画された箇所に原体ＲＬの単節斜縄文が充填される。	口縁部破片		
第12図	3	G-25B	H－７	1	1	深鉢	加曽利Ｅ４式	片岩、黒雲母を含む	浅黄橙 10YR	良好	緩やかな波状口縁を呈し、隆帯が巡る。地文に原体Ｒの無節斜縄文を施文する。	口縁部破片		
第12図	4	G-25B	H－４	2	2	深鉢	称名寺１式	片岩、黒雲母、小礫を含む	浅黄橙 7.5YR	良好	地文に原体ＬＲの単節斜縄文を施文。棒状工具による沈線で渦巻文を描出する。	破片		
第12図	1	G-25C	J－１	6	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	にぶい赤褐 2.5YR	良好	緩やかな波状口縁を呈し、原体Ｒの羽状縄文を施文。巾8mmの半截竹管状工具による連続爪形文で山形文を描出する。	口縁部1/4	450	
第26図	2	G-25C	J－１	1	下層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	にぶい橙 5YR	良好	地文に０段多条縄文で菱形を描出する。	破片		
第26図	3	G-25C	J－１	1	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	にぶい黄橙 10YR	良好	地文に原体Ｒの無節斜縄文を施文する。	口縁部1/2	395	
第26図	4	G-25C	J－１	6	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	橙2.5YR	良好	底径7.9cm。地文に原体Ｒの無節斜縄文を施文する。	胴部～底部全周	610	
第26図	5	G-25C	J－１	6	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	にぶい赤褐 5YR	良好	緩やかな波状口縁を呈し、巾7mmの半截竹管状工具による連続爪形文と沈線文が施文される。	口縁部破片		
第26図	6	G-25C	J－１	5	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	にぶい褐 7.5YR	良好	巾8mmの半截竹管状工具による沈線で菱形が描出される。沈線に沿って刺突文が施される。	口縁部破片		
第26図	7	G-25C	J－１	5	下層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、黒雲母、小礫を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	地文に原体Ｒの無節斜縄文を施文する。	口縁部破片		二次的に被熱
第26図	8	G-25C	J－１	10	下層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	明赤褐 2.5YR	良好	巾4mmの半截竹管状工具による刺突文。	口縁部破片		
第26図	9	G-25C	J－１	1	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 小礫を含む	にぶい赤褐 5YR	良好	巾7mmの半截竹管状工具による沈線で山形文を描出する。	破片		
第26図	10	G-25C	J－１	6	下層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、石英、小礫を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	巾7mmの半截竹管状工具による連続爪形文を施文する。	破片		
第26図	11	G-25C	J－１	13	下層	深鉢	黒浜式	繊維（多） 片岩を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	巾5mmの半截竹管状工具による連続爪形文と沈線文で渦巻文を描出する。	破片		
第26図	12	G-25C	J－１	1	上層	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	底径6.8cm。	底部		
第26図	13	G-25C	J－１	9	上層	土製円盤	石尾式	繊維（多） 片岩、黒雲母を含む	にぶい褐 7.5YR	良好	直径2.7cm。巾6mmの半截竹管状工具による連続爪形文がみられる。	完形		
第26図	14	G-25C	J－１	1	上層	ミニチュア土器	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	暗赤褐 5YR	良好	底径3.5cm。無文。	底部		
第27図	1	G-25C北調査区	D－11			深鉢	石尾式	繊維（多） 白色粒を含む	にぶい黄橙 10YR	良好	地文に０段多条縄文で菱形を構成する。	破片		
第27図	2	G-25C北調査区	D－12			深鉢	石尾式	繊維（多） 白色粒、黒雲母を含む	褐灰 10YR	良好	地文に原体ＲＬの単節斜縄文を施文する。	口縁部破片		

第15表　日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡出土の縄文土器観察

挿図No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	時期	胎土	色調	焼成	器形・文様の特徴	残存状態	残存重量	備考
第27図	3	G-25C北 調査区	D－12			深鉢	石尾式	繊維（多） 白色粒、石英を含む	にぶい黄橙 10YR	良好	地文に０段多条縄文を施文する。	破片		
第27図	4	G-25C北 調査区	P－2			深鉢	石尾式	繊維（多） 白色粒を含む	赤褐 5YR	良好	地文に原体Ｒの無節斜縄文を施文する。	破片		
第27図	5	G-25C北 調査区	P－3			深鉢	石尾式	繊維（多） 白色粒を含む	明赤褐 5YR	良好	地文に原体ＬＲの単節斜縄文を施文する。	破片		
第27図	6	G-25C北 調査区	P－5			深鉢	勝坂３式	白色粒、黒雲母、砂粒を含む	にぶい赤褐 5YR	良好	隆帯に沿って細い沈線を施文する。	破片		
第27図	7	G-25C北 調査区	亀裂	A2b	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	にぶい橙 7.5YR	良好	地文に直前段合撚縄文を施文する。	口縁部破片		
第27図	8	G-25C北 調査区	亀裂	A2b	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	浅黄橙 10YR	良好	地文に直前段合撚縄文を羽状に施文する。	破片		
第27図	9	G-25C北 調査区	亀裂	A2d	Ⅳb	深鉢	石尾式	繊維（多）を含む	黒褐 5YR	良好	地文に０段多条縄文を施文する。	破片		
第27図	10	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	にぶい橙 7.5YR	良好	地文に０段多条縄文を羽状に施文する。	破片		
第27図	11	G-25C北 調査区	亀裂	A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	橙 5YR	良好	口縁端部に巾6mmの半截竹管状工具による間隔の広い爪形文が１列施文され、同一工具による沈線で山形文が描出される。	口縁部破片		
第27図	12	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、石英、小礫を含む	にぶい黄橙 10YR	良好	巾8mmの半截竹管状工具による沈線文を施文する。	破片		
第27図	13	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	橙 7.5Y	良好	巾7mmの半截竹管状工具による連続爪形文。	口縁部破片		
第27図	14	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、石英を含む	灰黄褐 10YR	良好	巾7mmの半截竹管状工具による連続爪形文で山形文を描出する。	破片		
第27図	15	G-25C北 調査区		A2a	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	橙 5YR	良好	巾9mmの半截竹管状工具による連続爪形文。	破片		
第27図	16	G-25C北 調査区		A2b	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	赤黒 2.5YR	良好	巾10mmの半截竹管状工具による連続爪形文で山形文を描出。爪形文間には斜位の刻みが施される。	破片		
第27図	17	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	地文に０段多条ＲＬの単節斜縄文を施文し、巾10mmの半截竹管状工具による連続爪形文、沈線文で菱形を描出する。	破片		
第27図	18	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	地文に０段多条ＲＬ，ＬＲの単節斜縄文を施文し、巾10mmの半截竹管状工具による沈線文で山形文を描出する。	破片		
第27図	19	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、小礫を含む	にぶい黄橙 10YR	良好	地文に０段多条ＲＬの単節斜縄文を施文し、巾11mmの半截竹管状工具による沈線文を施文する。	破片		
第27図	20	G-25C北 調査区		A2d	Ⅳb	深鉢	石尾式	繊維（少） 片岩、小礫を含む	黄橙 10YR	良好	巾5mmの半截竹管状工具による沈線文を施文。一部に刺突が施される。	破片		
第27図	21	G-25C北 調査区	亀裂	A2d	Ⅳa	深鉢	石尾式	繊維（多） 片岩、石英を含む	にぶい黄褐 10YR	良好	巾4mmの半截竹管状工具による沈線で山形文を描出し、列状に刺突が施される。	破片		
第27図	22	G-25C北 調査区	亀裂	A2a	Ⅳa	深鉢	諸磯ｂ式	片岩、黒雲母、黄砂粒を含む	灰白 2.5Y	良好	口唇部に円柱状の突起を有し、原体不明の縄文施文後に巾8mmの半截竹管状工具による沈線が巡る。	口縁部破片		
第27図	23	G-25C北 調査区		B1b	Ⅳa	深鉢	諸磯ｂ式	片岩、砂粒、小礫を含む	にぶい橙 7.5YR	良好	地文に原体RLの単節斜縄文を左右に施文し、巾3mmの平行沈線文で横線文を施す。また胴部の最大径に箇所に同施文工具による横位矢羽根状文が施文される。	胴部2/3	320	
第27図	24	G-25C北 調査区		B2b	Ⅳa	深鉢	諸磯ｃ式	片岩、黒雲母、石英を含む	黒褐 7.5YR	良好	地文に巾4mmの櫛歯状工具による沈線で縦位矢羽状文を施文。円形刺突を有するボタン状貼付文が付く。	破片		
第27図	25	G-25C北 調査区		A2b	Ⅳa	深鉢	勝坂３式	片岩、黒雲母、石英、黄砂粒を含む	明赤褐 5YR	良好	環状突起。	破片		

第16表　山峰遺跡出土の縄文土器観察表

挿図No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	法量（cm）			重量(g)	①焼成	②色調	③胎土	④残存	⑤成・整形技法の特徴	
							口径	底径	器高						外面	内面
第34図	1	G－25C	Y-1号住	12	床直	壺	19.00	－	(8.80)	410.80	普通	浅黄橙色	砂粒含	口縁部～頸部1/3	口縁下で横位のナデ、頸部は縦位のヘラミガキ	横位のナデ
第34図	2	G－25C	Y-1号住	8	2	甕	－	－	－	15.00	普通	暗赤褐色	細砂粒含	胴部　－	胴部は横位のヘラミガキ	横位のナデ
第34図	3	G－25C	Y-1号住	12	3	鉢	16.20	6.15	4.20	225.00	普通	橙色		口縁部～底部4/5	口辺部は横位のﾍﾗﾐｶﾞｷ、胴部～底部は斜めのﾍﾗﾐｶﾞｷ	口辺部に横位のﾍﾗﾐｶﾞｷ
第34図	4	G－25C	Y-1号住	8	3	高坏	－	(9.20)	11.40	200.00	普通	赤褐色	砂粒含	脚部　2/3	脚部に縦位のヘラミガキ、脚部下部に横位のナデ	

第17表　山峰遺跡Ｙ－１号住居址出土の弥生土器観察表

挿図No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	法量（cm）			重量(g)	①焼成	②色調	③胎土	④残存	⑤成・整形技法の特徴	
							口径	底径	器高						外面	内面
第８図	1	G－25A	M-2号溝	3		坩	－	－	－	30.00	良好	浅黄橙	砂粒、細砂粒含	底部破片	底部は横位のヘラケズリ	
第８図	2	G－25A	D-2号土坑			小型甕	－	(5.60)	(3.30)	90.00	良好	橙	砂粒、細砂粒含	底部破片	下胴部に縦位のヘラミガキ	
第10図	1	G－25A	H-1号住	1	2	甕	(17.60)	－	(6.30)	45.00	良好	にぶい褐	細砂粒含	口縁部破片	口縁部は横位のナデ、胴部は横位のヘラケズリ	横位のナデ
第10図	2	G－25A	H-1号住	11	2	甕	(17.20)	－	(6.30)	35.00	良好	暗赤褐	砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部は横位のナデ、胴部は横位のヘラケズリ	横位のナデ
第10図	3	G－25A	H-1号住	14	2	甕	(21.00)	－	(4.50)	20.00	良好	にぶい赤褐	小石、砂粒、細砂粒含	口縁部破片		横位のナデ
第10図	4	G－25A	H-1号住	3	貼床	小型甕	－	(5.80)	(2.10)	20.00	普通	浅黄橙	砂粒、細砂粒含	底部破片		
第10図	5	G－25A	H-1号住	7	1	小型甕	－	(6.80)	(2.80)	25.00	良好	明褐	砂粒、細砂粒含	底部破片	下胴部に斜位又は横位のヘラケズリ	横位のナデ
第10図	6	G－25A	H-1号住	8	床直	高台付皿	14.50	7.40	2.90	218.00	還元焔	灰白	細砂粒含	口縁～高台8/10		
第19図	1	G－25B	H-2号住2トレンチ			坏	11.50	－	3.30	90.00	良好	橙	小石、砂粒、細砂粒含	口縁～底部11/12	口縁～胴部は横位のナデ、下胴部は横位のヘラケズリ	横位のナデ
第19図	2	G－25B	H-2号住	16	1	坏	(11.20)	－	(3.20)	408.00	良好	橙	小石、砂粒、細砂粒含	口縁～底部1/3	口縁～胴部は横位のナデ、下胴部は横位のヘラケズリ	横位のナデ
第19図	3	G－25B	H-2号住	8	1	坏	(11.60)	－	(1.80)	5.00	良好	明赤褐	細砂粒含	口縁部破片	口縁～胴部に横位のナデ	横位のナデ
第19図	4	G－25B	H-2号住	15		高坏	(16.00)	－	(3.20)	10.00	普通	にぶい赤褐	砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部は横位のナデ	横位のナデ
第19図	5	G－25B	H-2号住D-1			高坏	(14.80)	－	(3.30)	10.00	良好	明褐	砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部は横位のナデ、胴部はヘラケズリ	横位のナデ
第19図	6	G－25B	H-2号住	14	2	高坏	－	－	(10.40)	240.00	良好	明赤褐	砂粒、細砂粒含	脚部破片	縦位のヘラミガキ	
第19図	7	G－25B	H-2号住	2	2	高坏	－	－	(3.70)	20.00	良好	明赤褐	砂粒、細砂粒含	脚部破片	縦位のヘラミガキ	
第19図	8	G－25B	H-2号住	9	1	高坏	－	－	(3.20)	120.00	良好	明赤褐	砂粒、細砂粒含	脚部破片	縦位のヘラミガキ	
第19図	9	G－25B	H-2号住	15	1	坏	(12.80)	－	(2.90)	10.00	良好	明赤褐	細砂粒含	口縁部1/8	口縁部は横位のナデ	横位のナデ
第19図	10	G－25B	H-2号住	15	2	小型甕	－	(8.50)	(3.50)	40.00	良好	明赤褐	小石、砂粒、細砂粒含	口縁部破片	下胴部に縦位のヘラケズリ	
第19図	11	G－25B	H-2号住	3	1	甕	(18.80)	－	(9.80)	40.00	普通	明赤褐	砂粒含	口縁部～胴部破片	口縁に横位のﾅﾃﾞ、頸部に横位のﾍﾗｹｽﾞﾘ、胴部に縦位のﾍﾗｹｽﾞﾘ	横位のナデ
第19図	12	G－25B	H-2号住2トレンチ			台付甕	－	－	(2.10)	20.00	普通	明黄褐	細砂粒含	下胴部～台部破片	刷毛目	

第18表　日向後原遺跡・野毛良遺跡出土の土器観察表

挿図No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	法量（cm）			重量(g)	①焼成	②色調	③胎土	④残存	⑤成・整形技法の特徴	
							口径	底径	器高						外面	内面
第19図	13	G－25B	H-4号住	11	1	坏	(12.70)	－	(5.20)	140.00	普通	橙	砂粒含	口縁～底部2/3	口縁部に横位のナデ、胴部～底部に斜位のヘラケズリ	横位のﾅﾃﾞ，暗文状ﾍﾗﾐｶﾞｷ
第19図	14	G－25B	H-4号住	11	1	高坏	－	(7.45)	(15.50)	450.00	良好	橙	細砂粒含	脚部1/2	縦位のヘラミガキ、裾に横位のナデ	
第19図	15	G－25B	H-4号住	11	1	甕	(19.40)	－	(6.00)	55.00	普通	にぶい褐	小石、砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部に横位のナデ、上胴部に縦位のヘラケズリ	
第19図	16	G－25B	H-4号住北西			台付甕	－	(5.70)	(8.60)	50.00	普通	橙	細砂粒含	下胴部～台部	縦位の刷毛目	横位の刷毛目
第19図	17	G－25B	H-4号住北西			台付甕	(13.00)	－	(2.00)		普通	にぶい赤褐	細砂粒含	口縁部	横位のナデ、縦位の刷毛目	
第19図	18	G－25B	H-4号住	11	1	甕	(18.00)	－	(10.20)	155.00	普通	にぶい褐	小石、砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部に横位のナデ、上胴部に縦位のヘラケズリ	
第20図	1	G－25B	H-6号住	12	1	坏	(12.80)	－	(3.20)	10.00	良好	橙	砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部～頸部に横位のナデ、胴部に横位のヘラケズリ	横位のナデ
第20図	2	G－25B	H-6号住竈			坏	(13.60)	－	(3.50)	15.00	良好	橙	砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部～胴部に横位のナデ	横位のナデ、ヘラミガキ
第20図	3	G－25B	H-6号住竈			甕	(15.40)	－	(4.50)	40.00	普通	橙	小石、砂粒、細砂粒含	口縁部1/4	口縁部に横位のナデ、頸部に横位のヘラケズリ	
第20図	4	G－25B	H-6号住	8	1	甕	(25.20)	－	(21.00)	335.00	普通	明赤褐	砂粒、細砂粒含	口縁部～胴部	口縁部に横位のナデ、頸部～胴部に縦位のヘラケズリ	
第20図	5	G－25B	H-7号住	2	2	坏	(14.00)	－	(3.80)	10.00	良好	明赤褐	小石、砂粒、細砂粒含	口縁部破片	口縁部に横位のナデ、胴部に横位のヘラケズリ	横位のナデ
第20図	6	G－25B	H-7号住	8	1	坏	(11.20)	－	(2.40)	5.00	良好	にぶい橙	砂粒、細砂粒含	口縁部破片	横位のナデ	横位のナデ
第20図	7	G－25B	H-7号住	1	1	坏	(11.60)	－	(2.80)	10.00	良好	にぶい褐	細砂粒含	口縁部破片	口縁部に横位のナデ、胴部にヘラケズリ	横位のナデ
第20図	8	G－25B	H-7号住	8	1	坏	(14.40)	－	(3.90)	5.00	良好	橙	細砂粒含	口縁部1/12	横位のナデ	横位のナデ
第20図	9	G－25B	H-7号住	8	1	甕	(22.60)	－	(6.20)	85.00	普通	にぶい赤褐	砂粒、細砂粒含	口縁部1/4	口縁部は横位のナデ、上胴部は斜位のヘラケズリ	横位のナデ
第20図	10	G－25B	H-7号住	4	1	小型甕	－	(4.70)	(4.00)	25.00	普通	明赤褐	砂粒、細砂粒含	底部破片	下胴部に縦位のヘラミガキ	
第20図	11	G－25B	H-7号住	7	1	甕	(23.60)	－	(3.20)	50.00	普通	明赤褐	砂粒、細砂粒含	口縁部1/5	口縁部は横位のナデ、頸部に縦位のヘラケズリ	
第20図	12	G－25B	H-7号住P-2			甕	(22.20)	－	(4.80)	35.00	普通	明赤褐	砂粒、細砂粒含	口縁部1/6	口縁部は横位のナデ、頸部に縦位のヘラケズリ	
第20図	13	G－25B	H-7号住	6	1	台付甕？	－	－	－	5.00	普通	淡黄	細砂粒含	胴部破片	縦位の刷毛目	
第20図	14	G－25B	H-7号住	6	1	台付甕？	－	－	－	5.00	普通	にぶい橙	細砂粒含	胴部破片	縦位の刷毛目	

第19表　野毛良遺跡出土の土器観察表

挿図No.	No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	形態	石材	欠損	被熱	長さ	幅	厚さ	重量（g）
第５図	5	BT36	G－25A				打製石斧	2	Sh	Y		52.08	41.51	15.97	36.7
第５図	6	BT37	G－25A				SCB	2両刃	Sh			43.59	64.74	9.1	29.7
第５図	7	C1T28	G－25A	M－2	6		凹石	3b	Sc	Y		114.74	51.53	27.2	211.8
第５図	8	C1T29	G－25A	H－1	14	2	石皿	2a	An	Y		139.87	193.34	65.05	2783.9
第12図	5	BT47	G－25B				打製石斧	1	Sh			81.96	40.95	20.52	88.7
第12図	6	BT45	G－25B	南東サブトレンチ			打製石斧	2	Sh	Y		43.24	40.58	11.19	25.4
第12図	7	C1T30	G－25B	H－2	3	1	磨石	1	An			84.27	82.95	69.33	600.7
第12図	8	C1T34	G－25B	H－8	8	1	凹石	3b	An	Y		113.23	55.02	48.34	517.6
第29図	1	AT3	G－25C	J－1　P－1			石鏃未成品		Ob			17.56	12.83	2.84	0.7
第29図	2	AT2	G－25C	J－1	16	下層	石錐	2a	Ob	Y		22.15	17.02	7.28	2.3
第29図	3	AT1	G－25C	J－1	11	下層	石匙A	2a	Ob	Y		32.55	26.2	6.69	4.8
第29図	4	AT9	G－25C	J－1	16	下層	SCA	1a片刃	BAn			26.26	42.24	9.38	14.2
第29図	5	AT7	G－25C	J－1	1	上層	SCA	1b片刃	BAn			72.63	69.29	14.06	69.2
第29図	6	AT4	G－25C	J－1	10	上層	SCA	3	BAn			39.17	65.33	10.68	28.1
第29図	7	BT4	G－25C	J－1　P－3			打製石斧	2	Sh			115.56	54.56	25.84	190.4
第29図	8	BT48	G－25C	J－1	1	上層	打製石斧	2	Sh			71.05	50.48	18.92	89.3
第29図	9	BT18+51	G－25C	J－1	10·14	上層	石匙B	1a	Sh		Y	85.89	44.23	10.98	43.2
第29図	10	BT2	G－25C	J－1	1	北	石匙B	2a	Sh			51.28	42.47	6.65	16.7
第29図	11	BT9	G－25C	J－1	11	上層	石匙B	2a	Sh	Y		57.08	48.83	11.14	23.1
第30図	1	BT5	G－25C	J－1	16	下層	SCB	3	Sh			31.25	70.9	11.09	25.7
第30図	2	BT19	G－25C	J－1	12	壁溝	SCB	1b片刃	Sh			72.73	65.82	15.37	74.1
第30図	3	BT41	G－25C	J－1	1	下層	SCB	1b片刃	Sh			47.32	70.41	17.8	66.8
第30図	4	BT50	G－25C	J－1	14	下層	SCB	2両刃	Sh			58.57	70.38	20.64	127.7
第30図	5	BT27	G－25C	J－1	5	上層	SCB	2両刃	Sh			45.29	70.03	18.67	54.9
第30図	6	BT12	G－25C	J－1	10	下層	SCB	2両刃	Sh			127.03	30.53	25.71	97.2
第30図	7	BT53	G－25C	J－1	12	下層	SCB	2片刃	Sh			47.26	55.4	13.95	50.8
第30図	8	BT25	G－25C	J－1	14	下層	SCB	2両刃	Sh			54.22	38.78	9.11	29.3
第30図	9	BT20	G－25C	J－1	8	下層	SCB	2片刃	Sh			51.75	56.09	14.54	61.5
第30図	10	BT8	G－25C	J－1	16	下層	SCB	2片刃	Sh			62.88	114.04	15.84	142.2
第30図	11	BT16	G－25C	J－1	16	下層	SCB	2片刃	Sh			31.87	54.66	10.88	19.2
第30図	12	BT42	G－25C	J－1	1	下層	SCB	2片刃	Sh			40.24	71.48	8.26	27.4
第30図	13	BT15	G－25C	J－1	6	上層	SCB	2片刃	Sh			48.42	69.52	18.49	52.3

第20表　日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡出土の石器観察表

挿図No.	No.	番号	遺跡名	遺構名	区	層	器種	形態	石材	欠損	被熱	長さ	幅	厚さ	重量（g）
第30図	14	BT3	G－25C	J－1　P－3			SCB	2片刃	Sh			64.29	140.57	21.54	222.0
第30図	15	BT24	G－25C	J－1　P－6			SCB	3	Sh			54.65	75.62	15.72	86.5
第30図	16	BT11	G－25C	J－1	13	下層	SCB	3	Sh			52.08	73.43	13.87	39.8
第30図	17	BT23	G－25C	J－1	10	下層	SCB	3	Sh			51.87	66.27	8.77	31.8
第30図	18	BT43	G－25C	J－1	1	下層	SCB	3	Sh			72.05	29.42	12.56	27.0
第31図	1	C1T10	G－25C	J－1	11	下層	磨石	1	An			90.56	93.2	40.96	499.2
第31図	2	C1T11	G－25C	J－1	6	下層	特殊磨石		An			68.11	57.91	53.95	366.9
第31図	3	C1T13	G－25C	J－1		下層	凹石	1b	An		Y	113.31	93.84	45.22	657.1
第31図	4	C1T8	G－25C	J－1　P－11			凹石	2b	An			115.43	80.94	48.19	611.9
第31図	5	C1T7	G－25C	J－1	2	下層	凹石	2b	Sc	Y		104.25	71.32	35.99	427.9
第31図	6	C1T12	G－25C	J－1	16	壁溝	凹石	2b	An	Y		108.72	81.67	35.93	484.5
第31図	7	C1T14	G－25C	J－1	5	上層	凹石	2b	An		Y	101	80.52	39.04	426.1
第31図	8	C1T38	G－25C	J－1	6	下層	石皿	2a	Sc	Y		388.11	350.63	63.90	12500.0
第31図	9	C1T32	G－25C	J－1	1	下層	石皿	2a	An	Y		90.05	117.59	53.29	617.8
第31図	10	C2T5	G－25C	J－1	16	壁溝	敲石	2	Sh			77.24	33.17	18.19	66.0
第31図	11	C2T6	G－25C	J－1	12	下層	敲石	5	HSS	Y		97.03	66.81	22.64	209.1
第31図	12	BT26	G－25C	J－1　P－2			SCB	2片刃	Sh			69.09	38.97	10.06	39.2
第31図	13	ET1	G－25C	J－1	5	上層	磨製石斧	2a	GrR	Y		57.55	34.91	14.69	47.6
第32図	1	BT49	G－25C北	D－7			打製石斧	2	An	Y		100.98	42.12	15.78	102.7
第32図	2	BT35	G－25C北		A2c	Ⅳa層	石匙B	1a	Sh			79.39	31.16	11.74	36.9
第32図	3	BT32	G－25C北		A2d	Ⅳa層	SCB	2両刃	Sh			60.03	81.9	13.45	61.9
第32図	4	BT28	G－25C北		A2a	Ⅳa層	SCB	2片刃	Sh			47.71	90.21	12.65	67.5
第32図	5	BT29	G－25C北		A2b	Ⅳa層	SCB	3	Sh			89.47	61.63	22.46	94.8
第32図	6	C1T18	G－25C北		A2a	Ⅳa層	磨石	5	An			100.05	93.9	46.44	667.3
第32図	7	C1T16	G－25C北		A2a	Ⅳa層	凹石	2a	An			104.64	60.45	42.47	400.5
第32図	8	C1T15	G－25C北		A2a	Ⅳb層	凹石	2b	An			144.51	86.81	26.59	466.5
第32図	9	C1T25	G－25C北		B2d	Ⅳa層	凹石	2b	An			120.17	82.85	42.48	528.1
第32図	10	DT3	G－25C北		A2d	Ⅳa層	棒状礫		SC	Y		94.46	36.83	24.68	120.9
第32図	11	BT30	G－25C	Y－1	16	床直	SCB	2片刃	Sh			86.59	45.67	16.51	92.7
第32図	12	C2T3	G－25C	Y－1	12	3	砥石	1	SS			103.54	63.77	19.82	127.8

第21表　山峰遺跡出土の石器観察表

Ⅷ　成果と問題点

（１）山峰遺跡における縄文時代前期中葉の様相について

山峰遺跡では縄文時代前期中葉の住居址１軒と土坑・ピット群がそれぞれ異なる調査区で検出されており、主体は有尾式期である。しかし、今回の調査は鉄塔部分２カ所のみと限定されたものであり、遺跡全体の様相について言及できる内容を有していない。そこで、ここでは遺跡の内容を整理し、遺跡のセトルメントを中心に簡単にまとめておきたい。

立地　山峰遺跡は北東方向へ延びる丘陵性の舌状台地の先端部に位置しており、四方への眺望は極めて良好な場所を選地している。しかし、台地の幅は狭く、大規模な集落遺跡を形成するにはやや不十分な広さである。むしろ、小規模な狩猟キャンプ的な集落を形成するのには適地と推定される。

時期　本遺跡出土土器群の編年的位置は、大形菱形文の文様構成などの特徴から、有尾式期でも中段階以前と捉えることができる。同時期の遺跡としては大下原遺跡がある。この遺跡の土器群は本遺跡の土器群と非常に似通っている点で注目される。

石器群の様相　この時期の石器群について瞥見してみよう。Ｊ－１号住居址出土の石器群では、押圧剥離系列（Ａ類）の器種が非常に少ない。そして、直接打撃系列（Ｂ類）では石匙Ｂ類・スクレイパーＢ類が大部分を占めている。また、使用痕・形状選択系列（Ｃ１類）の出土量は比較的少ない。こうした石器組成の在り方は、吉田原遺跡Ｊ－３号住（黒浜式期）、同Ｊ－４号住（関山Ⅱ式期）、中原遺跡Ｊ－６号住（有尾式期）の事例に類似している。ここでみられる押圧剥離系列の器種（石鏃など）が少ない傾向も、これらの事例と共通しており、前期中葉のこの地域における一般的な様相と判断される。このように石器群の様相をみる限り、小規模な狩猟活動や植物採集を行いながら、頻繁に移動を繰り返す生活様式をもった集団が残した小規模な集落の一つであったと推定される。

居住形態　本遺跡で唯一検出されたＪ－１号住居址は、「方形壁溝全周型」であり、有尾式期に特徴的な住居形態である。中野谷松原遺跡のような拠点集落では、頻繁に拡張や建て替えが行われているが、ここではこうした状況は認められない。この事例からすれば、比較的短期間

営まれた小規模なキャンプサイト的様相を示している。また、北調査区では、土坑・ピットが密集して検出されている。大下原遺跡においても同様な土坑群が存在しており、少数の住居址と小規模な土坑群・ピット群によって構成されている。おそらく、山峰遺跡も同様な遺構構成の集落であったと推定される。こうした内容から、本遺跡の居住形態（セトルメント）は、小林達雄氏の集落分類（小林　1980）のパターンＣに該当する。

周辺遺跡との関係　山峰遺跡周辺に存在する同時期の周辺遺跡はどのような集落遺跡を形成しているか検討してみよう。同時期（有尾式中段階）の遺跡としては、本文中でも再三触れてきた大下原遺跡がある。この遺跡は本遺跡の南西約3.8kmの場所にある。また、これよりやや古い時期であるが、有尾式古段階の遺跡としては、南西4.6kmの位置には中野谷松原遺跡(註1)があり、北西3.9kmの場所に清水遺跡がある。これらの遺跡は、いずれもパターンＣに相当する集落形態である。

このように前期中葉（有尾古～中段階）では、パターンＣの内容をもった等質的な小規模な集落遺跡が２～４km程度の間隔をおいて存在していることが分かる。また、これらの遺跡における石器石材の種類と組成をみても、基本的に鏑川・碓氷川流域の石材が同じ傾向をもって選択されており、ほぼ等質的な内容である。それとともに、遠隔地石材の流入は少量の黒曜石以外ほとんど認められない。石材の入手と消費は一定の地域内で閉鎖的かつ一元的に行われていた可能性が高い。

ここで認められる限定された地域内で等質的な内容の集落が点在する在り方は、ある種の紐帯関係によって結びついた集団による移動の軌跡として捉えることが可能である。つまり、前期中葉段階に至っても、この地域においては小規模な集落を基本的な単位として、頻繁に移動を繰り返す生活様式であったと考えられる。

まとめ　以上述べてきたように、前期中葉段階では本遺跡のような移動性の高い小規模な集落（パターンＣ）が一定地域内で連鎖するセトルメントパターン（居住形態）であったことが推定される。これは基本的には前期前葉段階の在り方と大きな違いは認められない。(註2)しかし、この直後の前期後葉（諸磯ｂ式期）には、この地域にも中野谷松原遺跡・大下原遺跡においての定住型の大規模な拠点集落が形成されており、大きな画期が存在していたことが明らかになりつつある。この生活様式の大転換がどのような要因によって生じたか、については縄文時代研究の大きな課題である。

（大工原　豊）

註１　中野谷松原遺跡は前期後葉の大規模な拠点集落であるが、有尾古段階では、山峰遺跡と同じパターンＣに分類される小規模な集落が調査区の西側に営まれている。詳細は『中野谷松原遺跡－遺物本文編』（1998年）を参照されたい。

註２　前期前葉の居住形態については、『中野谷地区遺跡群－本文編』（1994年）の中で中原遺跡・東畑遺跡の事例を用いて、多角的に検討を行っているので、これを参照されたい。

小林達雄　1980「縄文時代の集落」『國史學』110・111

大工原豊・関根慎二　1994「縄文時代前期前葉の集落について」『中野谷地区遺跡群－本文編』安中市教育委員会

（２）日向後原遺跡の古墳について

日向後原遺跡で検出されたＭ－２号溝はその形状から古墳（Ｋ－１号墳）の周堀の一部と考えられる。しかし、調査区は鉄塔の基礎部分であり、Ｋ－１号墳の全体像をつかむまでには至らなかった。そこで、このＫ－１号墳とその周堀であるＭ－２号溝の内容を整理し、その性格について検討してみたい。

立地　日向後原遺跡は、碓氷川上位段丘末端の東西に細長く続く丘陵状地形の最高所に立地している。このあたりは長さ約250ｍ×幅約50ｍの平坦面となっている。この平坦面の南東側は段丘崖となっており、下には天神川が流れている。また、北西側は緩斜面となっている。

時期　遺物としては、Ｍ－２号溝３区から出土した坩がある（第８図１）。これは堤東遺跡２号周溝墓後方部東側周溝出土の坩の形態及び技法に類似している。このことからＫ－１号墳の築造は４世紀後半と考えられる。

形態　Ｍ－２号溝は断面がレを折り返したような形をしており、平面形は逆Ｌ字形を呈している（第６図）。この堀の断面形態は荒砥北部遺跡群中山Ａ遺跡１号周溝墓（Ｆ３）や東原Ｂ遺跡14号周溝墓（Ｆ３）・16号周溝墓（Ｆ３）や荒砥二之堰遺跡第４号方形周溝墓（Ｄ１）・第５号方形周溝墓（Ｄ１）・第６号方形周溝墓（Ｄ１）の断面と類似している（註１）。

規模　Ｍ－２号溝は直線部が約９ｍ、そこから西に屈曲して約２ｍで調査区の壁となる。また、Ｍ－２号溝直線部が北側の調査区の壁に消えているところから調査区の西端まで約３ｍである。

全体像の推定　日向後原遺跡のＫ－１号墳は円墳でないのは明らかであるが、方墳あるいは前方後方墳の形態が考えられる。しかし、これ以上の推定はＫ－１号墳の検出状況から無理があ

るので、判断を留保したい。

市内の類例遺構　現在のところ、碓氷川下位段丘に位置する田中田・久保田遺跡の「ＨＫ－１号方形周溝墓」(註2)であり、５世紀前半の築造である。規模は東西９．４ｍ、南北７．１ｍであり、方墳である。また、墳丘上から土壙２基（Ｄ－１、Ｄ－３）、墳丘から周溝にかかるような土壙１基（Ｄ－２）、周溝内から土壙３基（Ｄ－４、Ｄ－５、Ｄ－６）の計６基を検出した。

他遺跡との関連　田中田・久保田遺跡「ＨＫ－１号方形周溝墓」の北方の碓氷川右岸には５世紀終末～６世紀初頭の築造と考えられる塩ノ久保Ｋ－１号墳(註3)があり、南方の碓氷川上位段丘上には４世紀後半～５世紀初頭の長谷津八幡山古墳（旧磯部町２号墳）がある。また、日向後原遺跡Ｋ－１号墳の南方の上間仁田には５世紀前半の築造と考えられる経塚古墳がある。このように、現在のところ安中市で碓氷川より南側で竪穴式石室を持つ古墳が分布している。すなわち、安中市で古墳の築造が始められたのは碓氷川より南側だと考えられる。今回発掘調査した日向後原遺跡Ｋ－１号墳や田中田・久保田遺跡「ＨＫ－１号方形周溝墓」は安中市における古墳の出現を考える資料となると見られる。

まとめ　以上みてきたように、日向後原遺跡のＫ－１号墳や田中田・久保田遺跡「ＨＫ－１号方形周溝墓」は安中市に古墳が出現した頃の様相を示す遺構として考えることができる。また、長谷津八幡山古墳や経塚古墳のような竪穴式石室を持つ古墳との関連を考えていく必要があると思われる。

（深町　真）

註１　関東地方の周溝墓については、伊藤敏行氏が類型化している（伊藤敏行　1996　「第三部第四章　個別形態論」『関東の方形周溝墓』Ｐ365～376　同成社）が、周溝の形態差からＡからＧに分類し、それぞれを１～３の三つに分ける。Ａ１～Ａ３は四隅切系、Ｃ１は一隅切系、Ｂ１・Ｃ２が二隅切系、Ｄ１・Ｄ２は全周系、Ｅ１～Ｅ３が中央陸橋系、Ｆ１～Ｆ３が前方後方型系、Ｇ１～Ｇ３が円形系で、Ｂ２、Ｂ３、Ｃ３、Ｄ３は中間形態である。この分類に従うと、田中田・久保田遺跡「ＨＫ－１号方形周溝墓」はＥ１に分類される。この周溝墓あるいは方形周溝墓と古墳の区分はいろいろ説があるが、日向後原遺跡Ｋ－１号墳も田中田・久保田遺跡「ＨＫ－１方形周溝墓」が築造されたのは、すでに２ｍ以上の墳丘を持つ高塚系の前方後円墳や前方後方墳が存在していた時期であり、都出比呂志氏の説かれている前方後円墳体制の中に組み込まれているという意味で古墳（低墳丘古墳）として考える。

註２　大工原豊　1992『田中田・久保田遺跡』安中市教育委員会

註３　大工原豊・加部二生　1991　『塩ノ久保遺跡』安中市教育委員会

引用文献・参考文献

縄文時代

大工原豊・金井京子・和田宏子他　1993　『大下原遺跡・吉田原遺跡』　安中市教育委員会
大工原豊・関根慎二・林克彦他　1994　『中野谷地区遺跡群』　安中市教育委員会
大工原豊・関根慎二・金井京子・林克彦他　1996　『落合Ⅱ遺跡・平塚遺跡・三本木Ⅱ遺跡・三本木Ⅲ遺跡』　安中市教育委員会
大工原　豊　1996　『中野谷松原遺跡－縄文時代遺構編－』　安中市教育委員会
小野和之・巾隆之・白石典之・大塚昌之・鳥羽政之・山田八重子・都丸肇・茂木充視　1985　『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』　赤城村教育委員会・群馬県教育委員会
井川達雄・長井正欣　1996　『清水Ⅰ遺跡』　原市第一県営住宅遺跡調査会
大工原　豊　1996　「（２）石器」『考古學雑誌』第82巻第２号ｐ26～36　日本考古學會

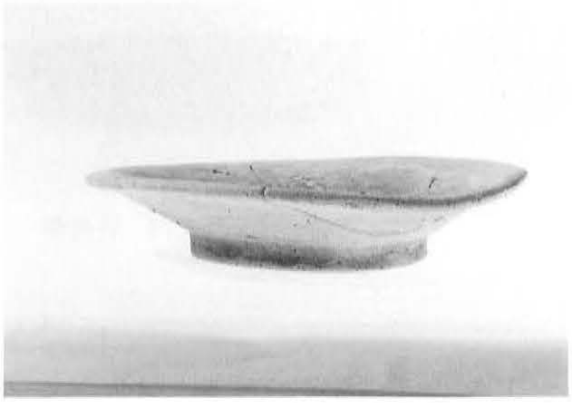
弥生時代

飯島克巳・若狭徹　1988　「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第９号Ｐ28～51
山岸良二編　1996　『関東の方形周溝墓』　同成社
若狭徹他　1998　『人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流－』　かみつけの里博物館
千田茂雄　1995　『荒神平・吹上遺跡』　安中市教育委員会
佐藤明人　1990　『有馬遺跡Ⅱ　弥生・古墳時代編』　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
依田治雄・木村収・櫻井美枝・右島和夫　『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団

古墳時代以降

飯島義雄　1998　「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要第19号』Ｐ65～78　群馬県立歴史博物館
坂口一・三浦京子　1986　「奈良・平安時代の土器の編年－住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討－」『群馬県史研究24』P18～55　群馬県
坂口一　1986　「古墳時代後期の土器の編年－三ツ寺Ⅲ遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係－」『群馬文化208』P13～30　群馬県地域文化研究協議会
都出比呂志　1986　「墳墓」『岩波講座　日本考古学４』ｐ217～267　岩波書店

都出比呂志　1992　「墳丘の型式」『古墳時代の研究７　古墳Ⅰ　墳丘と内部構造』ｐ15～38　雄山閣
友廣哲也　1991　「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳Vol．２』　群馬土器観会
大工原豊・加部二生　1991　『塩ノ久保遺跡』　安中市教育委員会
大工原豊　1992『田中田・久保田遺跡』　安中市教育委員会
荒巻実・櫻井孝・志村哲・田野倉武男・古郡正志・前原豊・丸山治雄・茂木努　1982　『Ａ１堀ノ内遺跡群』　藤岡市教育委員会
飯塚卓二・女屋和志雄・関根慎二・森田秀策他　1990　『熊野堂遺跡（２）』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
井上唯雄・松田猛・松村和男他　1985　『堤東遺跡』　群馬県教育委員会
井上唯雄・石坂茂・徳江秀夫　1985　『荒砥二之堰遺跡』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
梅沢重昭・細野雅男・石坂茂・坂口一・藤巻幸男・小島敦子・鹿沼敏子　1986　『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
折原洋一・桐谷優・平岡和夫　1988　『昭和62年度荒砥北部地区遺跡群発掘調査概報』　荒砥北部遺跡群調査会・群馬県教育委員会
中沢悟　1996　『矢田遺跡Ⅵ』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
中沢悟　1997　『矢田遺跡Ⅶ』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
右島和夫・徳田誠志　1998　「東国における石製模造品古墳－高崎一号墳の基礎調査から－」『高崎市史研究９』P1～P36　高崎市



Ｈ－１号住８区床直　高台付皿

Ｈ－２号住２トレンチ　坏

Ｈ－２号住16区１層　坏

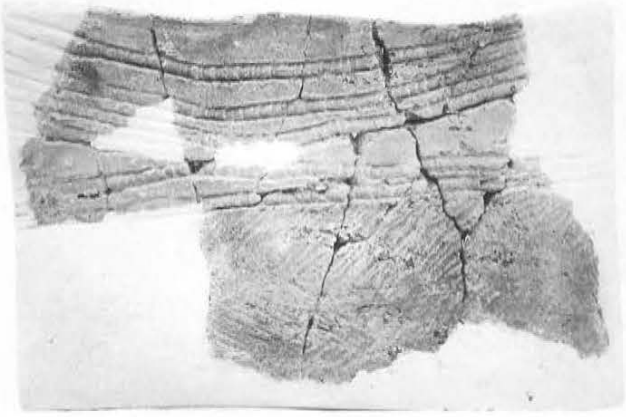
H－4号住11区1層　坏

H－4号住北西　台付甕

H－4号住北西　台付甕

H－4号住11区1層　高坏

H－6号住8区1層　甕

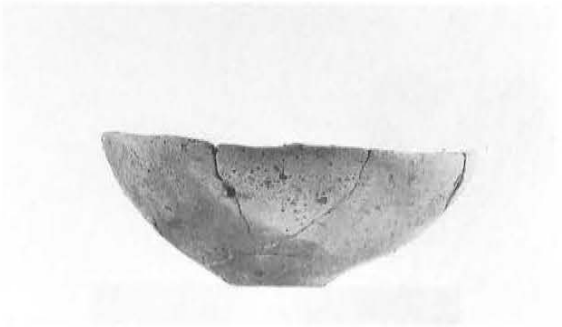


Ｊ－１号住６区上層　深鉢

Ｊ－１号住１区上層　深鉢

Ｊ－１号住６区下層　深鉢

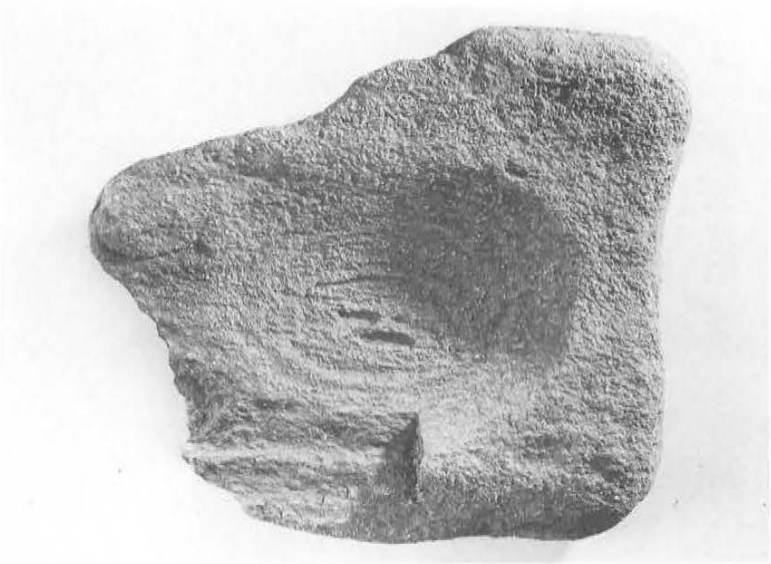
Y－1号住12区床直　壺



Y－1号住12区3層　鉢

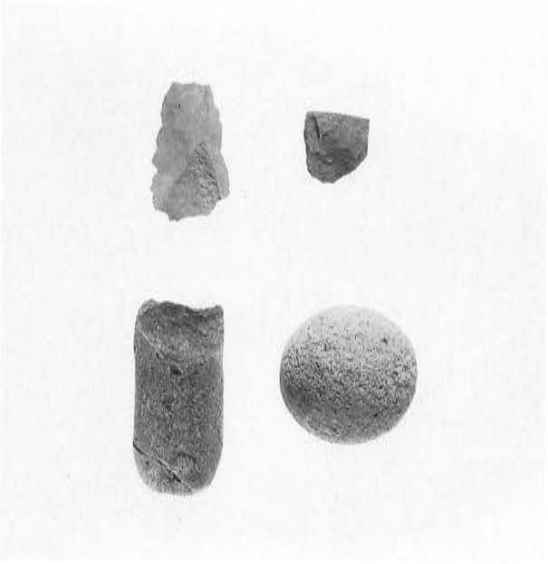
Y－1号住8区3層　高坏

山峰遺跡北調査区Ｂ１ｂグリッドⅣａ層　深鉢



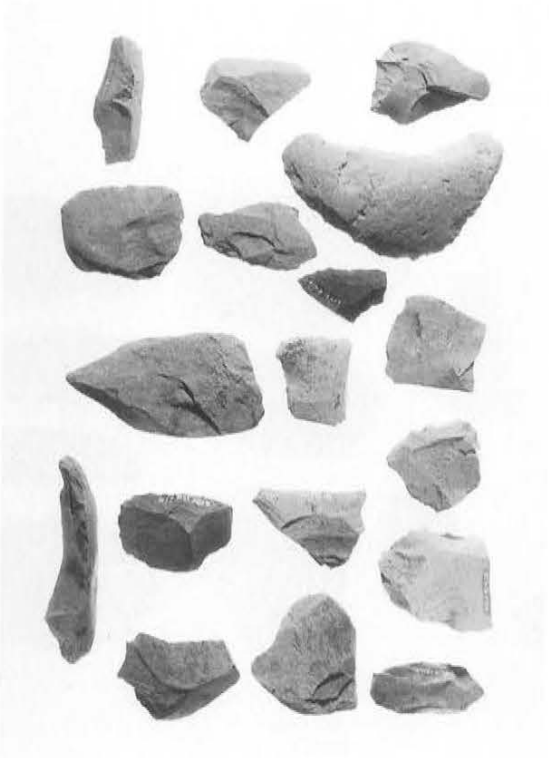
Ｊ－１号住６区下層　石皿

日向後原遺跡出土の石器



野毛良遺跡出土の石器

Ｊ－１号住居址出土の石器　(1)



Ｊ－１号住居址出土の石器　(2)

北調査区およびＹ－１号住居址出土の石器

Ｊ－１号住居址出土の石器　(3)

抄　　録

ふりがな	ひなたうしろはらいせき・のけらいせき・やまみねいせき
書名	日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡
副書名	東京電力送電用鉄塔建設工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	深町　真・大工原　豊・井上慎也・中澤信忠
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒379－0192　群馬県安中市安中一丁目23－13
発行年月日	西暦1998年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひなたうしろはらいせき 日向後原遺跡	あんなかししもまにた 安中市下間仁田 あざひなたうしろはら 字日向後原	102113	G-25A	36°18′5″	138°54′1″	19960122- 19960131	196㎡	送電用鉄塔建設
のけらいせき 野毛良遺跡	あざのけら 字野毛良	102113	G-25B	36°18′12″	138°54′8″	19960124- 19960214	144㎡	同上
やまみねいせき 山峰遺跡	あざやまみね 字山峰	102113	G-25C	36°18′29″	138°54′22″	19960126- 19960216	185㎡	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日向後原遺跡	その他 古墳 集落 その他	縄文時代中期 古墳時代前期 平安時代 時期不明	土坑　2 古墳　1 周堀　1 住居址　1 土坑　2 ピット多数 溝　1	縄文土器・土師器・須恵器・石器	
野毛良遺跡	集落	古墳時代前期・後期	住居址　8	縄文土器・土師器・須恵器・石器	
山峰遺跡	集落 広場 集落 その他	縄文時代前期中葉 弥生時代末期 時期不明	住居址　1 土坑　11 ピット多数 住居址　1 土坑　1 溝　1	縄文土器・弥生土器・石器・礫	

日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡

－東京電力送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書－

印刷　平成10年９月30日

発行　平成10年９月30日

編集　安中市埋蔵文化財発掘調査団

発行　安中市埋蔵文化財発掘調査団

印刷　サカエ印刷